

岩手県文化財調査報告書第32集

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

— II —

昭和 54 年 3 月

岩手県教育委員会
日本道路公団

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 正誤表

岩手県文化財調査報告書第32集

遺跡名	頁	行(上から)	誤	正	
序		6	大動脈	大動脈	
下羽場遺跡	15	8	堆積 ^点 度	堆積土以下「堆」とある部分は「堆」と訂正	
	16	20	1.5 m	1.5 cm	
	60	第 24 - 1 図	堅穴住居跡	堅穴住居跡以下「堅」とある部分は「堅」と訂正	
	73	10	口縁	口縁	
	84	4	緻密	緻密	
	84・109・110	8・20・8		口縁	口縁
		96	6	周溝	周溝
		112	10	酸化焙焼 ^成	酸化焙焼成
		121	3	紫波郡・平底風瓦	紫波郡・平底風
		123	15	類似	類似
		127	6・20	無調整・緑釉陶器	無調整・緑釉陶器
		136	3・27	西へ117.26 m～113.06 mの地点	西へ117.26 m～122.92 m、北へ105.6 m～113.06 mの地点
		146	4	内外黒色 ^点 坏	内外黒色坏
146		6・26	体下端と底部を調整・体部下 ^点 半と底部に回転	体下端と底部外面を調整・体部下半と底部外面に回転	
152		7	(8図7) 縦10.3～	(8図7) 一方の端欠損、縦10.3～	
158	5	奥行100 mで	奥行100 cmで		
162	第1表・第2表		規模の単位はm		
163	16	還元炎焼成	還元炎焼成		
165	3	直刀と砥石がみられる	直刀と砥石破片がみられる		
湯沢 B	169	3	県道三本柳一湯本線	県道三本柳一湯沢線	
	175	17～20	10 Y R	上から順に10 Y Rの次に2/1 2/2 2/1 3/1	
	181	2	北2.58 m～14.95	北2.58 m～14.95 m	
	199	2	ほぼ東南東一西南西	ほぼ東北東一西南西	
	200	1～10	10 Y R	上から順にY Rの次に2/2 2/1 1.7/1 2/2 2/2 3/2 2/1 6/4 2/2 3/2	
	202	遺構・遺物一覧表	溝状土塼	溝状土塼	
	203	7	還元炎焼成	還元炎焼成	
	214	11→12	東南東向きである。	南東向きである。	
	218	1	黒褐色腐植土	黒褐色腐植土	
	220	21～23	10 Y R	上から順に10 Y Rの次に2/2 6/4 2/2	
稲荷	221	第6図中の断面	D	C D	
	222	12	完成品	完成品以下「成」とある部分は「形」と訂正	
	224	31	6・7・9の3である	6・7・9の3基である	
	226	5	1個体ずつ底面を	1個体ずつ外面を	
	235	第1表の最下段	7号溝状土塼と切合	5号溝状土塼と切合	

	199	2	ほぼ東南東-西南西	ほぼ東北東-西南西
	200	1 ~ 10	10 Y R	上から順に10 Y Rの次に2/2 2/1 1.7/1 2/2 2/2 2/1 2/1 2/2 2/2
	202	遺構・遺物一覧表	溝状工痕	溝状土痕
	203	7	還元炎焼成	還元炎焼成
	214	11 → 12	東南東向きである。	南東向きである。
	218	1	黒褐色腐植土	黒褐色腐植土
	220	21 ~ 23	10 Y R	上から順に10 Y Rの次に2/2 6/4 2/2
	221	第 6 図中の断面	D	C D
	222	12	完成品	完成品以下「成」とある部分は「形」と訂正
	224	31	6・7・9の3である	6・7・9の3基である
	226	5	1個体ずつ底面を	1個体ずつ外底面を
	235	第 1 表の最下段	7号溝状土痕と切合	5号溝状土痕と切合
	237	5	還元炎焼成	還元炎焼成
一本松	244	第 3 図の地表面		左端がS右端がN
	244・245・251	6・4・4	} 火山灰	シルト
	255	8・8・11		
	259・263・268	4・4・4		
	272・279	4・3		
	285・288・289	3 4・3・15		
	247	32	外底部は上底きみである	外底部は中心部が凸
	248	8	底部は平底である	底部は平担である。
	270	5	硬質砂粘	硬質砂粒
	274	20・26	回転糸切り糸切痕・E類が不明	回転糸切り痕・E類が不明
	275	12・13	下端に急に屈曲・灰オリーブ色の輪が	下端が急に屈曲・灰オリーブ色の灰輪が
	281	10	推定口径約 18.0 cm	推定口径約 18.0 cm
	286	24・26	残存で、底径で、底径・完成品	残存で、底径・完成品
	288	17	その下端から	その底面から
	290	3	シルト質土層の下と	シルト質土の下から
	291	第 27 図		スケールの単位cm
	292	第 3 表の最下段	南壁南端	東壁南端
	296	7	重複	重複
大渡野	311	31	「屋外」	「屋内」
	372	26	らしい。	らしい。
宮田 B	436	2	1, 120 m	1, 120 m
久保屋敷	461	25	長さ径 7 寸	長さ 7 寸
	464	24	桁行	梁行
	467	第 14 図	東廂梁行柱間寸法南から 2.2 2.2 2.8	1.97 2.64 1.97
	467	15	東廂は桁行 21.2 m	東廂は桁行 21.2 m
	467	16	1.97 m + 2.64 cm + 1.97 m	1.97 m + 2.64 m + 1.97 m
	474	5	建物群	建物群

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

— II —

序

本県には、原始・古代から各時代にわたって数多くの遺跡があることは周知のとおりであります。これらの遺跡は、先人のたゆまぬ努力の中から培われ育まれてきた文化遺産であります。この貴重な文化遺産を保存し活用するとともに、未来に伝えることは、現代に生きる私達の大きな責務と考えます。近年、地域開発事業が進展するにつれて、これに関連する文化財の保護が重要施策の一環として重視されてきたのも当然のことといえます。

産業・経済開発の大動派として、各方面から期待を寄せられている東北縦貫自動車道の建設が、昭和40年、仙台・盛岡間の基本計画に始まり、昭和43年の施行命令によって具体化され、昭和52年11月には一関・盛岡間110kmが開通されました。現在は更に、秋田県境へと工事が進んでおります。

この東北縦貫自動車道は、きょく力遺跡を避けるように計画されましたが、調査の結果、新たに発見された遺跡を含めて、最終的には、一関・西根間140kmで、99遺跡が調査の対象となりました。発掘調査は、文化庁と日本道路公団との覚え書にもとづいて、日本道路公団仙台建設局からの委託事業として岩手県教育委員会が調査主体となり、関係各方面の御協力を得て、昭和47年から実施してまいりました。

この調査によって県南から県中央部の歴史解明に数多くの貴重な資料を得ることができました。本報告書は、調査した99遺跡のうち矢巾地区12遺跡について、第2分冊として取り上げ、刊行するものでありますが、いささかでも埋蔵文化財の活用と学術研究のために役立つことができれば幸いです。

ここに、調査について長期間にわたり御援助・御協力いただいた地元教育委員会をはじめ関係各位に対し心から感謝申し上げます。

昭和54年3月

岩手県教育委員会

教育長 畑 山 新 信

例 言

- 1 本書は東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書第2分冊として、矢巾地区（都南村・矢巾町）所在の12遺跡について作成したものである。
調査は昭和49年度から51年度（一本松遺跡の一部は昭和48年度）に実施されたものである。
- 2 遺跡の記載は北から順に編集した。（宮田A・B遺跡は記述の関係上、南から記載した）
- 3 調査および整理にあたって、次の方々と機関のご教示を賜った。（敬称略・順不同）
田中喜多美（県文化財審議員） 板橋源（県文化財審議員） 草間俊一（県文化財審議員
岩手大学） 林謙作（北海道大学文学部） 清水芳裕（京都大学文学部） 吉田義昭（盛岡市教育委員会） 池田俊夫（岩手大学工学部） 江坂輝弥（慶応大学文学部） 藤沼邦彦（東北歴史資料館） 加藤道夫（宮城県文化財保護課） 伊藤鉄夫（水沢市） 青森県教育庁文化課 青森県立郷土館 秋田県立博物館 秋田県教育委員会弘田柵調査事務所 宮城県教育委員会文化財保護課 東北歴史資料館 宮城教育大学（財）岩手県埋蔵文化財センター 盛岡市教育委員会 一戸町教育委員会 二戸市教育委員会 水沢市教育委員会 北上市教育委員会
- 4 資料の鑑定、分析等については、次の方々と機関のご教示、ご協力を賜った。（敬称略・順不同）
・石材鑑定 佐藤二郎（岩手県立杜陵高等学校）・獣骨鑑定 見上晋一・兼松重任（岩手大学農学部獣医学科）・樹種鑑定 吉田栄一（岩手大学農学部林学科）・火山灰 橋行一（岩手大学教育学部）・緑軸鑑定 柄崎彰一（名古屋大学）・種子鑑定 村井三郎（県文化財審議員）・カーボンディティン グ 日本アイソトープ協会・土器胎土分析 岩手県工業試験場
- 5 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図・20万分の1地勢図を、空中写真は、日本道路公団の2万5千分の1を使用した。
- 6 グリッド配置図は、日本道路公団作成による「TOHOKU EXPRESSWAY PLAN」図を使用し、遺跡・遺構等の方向表示は同図の第10系座標系の北方向である。
- 7 遺跡における層相の色調観察は、小山・竹原編著「新版 標準土色帖」日本色研事業（株）を使用した。
- 8 遺物・写真・実測図等の資料は岩手県教育委員会事務局文化課において保管している。
- 9 調査主体者 岩手県教育委員会 日本道路公団
- 10 調査担当者 岩手県教育委員会事務局文化課
発掘調査、整理報告書作成担当者（◎執筆者 ○整理のみ関係 ●発掘調査のみ関係）

序文

- 1 経過 吉田努
- 2 調査の方法について 吉田努
- 3 整理について 相原康二

地区概観 相原康二

- 下羽場遺跡 ・勝又国夫 ・瀬川司男 ・三浦謙一 菊池茂樹 ・千葉周秋 ・佐伯研二
・佐藤和男 鈴木ヨネ子 阿部裕子 〇八重樫良宏 〇鈴木明美
- 湯沢A遺跡 〇三上昭 佐藤和男 佐伯研二 ・菊地郁雄 ・阿部省吾
- 湯沢B遺跡 〇三上昭 佐藤和男 佐伯研二 ・島 隆 ・菊地郁雄 ・阿部省吾
- 湯沢C遺跡 ・菊地郁雄 〇三上昭 ・阿部省吾
- 稲荷遺跡 〇三上昭 ・畠山喜一 佐藤和男 佐伯研二 ・菊地郁雄 ・阿部省吾
- 一本松遺跡 〇三上昭 佐藤和男 佐伯研二 ・斉藤淳 ・四井謙吉
- 大渡野遺跡 〇相原康二 勝又国夫 島 隆
- 宮田B遺跡 ・瀬川司男 ・三浦謙一 〇吉田義男
- 宮田A遺跡 ・瀬川司男 ・三浦謙一 〇吉田義男
- 南野遺跡 ・瀬川司男 ・三浦謙一 〇狩野敏男
- 桜屋遺跡 ・菊地郁雄 ・阿部省吾 高橋義介 〇吉田努
- 久保屋敷遺跡 〇菊地郁雄 高橋義介 菊池茂樹 〇渋谷英保 〇佐伯研二

目 次

序 文

- 1 経 過
- 2 調査の方法について
- 3 整理について

本 文

矢 巾 地 区 概 観

- 1 地形概観…………… 3
- 2 調査地周辺の諸「遺跡」とその占地…………… 4

下 羽 場 遺 跡

- I 位置と立地…………… 11
- II 層序と土質…………… 11
- III 発見された遺構と遺物…………… 15
 - 1 竪穴住居跡と出土遺物…………… 15
 - 2 竪穴状遺構・焼土遺構・ビットとその出土遺物…………… 72
 - 3 溝状遺構と出土遺物…………… 90
 - 4 鉞滓分布について…………… 94
- IV 分類と考察…………… 95
 - 1 遺構について…………… 95
 - 2 出土遺物について…………… 102
- V まとめ —総合的な立場から— …… 120
 - 1 県内におけるロクロ成形土器生産の概観について…………… 120
 - 2 本遺跡出現以前の概観…………… 123
 - 3 本遺跡の編年の位置…………… 125

湯 沢 A 遺 跡

- I 遺跡の位置と環境…………… 133
- II 調査の方法と経過…………… 134
- III 発見された遺構と遺物…………… 136
- IV 遺構と出土遺物の検討…………… 161

V 遺跡の構成	163
VI まとめ	164

湯 沢 B 遺 跡

I 遺跡の立地・環境	169
II 調査の方法と経過	170
III 発見された遺構と遺物	172
IV 遺構と出土遺物の検討	201
V 遺跡の構成	202
VI まとめ	203

湯 沢 C 遺 跡

1 遺跡の位置と環境	207
2 調査の方法と経過	208

稲 荷 遺 跡

I 遺跡の位置と環境	211
II 調査の方法と経過	212
III 発見された遺構と遺物	214
IV 表土などから発見された遺物	234
V 遺構と出土遺物のまとめ	235
VI 遺跡の構成	236
VII まとめ	237

一 本 松 遺 跡

I 遺跡の位置と環境	241
II 調査の方法と経過	242
III 発見された遺構と遺物	245
IV 表土などより発見された遺物	290
V 遺構と出土遺物の検討	292
VI まとめ	296

大 渡 野 遺 跡

I	遺跡の位置と立地	300
II	順序と土質	300
III	検出した遺構と遺物	303
1	縄文時代の遺構と遺物	303
2	弥生時代の遺構と遺物	363
3	歴史時代の遺物	372
4	時代不明の遺構	373
5	まとめ	373
6	出土土器の胎土分析について	373

宮 田 A 遺 跡

1	宮田A・B遺跡の位置と環境	419
2	調査経過	421
3	調査結果	421
(1)	発見された遺構	421
(2)	出土遺物	423
4	まとめ	430

宮 田 B 遺 跡

1	調査の経過	436
2	調査結果	436
(1)	発見された遺構	436
(2)	出土遺物	437
3	まとめ	442

南 野 遺 跡

1	遺跡の位置と立地	447
2	調査経過と結果	447
3	まとめ	448

桜屋遺跡

1 位置と立地	451
2 経過と内容	452
3 遺構	452
4 まとめ	452

久保屋敷遺跡

I 遺跡の位置と立地	455
II 調査の経過と方法	461
III 遺跡の順序	462
IV 検出された遺構と遺物	463
1 遺構	463
2 出土遺物	470
V 考察とまとめ	472

写真図版

下羽場遺跡	497
湯沢A遺跡	535
湯沢B遺跡	545
稲荷遺跡	553
一本松遺跡	561
大渡野遺跡	577
宮田A遺跡	629
宮田B遺跡	633
桜屋遺跡	637
久保屋敷遺跡	641
参考文献	659
岩手県教育委員会事務局文化課職員 一覧（埋蔵文化財関係）	664

序 文

1 経 過

県内の東北縦貫自動車道建設は、昭和40年11月仙台・盛岡間の基本計画の決定に始まり、昭和43年4月の施行命令によって具体化される。

これによって破壊される埋蔵文化財の取扱いについては、文化庁と日本道路公団の覚書により、岩手県教育委員会がおこなうことになった。

まず、一関・盛岡間の路線予定地内の分布調査が、昭和42年及び43年に実施され、昭和45年2月19日水沢・花巻間40km、同年11月25日一関・胆沢間30km、46年2月10日石鳥谷・盛岡間29kmの路線発表がなされたことに伴い、昭和47年8月～9月に、用地巾50mで現地確認調査、同年10月インターチェンジ及び付帯施設予定地内の現地確認調査等が順次実施され、一関・盛岡間の調査対象遺跡は当初82ヶ所確認された。

これらの破壊される遺跡について、できるだけ詳しく調査記録し、遺跡のもつ歴史的価値を永く後世に伝えることを目的とし、昭和47年度に北上市・花巻市・金ヶ崎町所在の遺跡から調査が開始され、用地買収、着工順位に従って順次すすめられた。

この間、調査除外としたもの4ヶ所がある。一関市荻又遺跡は過去の開田による破壊の程度が大きく煙滅、一関市松の木遺跡は宅地化による破壊、衣川村樹形陣場跡は所在位置が路線からはずれる、衣川村二枚貝化石層は遺跡としての調査対象としないことなどの理由による。

また、路線変更によって保存されたのが、平泉町伝護摩堂跡である。この遺跡は奥州平泉文化との関連が考えられ、路線発表後に路線内に所在することが確認され、急遽日本道路公団と協議し、路線を西側に変更した。一方、工事直前もしくは工事中に新しく確認追加されたものに、土取場の和賀町梅ノ木Ⅰ～Ⅶ遺跡、路線内では江釣子村下谷地B遺跡・紫波町墳館遺跡および柳田館遺跡がある。

昭和49年6月20日、盛岡・安代間53kmの路線発表があり、この区間のうち、盛岡・西根（松川まで）間が調査対象の日程にくりこまれ、当初、8遺跡が確認されたが、工事中に滝沢村卯遠坂遺跡が発見追加され、更に紫波インターチェンジの誘致新設に関連し、栗田Ⅰ～Ⅲ遺跡が調査対象となる。

以上のように、一関・西根（松川まで）区間の調査対象遺跡数は、除外、新規発見などによる変動を見て来た。このことは、埋蔵文化財保護の基本の一つとして、分布調査の重要性が改めて問われる一面でもある。結局、調査遺跡数は、第1表のような99遺跡、18市町村におよぶものとなった。

調査をすすめる一方、文化庁、日本道路公団との協議によって、前述の伝護摩堂跡を完全保存したのをはじめ、江釣子村鳩岡崎遺跡の縄文中期の大竪穴住居跡の一部分、水沢市石田遺跡では、奈良時代末から平安時代初期に相当する焼失家屋1棟、紫波町上平沢新田遺跡では、平安時代相当の焼失家屋1棟の路線境検出遺構を一部精査の上、それぞれ埋めもどし現地保存をした。

また、江釣子村猫谷地遺跡の古墳1基、紫波町墳館遺跡の墳墓1基、柳田館遺跡・盛岡市太田方八丁遺跡の一部は、施工方法や設計変更等によって可能な限りの保存策をとった。

しかし、これらの保存遺構や遺跡の管理、活用は今後十分に留意しなければならないものであり、それがなされなければ完全な保存策であったとは言い得ない。

昭和47年度に始まった調査は、昭和53年度の紫波町栗田Ⅲ遺跡を最後に終り、現在、整理作業をすすめているが、東北縦貫自動車道建設の具体化以来、事業をすすめるに当って、終始指導と助言をくださった県内外の協力者、および献身的な協力を得た関係市町村教育委員会、学校、関係諸機関、地元作業員の方々をはじめ各位に改めて敬意を表したい。

なお、西根町以北の東北縦貫自動車道関連遺跡は、(財)岩手県埋蔵文化財センターによって調査されることになり、昭和53年度から実施されている。

2 調査の方法について

(1) 調査対象範囲の選定は、遺跡の中で用地内および付帯施設を含む関連部分は、すべて調査対象とした。更に、当該遺跡周辺の分布調査を可能な限り実施することにつとめ、調査地とそれをとりまく遺跡群との関連解釈の一助に資することとした。

(2) 調査対象全域に次のような地区設定をした。

①地区設定のための原点は、日本道路公団測量の路線内中心杭の任意のものに定め、それと他の中心杭の2点間を見通す直線と、原点を通りこれに直交する直線を座標の基準線とした。

②南北の基準線をもとに、30mを1ブロックとし、北から順にA・B……の記号を付し、これを東西、南北に10等分し3m×3mのグリットを設定、グリット名は北から順にa-j、南北基準線から東方へ50・53・56……。西方へ03・06・09……。の記号を付し、これとブロック記号の組合せで表わした。例えば、Aa03・Aa50のようになる。

(3) 発掘および記録について 発掘調査は絶対にくりかえしの出来ない作業である。特に、緊急調査と言う性格と記録保存を考えると、調査の過程で観察された事項は可能な限り詳細に、しかもすべて客観的データとして記録されねばならないし、記録者の解釈と観察された事実とが混同されぬよう留意しながら①遺構群をひとつのまとまりとして把握すること、文化層が重なっている場合、層序とともにそれぞれの文化層のひろがりを実際に把握すること、更に緊急調査の場合、事後の保存が困難である以上、トレンチによる部分発掘は回避すべきで

あることからグリット設定にもとづく平面発掘につとめた。

②原則として3 m×3 mのグリットで、調査地における遺物・遺構の分布状況を把握するため、「ちどり」状に人力による粗掘をすることにしたが、結果的に機械力の導入も多かった。遺物・遺構の検出を見た場合、その具体的内容を究明するため必要な範囲の全面発掘を実施した。

③遺構が検出された場合、該当グリット名を付した。その場合もつとも北西に位置するグリット名で呼称することを原則とした。精査に当たっては、2分法・4分法による平面発掘に留意し、遺構の性格と内部堆積状況・構造・重複等を把握しながら完掘することとした。

④遺物は、原則としてグリットごとに取り上げ、遺跡記号・出土年月日・出土地点・出土層位を記録し、遺構に直接関係するものや、年代決定の資料となり得るものについては出土レベル、位置を平面図に記録し遺物番号を付して取り上げた。

⑤遺物の出土状況・層位・遺構に関する所見等の記録は実測図・遺構カード・フィールドノートを用い、全体の問題点、進行は調査日誌に記録した。

⑥写真記録は35mm版モロクロ、カラー・6×7 cm版モノクロを主として用いた。

(4) 実測方法 ①発掘された遺構の実測は、原則として遣り方実測を用い、平板実測は補助にとどめた。②原因の縮尺は1/20に統一したが、遺構・遺物の細部については、必要に応じて1/10縮尺を採用した。

(5) 関連科学との連携について 総合的な見地からの記録作業という意味で、考古学のみならず関連科学の研究者、とくに自然科学系統の分野との連携に留意し、調査現場の実見と見解を求めることにつとめた。

3 整理について

整理にあたっては調査の性格（「緊急調査」と「記録保存」）を十分に考慮した。したがって可能な限り詳細な記録を作成することと、その公開を主目的とした。なおいわゆる「行政調査（とくに緊急調査）」と「学術調査」の異同を、その「現場」に投入された技術、方法の次元に還元して論ずるのは妥当ではない。「緊急調査」の「現場・調査」の位置づけについては、本課にも若干の反省点がある。

(1) いわゆる「珍品主義」・「一番主義」を排し、得た資料のすべてを観察し、それぞれに応じた記録を作成することを目ざした。各調査地（「遺跡」）・調査資料の正当な評価の資料を提示するためであるし、それが「記録保存」の趣旨にも連なるからである。その結果として記述が若干繁雑になった。ただし実際上は、調査担当者の設定仮説が整理担当者に十分に伝わっていないなどのことも目立ち、満足のいく整理を必ずしもなせなかった調査地もまた多い。遺憾である。また本書に提示した諸仮説、見解は本課の統一見解ではなく、整理担当者のそれ

である。具体的には ①観察事項の正確な伝達 ②仮説の提示とその展開、吟味 ③新規の仮説 問題点の提起 ④新しい資料操作法の提示などを目ざしたが、前述のように必ずしも十分には実施できなかった。

(2) 調査地はそれのみ単独での評価は避け、一定の地域内とりわけ他の「遺跡」との関係重視して解釈・評価するように努めた。「周辺の遺跡」の項がやや繁雑にわたっているのはその為である。これは(1)の実践をめざすのみならず「遺構存在を遺跡成立の絶対条件視する見解」への反論のためにも必要であり、とりわけ埋蔵文化財保護にはきわめて重要な観点である。

(3) 調査時と同様に「関連諸科学・諸技術との連携」に留意した。(1)でのべた目的を満足させる為に必要不可欠であり、さらにはその保存処理・各種データの蓄積・その公開も本課に課せられた責務だからである。今後の継続実施を考慮し、可能なものは努めて本県内の機関・公所・その他に連携ないし委託先を求めた。具体的実施例は、年代測定（カーボンディティンギング・熱ルミネッセンス法他）・材質鑑定（石材他）・樹種鑑定（木器・木材・柱脚他）・種子鑑定（炭化米・雑穀類・雑草類他）・花粉分析・人骨（歯）鑑定・獣骨（家畜を含む）鑑定・組成分析（軸葉・土器胎土・火山灰他）・磷分析・地質学的諸分析等にわたるが、今後も新分野を加える必要がある。保存処理は木器・木材・柱脚類、鉄器類を中心に実施しているが、これも今後さらに新分野のものについて実施する必要がある。地質学的知見・教示は(2)などとの関連で、調査地および周辺の「遺跡」の立地・占地に関して、また遺物と出土層（とくに火山灰層）との関連に留意して援用した。大規模調査地については航空写真・ステレオカメラにもとづく作図を採用した。

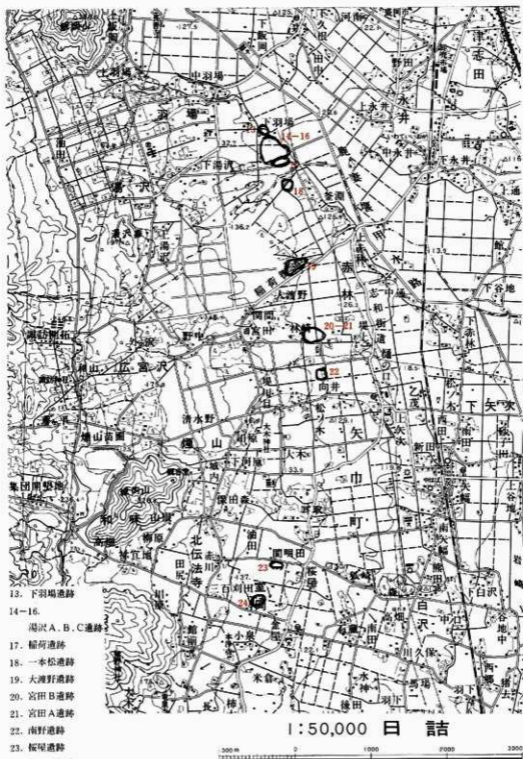
(4) すべての対象（遺構・遺物・「遺跡」）について、技法的分析に加え組みあわせ重視の観点をも加えてある。

(5) 以上の技術的基準・指標として『出土遺物の整理について』（昭和47年作成のち一部修正）を作成し大略それに準拠した整理を実施した。細部は省略するが、大枠は①観察事項を正確に伝えるための作図法他の技術的部門、②文章表現上の留意点とからなる。後者については観察事項と解釈の峻別・不明事項の不明の理由の明示などがとくに求められている。

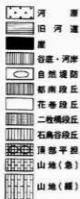
(6) 得た膨大な資料の公開は、別途計画のもとに実施されるであろう。

本

文



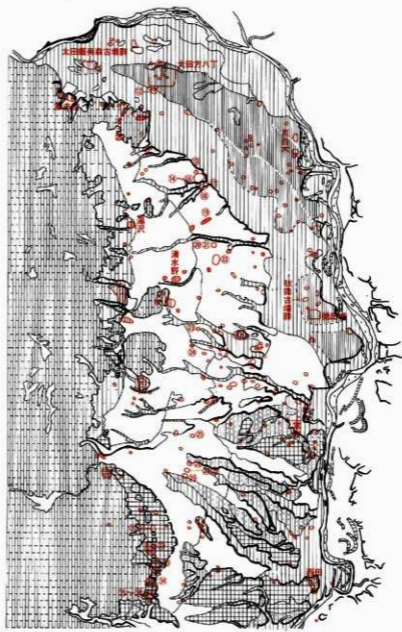
第1圖 調査道路位置圖



凡 例

- ① 太田方八丁
- ② 竹花
- ③ 下羽
- ④ 湯沢 A
- ⑤ 湯沢 B
- ⑥ 湯沢 C
- ⑦ 榎
- ⑧ 本
- ⑨ 大
- ⑩ 宮
- ⑪ 宮
- ⑫ 南
- ⑬ 板
- ⑭ 久保
- ⑮ 宮
- ⑯ 上平沢
- ⑰ 栗田 I
- ⑱ 栗田 II
- ⑲ 栗田 III
- ⑳ 清田 B
- ㉑ 清田 A
- ㉒ 梅田
- ㉓ 大明神
- ㉔ 境
- ㉕ 後在所 A
- ㉖ 後在所 B
- ㉗ 後在所 C
- ㉘ 後在所 D

-
-
-
-



第2図 地形区分ならびに「遺跡」立地図

矢巾地区概観

1 地形概観

本調査区は行政区画上是都南村・矢巾町の二町村からなるが、地形のまとまりとの関連上、以下の説明は「雫石川以南～流名川周辺以北」を中心とする範囲について行なう。したがって盛岡市・紫波町・石鳥谷町の一部を含むこととなる。

本調査区の地形は大別して山地・丘陵地・台地（段丘）・河岸低地などからなる。中央部には、北端部の雫石川に沿ってやや西方に折れ曲がる他はほぼ南北にのびる北上川河岸低地があり、北上川はその東縁を直線的に南流する。北上川に沿って巾1～3kmの谷底平野が形成されているが、そこには旧河道・自然堤防などが数多く見られる。

北上川西方には東根山（950m）を最高峰とする標高500m以上の第三系よりなる山地がひかえ、断層線崖と思われるその東縁には大小の扇状地群が発達している。また山地東縁のさらに外方には安山岩の露出が見られ、稲荷山・飯岡山・湯沢森・城内山・北谷地山・日詰の城山などとして残丘状に存在する。山地からは若干の河川が東流するが、本調査区付近には葛丸川・流名川などがある。北上川東方には朝島山を中心とする北上山地の西縁部を構成する山地と、その前縁に標高300m以下の丘陵が見られる。

北上川に沿って巾1～3kmの谷底平野が形成されていることは既にのべたが、これを除けば北上川西岸の河谷平野のその他の部分の大半は台地（段丘）である。これらはいずれも扇状地や旧河床が段丘化したものである。中川久夫氏らによれば、盛岡～花巻間の段丘群は大別して四面からなり、古期から順に①石鳥谷段丘 ②二枚橋段丘 ③花巻段丘 ④都南（飯岡野）段丘である。

高位の石鳥谷段丘は本調査区内には見られず、南方の土館・片寄など西部山地東縁の山麓部に顕著に見られる。他には日詰付近から石鳥谷付近にかけて、後述の花巻面上に残丘状に残片的に分布する。

中位の二枚橋段丘は日詰以南に発達するが、本調査区では西端の山麓部に部分的に見られるのみである。石鳥谷までの間では陣ヶ岡の周辺（陣ヶ岡そのものは高位段丘）、京田付近など石鳥谷段丘にともなって分布する。

低位段丘は細分されており、まず花巻段丘は本調査区周辺の主面をなし、西部後背山地東麓から東方に広範に発達する。既述の二段丘よりは新鮮な面をもち傾斜も急で、複合扇状地状の等高線配置をなす。それは西半部においてとくに顕著である。

都南段丘は花巻段丘の外方またはこれを刻む河谷に沿って見られる。日詰以北においては一般に河岸面との比高が小さく、その境界が不明瞭になる部分が多い。盛岡市太田周辺・都南村と百目木付近では比較的顕著である。

飯岡野段丘は都南段丘に相当するものと思われるもので、西方後背山地山麓に存在し、とくに北西部の飯岡野に顕著に見られ、花巻段丘面をおおう礫層として発達している。

北上川東岸においては段丘の発達は不良であり、乙部から西長岡にかけてやや顕著に見られる程度である。北上川の両岸における段丘発達の非対称性は特徴的なものである。

本地区内における主要な水系は北上川水系のみであり、他には葛丸川・滝名川・平沢川・五内川などと、それらの中小河川に注ぐ谷および沢がある程度である。北上川西岸の段丘発達部分には水系はほとんど発達せず、段丘を切って北上川に注ぐ支流が見られるにすぎない。

なお本地区における火山灰層は顕著ではなく、二枚橋段丘および石鳥谷段丘上に薄く見られる程度である。他地域と比較すると北部のものは浪民火山灰の、南部のものは黒沢尻火山灰のそれぞれ一部を含むと考えられている。

2 調査地周辺の諸「遺跡」とその占地

以上のうち北上川西岸部を模式的に第2図に示した。基図として中川久夫氏他の業績、佐藤二郎氏の最新の研究成果を用い、他に岩手県農地林務部北上山系開発調査室編集「北上山系開発地域土地分類基本調査、盛岡」、「同日誌」をあわせて用いた。これに昭和53年11月現在、当文化課が把握している「遺跡」（ただし現段階では埋蔵文化財包蔵地的な把握にしかすぎない）その他を重複させて示した。

これを概観すると大略以下の特徴を指摘できる。ただし以下にあげた各「時代」内の細かい「時期」については本課では正確に把握していないので、時代の大枠を示すにとどめ、¹「遺跡」名はとくに著名なものを以外は示さなかった。その個々が「遺跡」の概念にまで高められていないゆえである。

(1)縄文時代の「遺跡」は河岸低地と都南段丘面上には極めて稀という特徴をもち、花巻段丘とそれより高位の二段丘上、後背山地山麓緩斜面上、残丘状の上位段丘、山地などに大部分が占地するらしい。この占地は他の時代に比し、比較的強い規制力をもっていたように思われる。後背山地近くや、上・中位段丘上に大規模集落が立地する例が知られる。紫波町西田「遺跡」は高位段丘に、都南村湯沢「遺跡」は中位段丘にのる。大規模集落と中小規模の「遺跡」とりわけ「遺物のみ検出されて遺構が無い遺跡」は、それらを個別にではなく総合的視野からとらえるべきである。集団領域論的視点は「遺跡」親に必要な不可欠のものである。その意味で、稀にはあっても低地・都南段丘面上の段丘崖近くに占地する例は、「生業論」・「集落の社会的分業・機能論」の観点からも考察されるべき対象であろう。

(2)弥生時代については該当例が少ないので不明な点が多いが、(1)と重複することが多く、(1)と類似した占地といっておく。ただし低地に見られないことは既述の観点からすると重大な問題を提起するが、類例の増加をまつべきであろう。

(3)奈良・平安時代(古代)の「遺跡」はその数がもっとも多く、ほとんど全域にわたり分布する。とくに都南段丘面上や自然堤防上などの比較的低位への進出が顕著である。盛岡市人田^{ニッタク}方八丁^{ヒヤツチヤウ}・矢巾町^{ヤヒンチヨウ}徳丹城^{トクニシノ}擬定地の城柵・官衙遺跡、矢巾町^{ヤヒンチヨウ}狄森古墳群^{テシノコフネ}、都南村百目木「遺跡」などは都南段丘面上に、盛岡市上太田^{カミタ}蝦夷森古墳群^{エミイノモリ}はおそらくは自然堤防上にのるものであろう。城柵・官衙遺跡の周辺にいわゆる集落址・古墳群といわれるものが存在する事実は、既述の総合的視野を必要とする具体的事例の一つであろう。蛇足ではあるが「窯跡」とみなされるものが花巻段丘相当面上に数例知られるが、その中の一例は平安時代も比較的古い段階のものと思われる。今後この種のものの追求も意図的になされるべきであろう。なお西方の後背山地山麓、高位段丘上の頂部の平坦な丘陵上など比較的高位置をも占地している事例には、(1)でのべのと同様の観点を導入すべきことはいうまでもない。

(4)中世・近世は「遺跡」視された対象が限定されてしまった調査上の不備もあり、その限界はおのずから明らかであるが、まず城館は後背山地の斜面、高位段丘上の頂部の平坦な丘陵の一部、残丘状の高位段丘、山地などに立地するものがほとんどである。これには当時の交通路という要素も作用していることはいうまでもなからう。中世の「豪族屋敷」は花巻段丘面上の沢にのぞむ位置に一例が知られている。一里塚は街道との関係で低位、都南段丘面上などに見られる。

なおいずれの時代においても、より日常的と思われる「遺跡」は段丘崖、段丘面上に刻まれた河谷・沢にのぞむ地点などのような水辺に近くかつそれより上位を占地する特徴をもつ。

第2図に示した東北自動車道関連の調査地の立地を一覧すると、まず調査区内のものとして⑨下羽場 ⑩湯沢A ⑪同B ⑫同C ⑬稲荷 ⑭一本松 ⑮大波野 ⑯宮田A ⑰同B ⑱南野 ⑲桜屋 ⑳久保屋数があるが、これらはすべて花巻段丘面上にのる。㉑～㉓は段丘崖でしかも面を刻んだ沢の沢口(谷口)部分にあたり、㉔～㉖は段丘崖よりやや西方に入った段丘面上で、それを刻んだ沢をのぞむ緩斜面に位置する。㉗は扇状地地形をよく保った部分の東縁部に近い。調査区以外では⑩太田方八丁 ⑪竹花前 ⑫宮手 ⑬上平沢新田 ⑭栗田I ⑮同II ⑯同III ⑰浦田A ⑱同B ㉒柳田館 ㉓大明神 ㉔墳館 ㉕後在所A ㉖同B ㉗同C ㉘同Dがあるが、⑩・㉑は都南段丘面上で、前者の北限部はその北縁部、後者はその南端部近くにあたる。㉒・㉓～㉖は花巻段丘面上で沢にのぞむ部分、㉗は中位段丘の西南縁部の段丘崖近くにあたる。㉘～㉙は後背山地東縁に比較的顕著に残存する石鳥谷段丘上の頂部の平坦な丘陵部、緩斜面などに立地している。

最後に再述するが、「遺跡」を個別にとり扱うのではなく「遺跡群として総合的、ダイナミックに扱う」ことは、今後の埋蔵文化財保護運動・同行政とくに後者に必要とされるものである。「遺構のある部分のみが遺跡」的な旧態依然たる「遺跡」観は早急に払拭されるべきであるし、それは本県の如き環境の中ではことにも保護行政側にまず求められるべきものである。

下^{しも}羽^は場^ば遺跡

遺跡名：下羽場(略号 SHB76)

遺跡所在地：紫波郡都南村羽場11地割

調査期間：昭和51年9月18日～12月11日

調査対象面積：4,800㎡

発掘調査面積：ほぼ全域

第1図 調査地の地形と範囲 (1:1000)

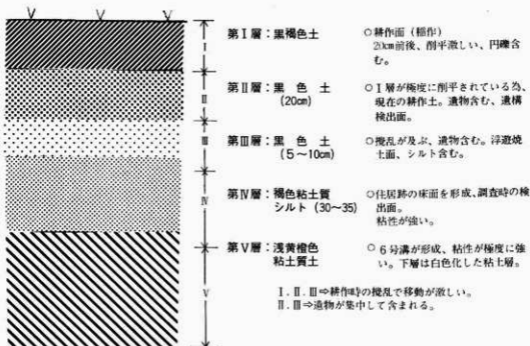


I 位置と立地

本遺跡は、東北本線岩手飯岡駅より西方約4kmの矢巾町界に近い都南村羽場に所在し、北上川西方に南北にのびる段丘岸を有する盛岡段丘面上の段丘縁に立地する。東南方50mのところは、湯沢川によって開析されている。標高約127m、段丘岸上と岸下との比高は約4mである。周辺は、近世の鹿妻堰用水路、幹線水路が走り、西側は山際付近まで畑地が多く、東側には水田が開ける。本遺跡範囲内の土地現状は、宅地と水田である。

なお、南側同一段丘面上には、湯沢A、B、稲荷、一本松等の諸遺跡が存在する。何れも平安時代の遺跡と目され、時期的には本遺跡との関連が推察される。

II 層序と土質



第2図 下羽場遺跡基本土層図

下羽場遺跡基本土層は、上図に示されるように5層に分けられる。但し、調査以前の段階で工事あるいは耕作による削平、攪乱を受けた部分もある。特に、北側段丘面から凡そ60m以南は、それが激しく地山粘土質シルトIVが露出している場合もある。総じてA、B、C、Dブロック共、東側部分である。

基本層補足

I層：本遺跡内中央部分から西側部分にかけて残っている。他の部分にあっては前述の

如くである。

I層中には、表採に於ても遺物が確認されるが、大半は細片であり、基本的には、擾乱による結果として、II～III層からの浮上遺物としてとらえられよう。

- II層 : 厚さ20cm前後の層である。この層も耕作が及ぶ層であり、上部ほど土の移動が激しいと思われる。

同層からは、各種坏類の他、須恵器甕片、土師器甕片等が数多くみられる。土質は、ほとんど下層(III層)と変わらない。緑軸陶器は、III層に近い下層部分に存していたものであり、浮遊焼土面にも近く、本来的には、II層下部段階における遺構の存在も考えられるが、確定し得なかった。

- III層 : II層と同一の土性、土色を呈す層であるが、粒子の細かいシルトが霜降り状に混入する。層の厚さは5～10cm程度であり、多くの住居跡内最下層部に推積している土に近い性質のものである。なお、土中に含まれる粒子の細かいシルトは、第四層にもみられるが、III層と同じく全体の色調を変えるほどの量でもない。

また、住居跡内に入りこんだと思われる黒色土中には、第13号・23号竪穴住居跡のように浮遊焼土と呼ばれる焼土遺構が存在する場合もあり、III層段階における遺構の存在の可能性が考えられる。即ち、住居跡がある程度まで埋まった時点での再利用があったということである。

なお、III層は、上層推積層が極端に薄い部分においては、耕作等の擾乱が及び、遺構そのものが破壊されている例もあると思われる。

- VI層 : 調査時点における遺構検出面としてとらえられる層である。粘土質土的であり、ややザラザラした感じが手に残るような土質である。また、シルト的な特徴を有している。厚さは約30～35cm内に留まる。

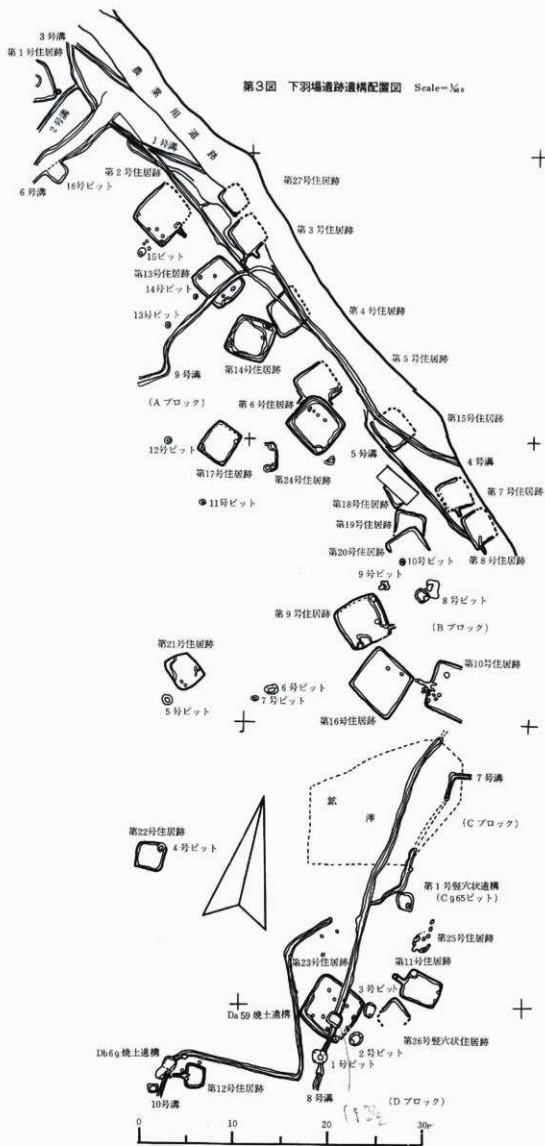
本調査地内において確認された各遺構は、この層を基底として掘り込んで形成されており、住居跡、ピット、溝等の底面(床面)、壁面などを構成しているものである。但し、6号大溝は、同層を更に掘り込んで形成されており、底部面はV層の粘土層にまで達している。

- V層 : 浅黄橙色を呈し、粘性の強い層である。下部にいくにしたがって、黄橙色から灰白色的色調となっている。他の混入物はまったくみられない。

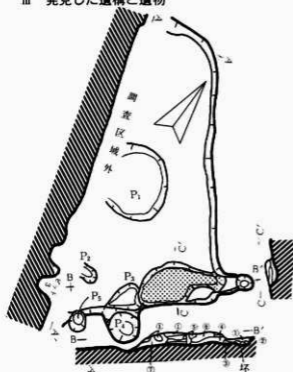
この層まで掘り込んでいる遺構は、前述の如く6号大溝だけであり、他例はない。遺構検出面(III層)より約50～55cm下部に存在する層である。

また、V層以下にあっては砂礫層が続くものと思われる。

第3図 下羽場遺跡遺構配置図 Scale=1/50



Ⅲ 発見した遺構と遺物



1 竪穴住居跡と出土遺物

第1号竪穴住居跡 第4-1図 写真2~4

本遺跡内北西部に位置しており、西側3分の2程度が調査範囲外に食い込むため未調査部分も多く全容は明らかではない。

東壁3.5m、南・北壁の残存辺長は各々2.5m、0.8mであるが、本来的には隅丸方形のプランを呈するものであろう。壁高は、残りの良い東壁部分で約10cm平均で若干の傾斜を持っている。

床面は褐色粘土質シルトで、推積度に比していくらか堅い程度である。住居跡南壁から東南隅付近にかけての床面には、1.2 × 0.6 m径の範囲で焼上の広がりが見られ、足辺から遺物が出土している。ピットは住居跡内に2個（P₁～P₂）、屋外に3個（P₃～P₅）が検出された。P₁を除くピットの推積土は、住居跡とのそれとは異っているため、当遺構に直接的に伴うものであるかは断定できない。P₁は調査区外に及ぶ部分もあり、全体のプランは判明しないが、残存部分で南北約1m弱位であり、深さは床面から10cm程度である。遺物は一点も出土せず、当遺構内での性格は不明である。

カマドは、東壁南隅付近に位置しているが、袖部の施設は確認されない。焚口部分は30cm径の楕円形状に焼土が広がり、2～3cmの段差をもって煙道部につながる。焚口部分は、断面でみ

第1表 堆積土層一覽

堆積土色	基本層	特 徴
① 暗褐色土		(カマド) 焼土、遺物混入
② 暗褐色土		(種出部) 焼土ふくまず
③ 濃い黄褐色シルト		焼土・遺物ふくむ
④ 黒色土		焼土・多量にふく
⑤ 暗赤褐色土		(カマド部)
⑥ 赤褐色焼土		(種出部)
⑦		ほりすぎ部分
ピット堆積土層一覽		
① 黒色土	ピット1	
② 暗褐色土	ピット2, 3, 4, 5	



第4図 第1号竪穴住居跡実測図

ると若干掘り込んだ窪みがみられる。煙道は全長70cm、巾約30cm平均で、地山を25cm内外丸底状に掘り込んだものである。煙道の周壁は赤く焼けており、また煙出し部分からはB類環が伏せた状態で出土している。なお、他の施設は検出されていない。

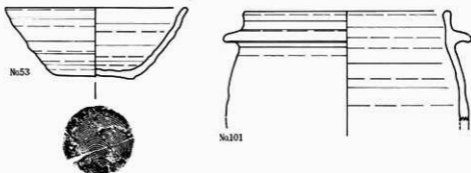
出土遺物 実測された土器は、内外面に器面調整を施さない酸化焰焼成の坏(以下B類と記す。なおA、B、C各類については102P.a各類についてを参照されたい。)が1点、破片ながらも鈎を持つ器形の土師器一点である。須恵器(坏類にあっては以下A類と記す)は、底部を含む坏の破片、甕類も極少の破片が出土する。内黒の土師器坏(以下C類と記す)は床面上からの出土はなく、埋土中に体部片が僅か一片ある程度である。

A類は前述の如く破片だけの出土であるが、床面からヘラ切と回転糸切による切離しの底部片が各1個体づつみられる。ヘラ切による坏は他に10号住居跡にも散見するが、何れの場合にも回転糸切との共伴をみせる(写真No.37)。なお、これらの遺物は、全て再調整を有してはいない。

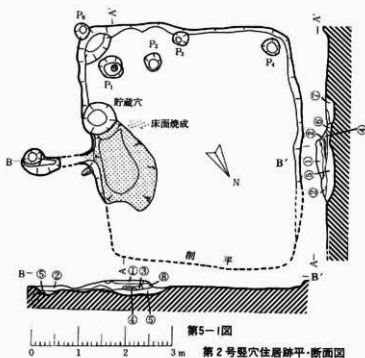
B類はNo.53の坏があり、比較的深目で口縁が若干外反する器形である。底部には明瞭な糸切痕を残し、再調整はみられない。胎土中には粗砂、石英細粒を混入しており粗悪であるが、焼成は良好である。この他に同類の底部片が3点みられるが何れも回転糸切による切離しであり、残存部分にあって再調整の痕跡はみられない。量的には、この種の坏片が最も多いようである。

甕類は、焼土上よりロクロ成形の土師器底部片が出土している。これは回転糸切による切離しのものである。この他にロクロ不使用の体部片がみられるが、この場合は外面にヘラ削り、内面に刷毛目痕をみせる。須恵器は、内外面に叩目を持つ体部片が一点あるだけである。

その他の土器としては、No.101の土師器がある(写真No.73)。これは口唇下約1.5m付近に鈎を持つ釜形の器形であって、土師器では他に例をみない、須恵器では、小片ながらも第23号住居跡に1点だけある。



第4-2図 第1号壘穴住居跡出土遺物実測図 S-4



第2表 堆積土層一覧

層	堆積土色	材料	特徴
①	にぶい褐色粘土		カマド1部構造のくずれたもの
②	暗赤褐色焼土		カマド部煙道部
③	明赤褐色焼土		
④	褐色土		
⑤	黒色土	Ⅱ	
⑥	黄褐色粘土		
⑦	黒褐色土	I	1層と区別するが焼土層入
⑧	暗赤褐色焼土		
ピット堆積土層			
黒色土(Ⅱ) ピット1-5 ピット6黒褐色土(I)			

第2号竪穴住居跡 第5-1図 写真5~7

当遺構周辺は、表土が薄いため耕作時の攪乱等が広範囲に及び、遺構の北壁から東壁にかけての破壊が激しく全容は明らかでない。

南壁4m、西壁約4.5m、東壁の残存長4mで隅丸方形の平面プランを呈す遺構であり、残存する壁の高さは遺存状況が最も良い南壁で約10cm程で外傾気味である。床は褐色粘土質シルトで堆積土に比して若干固い程度である。東壁中央部付近の床面直上には、1.65m×1.15mの広範囲で炭化物の多い焼土層が見られ、多量の土器片が出土している。ピットは屋内に5個(P₁~P₅)、屋外に1個(P₆)、計6個確認されている。P₁~P₅の堆積土は黒色土一層で占められ、住居跡の堆積層と一致することから遺構に付随するピットと判断される。なおP₁、P₄は床面からの深さが36cm、10cm、直径45cm前後の円形で垂直に掘り込まれており、P₁に於ては掘方を有しほぼ柱穴と思われる。又、P₆については堆積土が必ずしも住居跡堆積土と一致しないことから当遺構に直接的に関わるものであるかは確定しない。

カマドの遺存状況は削平などの攪乱が多く全容は明らかでないが、東壁中央部に位置し、燃焼部は30×20cmの楕円形を示し、床面を若干掘り窪めた状態で形成している、底部面は赤く焼け、固くしまつて確認された。煙道の長さ約63cm、巾25cmで、地山を7cm程度U字状に掘り込んで形成されているが、部分的に攪乱を受け全容は不明である。煙出部は、径30cm前後の楕円形

で若干掘り込んで構築しており、周壁は赤く焼けていた。貯蔵穴はカマドの南側に位置し、長径65cm、短径35cm、深さ16cmの楕円形で底面はほぼ平坦である。なお周溝は確認できなかった。

出土遺物： 実測可能な土器は、内黒土師器坏（C類）一点、内外面無調整の赤褐色を呈す坏（B類）二点である。後者の坏類が量的には最も多く、以下内黒土師器坏、須恵器坏と続く、須恵器は坏類のみならず甕類にあっても微少である。

〔1〕**坏類：** 内黒土師器坏はNo 2（写真No 20）であるが、これは回転糸切無調整で、この種の坏の中では最も器高が低く小き目である。体部は若干ふくらみを持ちながら外傾する口縁につながり、体部外面には沈線状のロクロなどで痕が見られる。内面は平滑である。ヘラミガキ仕上げと思われるが単位は、はっきりしない。また、胎土は比較的良質であり、焼成は普通の仕上がりである。須恵器坏は、くすべ色を呈すが細片のため詳細は不明である。

酸化焙焼成と思われるNo 1、No 3の坏は、何れも住居跡内の焼土上よりの出土である。両者とも回転糸切無調整の坏であるが器形を異にするものである。No 3は小型で土師器的なタイプの坏であり、体部の凹凸は目立たず、ふくらみを持って立ち上がり、直口気味の口縁につながる。体部と底部との境界は明瞭であり、底部の器内は厚目である、体部外面には部分的に黒色変化の痕跡がみられ、また、胎土中には石英砂粒を若干混入しているが、そう悪くはない。また、外面中央部付近には、実測図の如き墨書を有している。

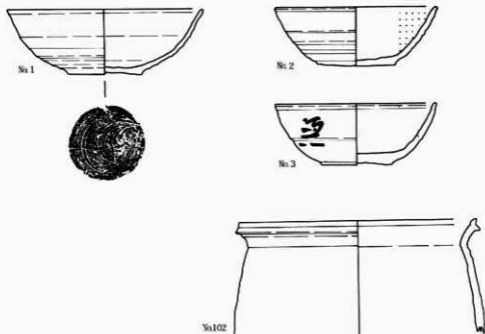
No 1の坏は、口径が大き目で外傾の度合いが強くなる器形で、その分、口径と底径との比は大きい。体部は若干ふくらみを持ち、外反する口縁につながり、全体的に器内が薄く、軽い感じのする坏である。

他に同類の坏の底部破片が2片出土しているが、何れも回転糸切の切離し痕を持つ。これらはその残存部分にあっては、調整を持たないものである。

〔2〕**甕類**

土師器の甕は多量に出土しているが、完形品はみられない。No 102（写真No 68）のカメはロクロ成形のもので、やや小型である。口唇部に窪みを持ち、胎土、焼成共に比較的良質のカメである。推定口径はおよそ18.9cm位である。

ロクロ不使用の破片には、外面へら削り、内面へらナデの痕跡を持つものが含まれ、ロクロ使用のものは、焼土中から回転糸切による切離しの底部片が出土。前者には、厚手の長胴カメがあるが、外面には雑なへら削り、内面は刷毛目状の痕跡がある。口縁部分が短かく、直角に近い形で反るのが特徴である。胎土はあまり良くない様である。また破片の上での量的な比はロクロ成形のものが多いようである。須恵器では磨滅した体部細片が出土しているが詳細は不明である。

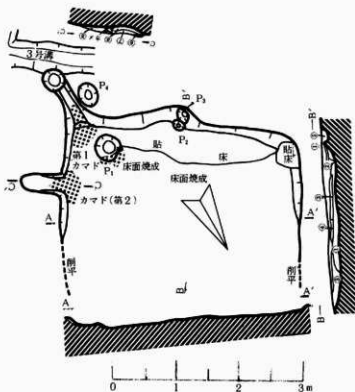


第5-2図 第2号竪穴住居跡出土遺物実測図 S-片

第3号竪穴住居跡 第6-1図 写真8~9

東西に走る農道下に食込み、極度な攪乱を受けている為に全容が明らかでない遺構である。
 (重複) : 同一床面、同壁を使用した二時期に渡る遺構で、旧床面を部分的に黄色粘土で固め床面を形成している。南壁 3.75m、東壁・西壁の残存長は各々 1.7 m、1.4 m で隅丸不整方形の平面プランを呈すものと見られる。壁の高さは遺存状況の最も良い南壁で約 15cm 程度であり、部分的に 10cm 内外のところもみられる(貼床部のレベル)。なお壁は外傾する。床は褐色粘土質シルト(旧期)であり、部分的に黒色土と黄色粘土で固められている箇所がみられる(新期住居跡床面)。また、東壁中央部から 50cm × 45cm 程度の規模をもつ焼土痕と東南隅から 45 × 35 cm 程度の焼土痕が確認された。いづれの焼土痕からも土器片が出土している。

ピットは壁内に 3 個 (P₁ ~ P₃)、壁外から 1 個 (P₄)、計 4 個確認された。P₁ は若干焼土粒を含む土質は第 1 期住居跡推積土層と同質であることから旧期に付随するものと考えられる。直径 35cm、深さ約 10cm 程である。P₄ は径 30cm、深さ 10cm で楕円形の平面プランを示し、推積土は P₁ と同質であることから旧期住居跡に付随すると思われる。なお P₂ ~ P₃ は近世における攪乱ピットと思われる。柱穴と思われるピットは確認できない。



第6-1図 第3号竈穴住居跡実測図

第3表
堆積土層一覧

堆積土色	層番号	特徴
① 黒色土	III	住居跡層
② 黒褐色土	I	住居跡層
③ 粘土と黒色土の混土		黒色土と粘土の混土(貼床部)
④ 黒色土と粘土の混土		貼床部
⑤ 粘土層に若干黒色土混入		ビット 3. 2
⑥ 浅黄褐色粘土		カマド部
⑦ 黒褐色土	I	煙道部
⑧ 赤褐色土		カマド部
ビット堆積土層一覧		
黒土色	III	ビット 1. 4

カマドは、東壁中央部と南東コーナー部に構築され、前者は袖部を伴わず燃焼部径が50cm内外の楕円形を示すプランで、床面を若干掘込んで形成しており薄赤く焼けている。長さ約60cm、巾約30cmで、ほぼ磁北から南東方向に突き出した煙道をもつ。焚口と煙道部の境は、はっきりせずほぼ直結する。後者は焼土範囲が前者に比してやや狭く45cmほどで、焼土が東壁、南壁にもおよび赤く焼けている。また袖部の基礎となる粘土の高まりや角礫等は確認されず、伴わないものと思われる。なお燃焼部は、床面を若干掘込んで形成されているようで、煙道との境は6～8cmの段をもって明瞭に区切られている。長さ120cm、巾30cm、深さ15cmのほぼ南向きに突き出した煙道をもつ。煙出部は、直径30cmで円形のプランを示し、深さ20cmに達し、煙道部より若干深く掘込んで構築している。これら両者の前後関係は、遺構堆積土層(黒色土)と各カマド構築状況との比較で明らかであり、前者(第2カマド)が旧住居跡に伴い、後者(第1カマド)が新期住居跡(貼床を伴う遺構)に伴うカマドと考えられる。なお両者のカマド周辺から若干の遺物が出土している。両者の前後関係は、遺物の比較でみる限りではあまり時間的な差はないものと思われる。

出土遺物は全て破片だけの出土である。貼床面から回転糸切の須恵器坏底部片、体部細片、

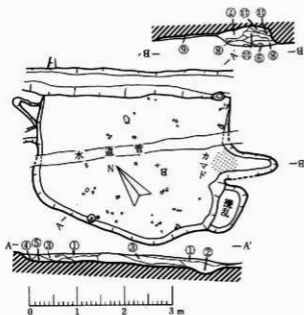
内外面に調整を持たない種類の体部細片若干の出土である。

カメ類については、土師器では回転糸切の底部片、外面にヘラ削り、内面に刷毛目仕上げ痕を持つ体部片、須恵器では叩き目痕を持つ体部片が見られる。

この他台付坏の一部と思われる破片があるが詳細は不明である。

第4表
堆積土層一覧

	堆積土色	基層	特徴
①	黒褐色土	I	住居跡堆積層の上部
②	黒褐色土	I	シルト多量に混入 4号溝
③	黒色土	II	遺物(鉢片、壺片 をふくむ)
④	黒色土	III	シルトをふくむ (壁のくずれた層)
⑤	黒色土	III	焼土などをふくむ 遺物ふくむ
⑥	褐色粘土質シルト	IV	焼土が混入、遺物 (坏)をふくむ
⑦	暗赤褐色焼土		カマド部堆積層
⑧	明赤褐色焼土		カマド部堆積層
⑨	明赤褐色焼土		上部層にシルト混入
⑩	暗褐色土		焼土が多量混入
⑪	にじい 赤褐色焼土		炭化物混入、やや 固くしまっている
⑫	黒褐色土		焼土混入
⑬	黒褐色土		焼土、シルト混入



第7-1図 第4号竪穴住居跡平・断面図

第4号竪穴住居跡 第7-1図・写真10~13

北壁が東西に走る第4号溝によって、また、住居跡内中央部分は第3号溝によって破壊されており、あまりはっきりしない遺構である。南壁辺長 3.7 m、東・西壁の残存辺長は、各々 2.7 m、2.05 m で不整形なプランを示す。壁高は、残りのいい部分で約 18 cm 位である。床面は、褐色粘土質シルトであり、南から北に向って微傾する。また、特につき固められた形跡も観察されず、埋土に比して若干堅い程度である。ピット類は、はっきりと住居跡に伴うものと断定できるものはなく、周溝等の施設もみられない。

カマドは、東壁中央部付近に位置し、床面上に広範囲の焼土がみられた。遺物は、この焼土内にもかなり集中している。焚口部は、直径 50 cm 内外の円形状を呈し、床面をやや掘り込んで形成されていたと思われる。焚口に関わる上部構造は特に確認されず、長さ約 1 m、巾 50 cm、深さ約 25~30 cm 程度のやや巾広の煙道が残っていた。この部分は、攪乱された形跡があり、本来的には、もっと巾のせまいものであったと推察される。また、焚口部と煙道部の境界は、2 cm 程度の段をもって区切られている。

貯蔵穴については、精査以前の段階では、カマド南側に位置する張出し部分に想定されたが、推積土層が、粘土ブロック混じりの黒褐色一層で占められ、住居跡推積層とは一致せず、直接的には、人為的な埋め込みを配慮してもなお、住居跡に關係する施設とは考えられない。

出土遺物 第7—2図

実測可能な土器は、坏類が7点、須恵器1点あるが完形品は少ない。

(1)坏： 須恵器坏はNo25があるが反転復元によるものである。体部は緩く立上がり、口縁は直線的に外傾する。切離しは回転系切無調整で、形態は須恵器坏的なものであるが、体部上半と下半の色調が異なる。上半はくすべ色の下半は黄褐色を呈している。全体として良質な胎土だが焼成が弱いためか若干もろい感じがする。他に須恵器として底部が4片出土しているが、このうち2片は、完全にくすべ色を呈し、硬質のもので、残る2片は白褐色を呈する軟質な感じのものである。後者については、須恵器、土師器の何れの範囲に入るかは問題のある所であるが、No25の須恵器坏のあり方から、赤褐色を呈する坏類や、内黒坏とは区別し、須恵器として分類している。

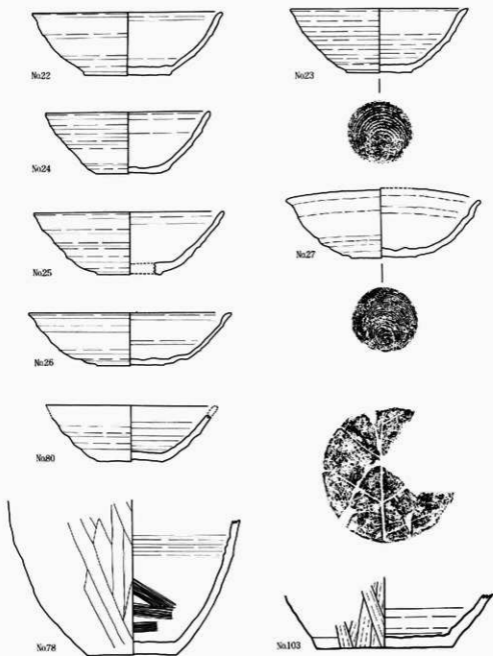
量的に最も多く出土しているのは、酸化焙焼成で器面調整を持たない坏類(B類)であるが、実測可能なものはNo22、No23(写真No23)、No24、No26、No27(写真No24)、No80の6点を数える。

器形的には全体としてばらつきがあるが、口縁部の欠失しているNo80の坏を除き、全て口縁形が外反しているのが特徴の1つとしてあげられる。この中でNo27の坏は押しつぶされた格好で歪んでいるが、この種の坏は、後述する第24号住居跡にも一点みられる。No24、No80は比較的小型で直線的な立ち上がりの体部をみせ、No22、No26は緩やかな体部であるが、それだけに前者に比して口径が大きい、No22の場合は、更に底径も他の坏より大き目である。口縁の欠失したNo80の底部には、一部、ヘラによる削痕が観察されるが、これは糸切の切離し後に外周の一部に残った粘土の隆起を軽く削りとったものであろう。

胎土全般については、No23を除き粗製である。特にNo24、27、80は、粗砂、石英細粒等を多量に混入しており粗悪である。一方No23は、胎土中に若干の雲母を含み4号住居跡内では最も良質である。

この他に、東壁焼上上から台付坏の体部下端から脚部にかけての破片が2個体分出土している。これらは内外面に調整を持たず、黒色処理もみられない。つけ高台のものと思われるが、底部には巾広の同心円状の痕跡がみられ、うち一点は、脚高1.1cm、脚径7.7cmほどである。この種のものは第7号住居跡にも散見するが、15号住居跡No33の内黒高台付坏とは器形を異にしている。

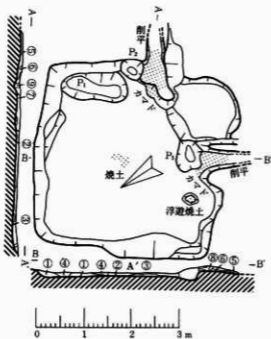
(2)土師器： 土師器は底部の破片を7個体分出土している。回転系切痕を残すもの2点、木葉底No103(写真No67)1点、他は磨滅のため不明である。体部片は多量にあるが量的にはロク



第7-2图 第4号竖穴住居跡出土遺物実測図 S-片

ロ使用のものが多くみられる（写真No.71）

須恵器はNo.78がある（写真No.75）。これは体部下端から底部までしか残っていないため、器種は不明である。外面下方には縦方向のダイナミックなヘラ削りを施し、ロクロナデ痕を完全に消している。内面は刷毛目で仕上げられており、底部周辺はナデつけている。刷毛目の及ばない上方部分はロクロナデ痕が明瞭に観察され凹凸が激しくなっている。



第8-1図 第5号壑穴住居跡平・断面図

第5号壑穴住居跡 第8-1図 写真14~17

第6号住居跡と切合い、又複数のカマドを持つ遺構である。

切合いの前後関係は、平面プラン、断面実測図、遺物比較などから判断する限りにおいて、6号住居跡よりも新しい時期の遺構と思われる。

当遺構は東壁南寄り付近（第1カマド）、南壁中央部（第2カマド）付近に広範囲な焼土の散布がみられ、その中から若干の遺物が出土している。この遺構は生活面が単一であり、継続段階で、カマドの作りかえを行なったものと考えられる。これらの前後関係は、住居跡推積土層とカマド推積層の比較から明らかに判別できる。住居跡最下部に推積する黄褐色シルト粒が混じった黒色土層下に前者（第1カマド）が構築されているのに対し、後者（第2カマド）は、同層の上部に形成されていることから明らかに前者が最初につくられたカマドであることが判明する。

第5表
堆積土層一覧

層	堆積土色	基層	特徴
①	黒色土	Ⅲ	住居跡最下層、第1カマド面、シルト混入
②	黒色土	Ⅱ	床面一部に凝結、第2カマド面、浮遊焼土
③	黄褐色土質シルト		廻りすぎ部分
④	黒色土	Ⅱ	②層より幾分焼土量が少ない
⑤	褐色土		焼土が混入
⑥	黒褐色土		焼土との混入、シルト混入
⑦	赤褐色焼土		第1カマド部に堆積し、固くしまっている
⑧	明赤褐色焼土		第2カマド部に堆積し、黒色土混入
⑨	黒色土		焼土層にブロック的に混入
⑩	暗赤焼土		第2カマド堆積層、カクランピットで破壊
ピット堆積土層一覧			
黒色土(Ⅲ)ピット1、黒褐色土とシルトの混入、2、3			

規模は東西3.97m南北3.77mではほぼ隅丸方形の平面プランを呈し、壁高は遺存状況の最も良い部分で約15～20cmである。床面は褐色粘土質シルトであるが、黒色土などでよごれている。ピットは、いづれも屋内から確認された。全部で3個（ $P_1 \sim P_3$ ）である。 P_1 は長軸1.4m、短軸55cmで南北に長い楕円形のプランを示し、深さ約10cm程で、遺物は出土していない。なお性格は不明である。 P_2 、 P_3 は、推積土層の相違から攪乱ピットと思われる。

柱穴、周溝、貯蔵穴は確認出来なかった。

第1カマド： 全体的に削平がおよび全容がはっきりしない。焚口部は、床面を若干掘り窪めて構築しており、赤く焼け、固くしまっていた。なお燃焼部の両サイドには、粘土質の隆起をみることができるが、切石、角礫等は見られなかった。煙道との区別はやや明瞭である。

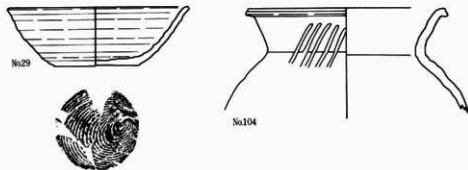
煙道は、削平によって、全容は明らかでないが、残存長94cm、巾30cm、深さ（遺存状況の良い部分で）約5cm程度で、周壁が若干焼けていた。煙出部は確認できない。

第2カマド： 焚口部は攪乱ピット（ P_3 ）によってあまりはっきりしないが、直径40cm内外と推定される。構築状況は、はっきりしない。なお煙道との区別は、やや明らかで、焼土を含まない。煙道部は、削平がおよんでいる為に全容は明らかでないが、残存長で約72cm、巾40cmで若干外傾する。深さは、遺存状況の最も良い部分で8cm程で先端部は確認できなかった。

住居跡中央部付近の床面および床直上に径40cm～35cm程度の焼土散布が見られるが、これら前後関係は、レベル面からの考察によって、前者は第1カマド期に伴い、後者は、焼土下に黒色土が推積していることから、ほぼ第2カマド期に付随するものと思われる。なお性格などは不明である。

出土遺物

実測可能な土器は、内外面共に器面調整を持たないB類（No.29、写真No.32）の坏が一点だけである。床面上ではC類の坏は見られない。甕は土師器、須恵器とも量的には多く出土するが



第8-2図 第5号竪穴住居跡出土遺物実測図 S-片

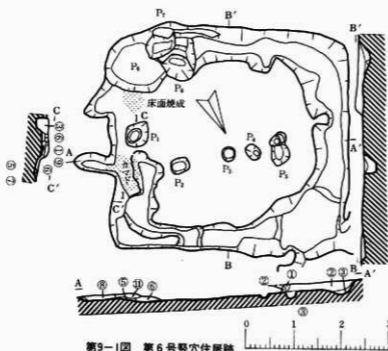
全て破片である。

埋土中からは、A類4、B類3、C類1個体分の底部片が各々出ている。これらは何れも回転糸切による切離しのものである。(A・B・C各類については、102 Pのa、各類についてを参照されたい)

(1)環： 須恵器環(A類)は、回転糸切痕を残す底部2片と口縁、体部片が出土している。

B類環(実測No29、写真No32)は第2カマド内からの出土であり、回転糸切無調整仕上げである。器内は薄目で口縁が若干外反する。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土、焼成とも比較的良好である。

(2)甕類： 土師器は、磨滅して技法不明の細片がかなりある。概してロクロ仕上げの方が残りがいい様であり、回転糸切痕の底部が2個体分みられる。このうちの1点にはへら削りで若干の調整を加えているのが観察される。また、体部片では、内面にカキ目状の痕跡を残している例もある。ロクロ不使用の破片は外面にへら削り、内面に刷毛目痕を持つものが多い。須恵器は外面にケズリ、内面にカキ目状痕を持ち、土師器の場合と同様の仕上げによるものもある。器種はカメが大半と思われるが、球体形を思わせる破片がある。この手は第16号住居跡にも散見するが、ロクロナデの上を叩きしめており、それが口縁部にまで及ぶものである(No104)



第9-1図 第6号竪穴住居跡

第6表
堆積土層一覧

堆積土色	層番号	特徴
① 黒褐色土	I	床面部分の一部分にみられる
② 黒褐色土	II	カマド上部の焼成土層
③ 灰青色土	III	ピット下部の焼成土層
④ 浅黄褐色土		甕のすき部分
⑤ 黒褐色土	I	遺物、炭土混入
⑥ 赤褐色土		遺物(灰片)の混入
⑦ 黒褐色土	I	シルトが混入している
⑧ にぶい黄褐色土	IV	焼土とシルトの混入
⑨ 黄褐色粘土		カマド上部の土層焼成が乏
ピット堆積土層一覧		
黒褐色土(I)	ピット7-8	粘土ブロック混入
黒色土(II)	ピット1-6	シルトが混入

第6号竪穴住居跡 第9-1図 写真18~20

第5号住居跡と切合い関係にある遺構で、当遺構が古い段階に位置づけられる。

東西5.3m、南北5m、床面積26.5㎡程で若干隅丸方形の平面プランを呈す。壁の残存状況はやや良く、約10cm程度で床面より外傾する。床は、ほぼ平坦であり、褐色粘土質シルト面に構築され、特につき固められた様子は見られない。東壁中央部床面から広範囲に渡って焼土が確認され、周辺より多数の遺物が出土している。ピットは住居跡内から8個確認されており、壁外にはみあたらない。P₁~P₃は推積土層が住居跡推積層と一致することからほぼ当遺構に伴うものと思われる。いずれも直径約30~35cm内外で若干楕円形的なプランを示し、検出面からの深さは15~20cm程度である。又P₃からは土師器壺片が出土している。なおP₁、P₂は、位置、形態、構築状況などから推察してほぼ柱穴と思われる。P₃は南東コーナ部に位置し平均径が長軸1.25m、短軸0.90mの楕円形プランを示し、深さが約10cm前後であるが、位置、形態などから判断してほぼ貯蔵穴と思われる。しかしP₁、P₂の攪乱ピットによって一部破壊され明らかでないが、底面はほぼ平坦で粘土質土の強いものであった。周溝は、上巾60cm、下巾30cm、床面からの深さ約12cm内外で推積土は黒色土で占められ明褐色の粘土粒が散在混入しており、若干の土師器破片が出土している。なお、周溝は南東付近、東壁中央部付近で消滅しており、南東付近は攪乱によってはっきりしない。

カマドは、燃燒部径が35×40cm程の円形を示し、床面を幾分掘込んで形成され赤く焼けていた。煙道部との区別はつかず、直結する。なお袖としての粘土状の隆起、切石、角礫等の設備は確認できなかった。煙道は長さ70cm、巾45cm、深さ6cm程で煙出部を特に構築した形跡はみられない。断面形はU字状を示し周壁は地山面を垂直に掘込んで構築している。



第9-2図 第6号竪穴住居跡出土遺物実測図S-VX No.105

出土遺物

(1) 坏類 : C類はNo28 (写真No1)、No83 (写真No2) の2点出土している。No28の坏は体部外面全体にも黒色処理がおよび、回転糸切痕を残す底面部分を除き単位の細いヘラミガキを施している。丁寧なヘラミガキであるが、ロクロ成形時の凹凸は隠しきれずに残っている。器形的には体部下方にふくらみを持つちあがりを見せ、口縁部で外反する。口縁から体部上半にかけて黒色処理が消しとんで灰白色を呈す部分があるが、逆にヘラミガキの単位は明瞭に観察される。胎土中には雲母を混入しており良質である。No83の坏は底部周辺が磨滅しているため切離しが不明である。大きさはNo28とほとんど同じ位であるが口縁形は異なる。この場合 (No83) は直口気味になっており、体部上半にはロクロによる段状の臍線が走る。全体としてはC類中では体部の凹凸の激しい部類の坏である。内面の仕上げは、放射状のヘラミガキがあり、その上部に横位、斜位のヘラミガキの単位が走る。また内面底部中央部分が窪みになっており、その分だけ器肉が薄くなっているのが特徴である。胎土中にはNo28と同様に雲母が多量に混入しているが、比較的大粒の石英などを含み、粗雑である。しかし焼成は良く、固く締まっている。

B類は体部片が若干出土しているが明確な共伴とはいえない、A類は、床面上からの出土はなく、埋土中から回転糸切の底部が一片出ているだけである。残存する部分についての調整は見られない。

(2) 甕類 : 土師器甕、須恵器とも体部の破片だけで全体の形状は知り得ない、土師器は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、刷毛目仕上げのもの、磨滅のため技法の不明なものなどであり、明らかにロクロ成形と思われるものは見られない。須恵器は叩目痕を持つ破片である。

(3) その他

鉄製紡錘車No105 (写真No85) 1点、埋土中から高台付坏片が出土している。

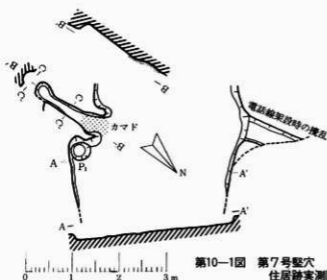
第7号竪穴住居跡 第10-1図 写真21~24

段丘崖に沿った農道下から検出された遺構であり、南壁、北壁が確認に到らなかった。

東西壁の残存長は各々約1.8m、1.2mで壁の立上がりは床面から外傾し、現存している壁の高さは、遺存度の良い西壁で23cmにおよぶ。床は粘土質であり起伏に富み、かなりの攪乱を受けている。またカマド前面から住居跡全域に渡って遺物の散布がみられ、東壁南寄りに直径50cm内外の楕円状に焼土が散布しており、これら焼土中からも遺物が出土している。

ビットは、東壁カマド南側に1個確認された。直径40cm、深さ15cm程度で、遺物は含まない。なおこのビットの堆積土が住居跡埋土と合致せず、柱穴とみるのは難しい。また、その他の施設は検出されていない。

カマドは住居跡東辺南寄りに沿って確認され、燃焼部は床面を若干掘込んで形成し40cm程の楕円的なプランを示す。またその両側には粘土状の隆起をみることができ、袖部と思われる。



第10—1図 第7号竈穴
住居跡実測図

第7表
堆積土層一覧

堆積土色	基層	特徴
① 褐色焼土		カマド部中層 黒褐色土との 混土
② におい 赤褐色土		カマド部一 煙道
③ 淡黄色 粘土		カマド上部構 造のくずれた ものか?

住居跡堆積層は農業道路施工時に第Ⅲ層
(基本層) 面まで掘り込まれたために遺
構自体も破壊され、明確ではない。

角礫、袖石等は確認できない。燃焼部から煙道に続く境は、若干段差をもって明らかである。煙道の長さ 1.34m、巾 25cm、深さ 17cm 前後で正面形が U 字形であり、壁は垂直に立上がる。煙出部は、煙道先端を若干窪めた程度の形成で、径 30cm、深さ 19cm 程でやや楕円的なプランを示す。

出土遺物

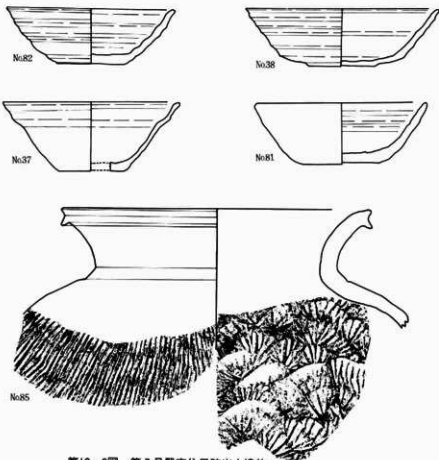
(1) 坏類 : A 類 No. 82 (写真 No. 28) は反転復元による実測であるが、内外面とも体部の凹凸が目立つ、特に内面が顕著である。体部のたちあがりは緩やかな外傾を呈し、口縁で若干外反する。底部との境界は部分的には、はっきりしない所もある。胎土は粗砂が多く混入し、良質とは言えないが焼成は良好である。この他に同種の体底部片が出土している。この場合も回転糸切による切離しで、残存する部分に再調整の跡は見られない。

B 類は No. 37, 38 (写真 29), 81 (写真 30) の 3 点があり、何れも回転糸切の切離しによるものである。No. 81 の坏は煙道内出土であり、磨滅が激しいため体部凹凸の様子、底部との境界等があまりはっきりしない。全体に器肉が厚目であり、直線的なたちあがりを示す。胎土中には粗砂、石英細粒等を多量に混入しており、粗悪である。焼成も不良である。No. 37, 38 は埋土中からの出土であり、何れも反転復元による実測である。両者とも回転糸切無調整であるが器形は全く異なる。No. 37 は、底部から直線的にたちあがる体部を持ち、上方部分に段状の腹線が巡り、器高は高めである。No. 38 は体部が一旦斜横方向に開き加減でたちあがり、口径が大きく、器高は低い。他に B 類の破片が多数出土しており、回転糸切痕の底部片も含まれている。また台付坏の脚部と思われる破片が出土している (写真 No. 57)

(2) 甕類

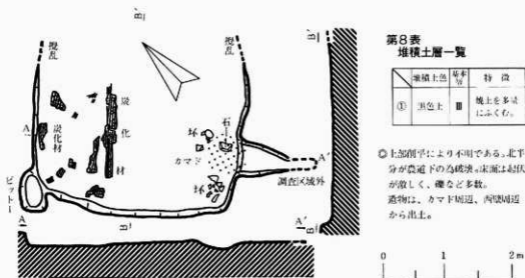
量的には多いが土師器、須恵器とも破片だけである。土師器は磨滅している為に技法の不明なものが多いが、他はロクロ成形と思われるものが多い。底部片が2個体出土しているが両者とも回転糸切による切離しである。体部片には内面カキ目状の仕上げを持つものもあるし、大きな破片の中には球体形状と推察せられる器形もみられる。一方、ロクロ不使用の破片は外面にへら削り、内面に刷毛目を施すのが普通のようなものである。

須恵器は大型のものが出土し、No.85(写真No.81)がその例である。これは口縁から肩部にかけての実測図であるが、口径が25cmで口唇が深く窪む、外面には縦方向の平行叩目文、内面には布目紋が観察される。口縁部付近には自然灰釉の跡が残っており、胎土は粗砂を若干混入しているが焼成と共に良好である。この他に叩目紋を有する体部片が多数出土している。(写真No.82)



第10-2図 第7号竪穴住居跡出土遺物

S-14



第11-1図 第8号竪穴住居跡実測図

第8号竪穴住居跡 第11-1図 写真25~28

段丘崖に沿って東西に走る農道下から検出された遺構のため、北壁の詳細は不明である。また、煙道部分については調査区域外に入り込むため未調査である。

南壁 3.2 m、東・西両壁の残存辺長は各々 2.1 m、1.6 m で、壁高は残りのいい所で約 13 cm 位である。床面は、褐色粘土質シルト面であり、住居跡推積層に比して若干固い程度である。しかし、北側部分は、農道施行時の攪乱や礫の投入などによって、起伏が激しく変形しており、遺物等についても確認できなかった。又、住居跡西側床面からは、板状の焼木材が検出され、周辺から焼土痕が確認されることから、焼失家屋と思われる。ピットは屋内からは検出されず、屋外から 1 個 (P₁) が検出された。ピットの埋土は、焼土と炭化物を含む黒色土層である。上巾 40 × 60 cm、深さ 10 cm 前後の楕円形を呈す。埋土中には多量の遺物が混入しているが、住居跡そのものが前述の攪乱のため推積層が明らかでないことから、住居跡に確実に伴うものかどうかについては明言できない。

カマドは、東壁南寄りに位置し、50 cm 径ほどの焚口部と思われる部分と煙道の一部が検出されている。焚口部分の近くに 25 × 10 cm 径、厚さ 15 cm 位の角礫が存在していたが、赤く焼けており、カマド施設の一部に使用されたと思われる。煙道については、先端部が調査区域外に及んでおり、正確には把握し難いが、残存部分については、長さ 115 cm、巾 30 cm、深さ 10 cm 位である。

出土遺物

全体として遺物の量は少なく破片のものが多く、鉄製品は、No 106 の紡錘車がある。

第8表
堆積土層一覧

堆積土層	基本色	特徴
①	黒色土	焼土を多量にふくむ。

◎ 上部例字により不明である。北半分が農道下の為破壊。床面は起伏が激しく、礫など多数。遺物は、カマド周辺、内壁周辺から出土。





第11-2図 第8号竪穴住居跡
出土遺物 S-Ⅱ

(1) 坏類

床面上にあってはC類の体部片が1片、B類の体、底部片が若干ある程度である。B類の底部片は2片あるが、残存する部分にあっては調整の跡がみられず、回転糸切の切離しによるものである。なおA類は一点もみられない。

(2) 甕類

床面上では土師器片だけの出土であり、肩部を持たないロクロ不使用甕とロクロ不使用甕の両者がある。前者は多くの場合、外面に篋削りを施し、後者の内面には刷毛目痕がみられる。

(3) その他

埋土中からは、坏類ではB、C類の体、底部片が出ているが何れも回転糸切による切離しで調整の跡はみられない。土師器の甕類は、床面出土の在り方と大差ないが木葉底のものが1片ある。須恵器は長頸壺が一点、(写真No78)があるが、頸から上の部分が欠失している。内外面共にロクロナデの痕跡を残し、外面中央から下方にかけて短かい単位の篋削りが縦方向に走る。ここでは須恵器が土師器と同様の技法で整形されているのが特徴である。色調は緑灰色を呈し、胎土・焼成とも良好で硬質の仕上がりになっている。なお当遺構出土炭化材は実年代測定のサンプルとして¹⁴C測定値を出しているが「付記」として最後に記す。

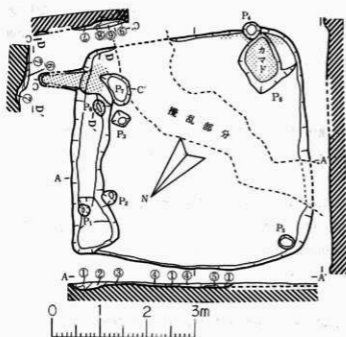
第9号竪穴住居跡 第12-1図 写真29

住居跡南壁東寄りから西壁北寄りにかけて攪乱を受けて検出された遺構である。

東壁4.2m、西壁4.3m、北壁4.7m、南壁4.2m程の隅丸方形の平面プランを呈す。壁の遺存状態は削平のおよぶ部分もあるがやや明瞭であり、最も良い部分で10cm前後あり、床面より外傾する。床は褐色粘土質シルトで、住居跡堆積層よりも若干固い程度である。構築状況は平坦である。なお東壁内に床面を10cm程度掘り込んで、上限巾65cm、下限巾40cm内外の周溝が確認されている。カマドは東壁南寄り(第1カマド)、南壁西寄り(第2カマド)の複数を持つ。第1カマドは北東方向を指し、燃焼部は50cm程の円形を示し、煙道との境も明瞭である。煙道は削平によって一部確認できないが、長さ95cm、巾約40cm、深さ4cmで底部に焼痕が確認されている。煙出部は特別な構築をもたず、煙道の先端を幾分窪めた程度のものである。

第2カマドは、床面に直径70cm程度の広範囲に渡る焼土散布がみられた場所で、南東方向を指す。煙道部、煙出部は削平による為か確認することができなかった。

これら両者の前後関係は、構築状況、堆積土の比較、各層のレベル分類、遺物比較から判別される。第1は、住居跡最下層の黒色土を若干掘り込み、周溝を黒色土を主体とした黄褐色シ



第12-1図 第9号竪穴住居跡平・断面図

第9表
堆積土層一覧

堆積土色	番号	特徴
① 黒色土	Ⅲ	基本層Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの下の層
② 黒色土	Ⅲ	シルトが多量に混入
③ 黒色土	Ⅲ	燻土炭化物の混入
④ 黒色土	Ⅲ	黄褐色シルトの混入
⑤ 黒色土	Ⅲ	粘土がブロック状に混入
⑥ 黒褐色 燻土		カマド部堆積層 (燻土が混入)
⑦ 濃い 黄褐色粘土		燻土が混入
⑧ 赤褐色 燻土		焚口部堆積層 (第Ⅰ)
⑨ 砂礫層		粘土、シルトの 混入

ピット堆積土層一覧

黒褐色土(Ⅰ):ピット4.5 柱穴カ

黒褐色土(Ⅱ):ピット2.3.6 第2カマド層

赤褐色燻土ピット8, ピットは不明

ルト、黄色粘土で意図的に埋め固め、その上部に形成している。又、第2は従来の褐色粘土質シルト面を若干掘り込んで形成していることから、第1の方が新しい時期のものと考えられる。なお遺物からの時期差は決定的なものではない。

ピットは、壁内から7個 ($P_1 \sim P_7$)、壁中から1個、計8個検出されている。 P_8 は第2カマドの焼土散布下から検出された落込み状ピットであり、深さは5cm位で形状は不整形である。おそらく第2カマドの燃焼部であろう。なお埋土は赤褐色燻土一層で占められる。 P_7 は攪乱などによって新旧関係については不明である。 P_4 、 P_5 は堆積層が住居跡堆積層と一致せず、黒褐色土(基本Ⅰ層)で占められる事から、第1カマドに伴うピットと思われる。深さは両者とも20cm内外で形成されている。 P_1 、 P_6 は、いづれも周溝内から確認されたもので、深さ9cm、径25cm程であり、埋土層は周溝部と同様である為に第2カマド期に付随するピットと思われるが性格は不明である。 P_2 、 P_3 は、直径30cm程の円形から方形状の平面プランを示し、深さ20cmほどである。埋土は、住居跡最下層の黒色土と同一であることから、第2カマド期に付随したピットと思われる。 P_2 、 P_3 、 P_4 、 P_5 の諸ピットは、その位置や形態からして住穴と考えられるが、全て同時期の構築によるものかは定かでない。

出土遺物

床面からの出土量は多いが、復元可能な土器はB類坏の一点だけである。C類の坏は全く出



第12-2図 第9号竪穴住居跡出土遺物 S-Ⅱ

土せず、量的にはB類で構成される遺構である。壺類にあっては、土師器だけであり、須恵器は、つまみのついた蓋の破片が一点だけである。

(1) 坏類

B類No.42(写真No.38)の坏は、当住居跡内カマド部上面からの出土であり、回転糸切無調整である。体部は下方部分から直線的な立ち上がりをみせるが、口縁部付近で直口気味になる。体部の凹凸は、磨滅のためあまり目立たず、胎土中には粗砂を多量に混入し非常に粗悪であり、焼成も弱いようである。他に、同様の底部片が出土しているが、これも回転糸切によるものであり、内面には光沢がみられるが、へらみかきによるものではないようである。

(2) 壺類

土師器だけの破片である。ロクロ成形のものは、肩部に段を持たずに頸部から胴部へつながる器形である。ロクロ不使用の破片は外面にへら削り、内面にへらナデ痕を有している。

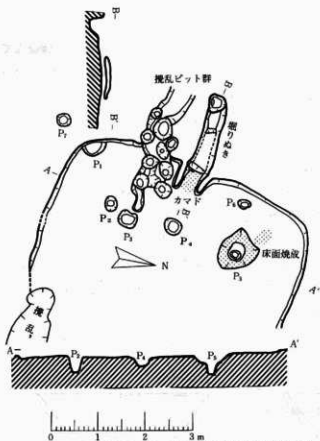
第10号竪穴住居跡 第13-1図 写真30~32

住居跡の1/3近くが調査区域外に入り込み、全体の形状は確認されない遺構である。西壁は4.8 m、南、北壁の残存辺長は各々2.2 m、3.3 mである。西壁部での壁高は8 cm位であるが、攪乱による破壊の形跡もある。

床面は、褐色粘土質シルトであり、比較的固く締まっている。東側に向かって緩い傾斜を示す。ピットは本遺構内西壁付近に集中しており、大小6個、また屋外から1個、計7個確認されている。P₁は南西隅近くで検出され、45×35 cm径、深さ5 cm程度の規模である。P₂、P₃は、直径約30 cm、深さ約30 cm前後の規模であり、埋土は住居跡堆積層と一致する。位置関係からみれば柱穴のようでもある。また、P₃、P₄、P₅についても、本遺構に伴うものようであるが、性格については断定できない。P₇は、屋外にあるピットであるが、堆積層からみることにおいては住居跡のそれとは異っている。しかし、このピット中の埋土からは、土師器壺の破片が出土しており、何らかの形で他の遺構との関連が考えられる。

カマドは、西壁中央部に構築されており、焚口部分は35×20 cm径の焼土で覆われている。焼土層は、床面より2~3 cm下にまで及び、また、その両側には、黒色土と粘土の入りまじった土によって袖部がつくられている。

焚口部と煙道との境界は明瞭であり、煙道部は西北西の方向にある。長さ1.15 m、巾30 cmほどで、地山面を20 cm位掘り込んでいる。上部構造としては、粘土による被覆がある。また煙道



第13-1図 第10号竪穴住居跡平・断面図

部の周壁は赤く焼けている。煙出部は地山面をほとんど垂直に30cmほど掘り込んで形成されている。この部分の埋土内からは遺物が出土している。

他の施設は確認されないが、P₁は可能性として貯蔵穴の機能を持つピットとも思われる。

出土遺物

全体としての遺物量は少ないが、実測可能な土器は4点ある。これらは何れも坏だけで、甕は体部片一点と少ない。坏類はA類が主体であり、その切離しは回転糸切によるもの1点、ヘラ切によるもの3点である。しかもこのうちの三点は、糸切の坏を一番下にして三枚重ねて出土したものであり、本遺跡において第1号住居跡と共に二者の切離しの坏が共伴する例でもある。しかし、遺構の一部が私有地に入り込み全容は確認できない。

(1) 坏類

A類は、No.47 (写真No.33)、No.48 (写真No.34)、No.49 (写真No.35)、No.87 (写真No.36)の4点である。

No.47の坏は、回転糸切無調整の坏である。体部は底部と明瞭な一線を画しながら、直線的に立ち上がり、鮮明なロクロナデ痕を残している。器高の低い坏であり、底径は口径の1/2より僅

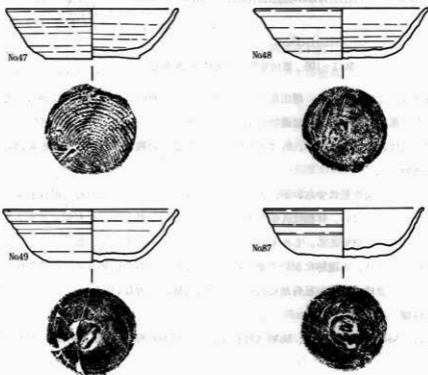
第10表
堆積土層一覧

堆積土色	番号	特徴
① 黒褐色土	I	ほとんど削られ部分的に散在
② 黒色土	II	耕作土層で炭灰が散見し遺物(②)をふくむ
③ 黒色土	III	住居跡最下層にうすく堆積
カマド部一般堆積土層一覧		
④ 黄褐色粘土質シルト	IV	煙出部上層
⑤ 暗赤褐色焼土		カマド部堆積層
⑥ 黒褐色土		焼土との混土
⑦ 梅暗褐色焼土		カマド部堆積層
⑧ 褐色シルト質粘土		カマド上部堆積層
⑨ 赤色焼土		焚口部堆積層
⑩ 黒色土	III	煙出部堆積層
⑪ 明褐色シルト		煙出部上部層のくずれたもの
ピット堆積土層一覧		
黒色土	II	ピット1~6
黒褐色土	I	ピット堆積土層は削りかき取り70%程度で削入

かに大きい数値を示し、大き目である。口縁部周辺に黒変した部分が若干あるが、全体としては鮮やかな灰オリーブ色を呈している。胎土中には粗砂が含まれるが緻密であり、焼成もいい。

No.48、49は両者共へら切無調整で、形態、大きさ、色調とも非常に類似している環である。体部凹凸はあまり目立たず、口縁部は僅かに外反する。器高は浅く灰褐色を呈し、胎土中には粗砂を含み、決していいとは言えないが緻密であり、焼成も良好である。これらの特徴は、No.47を除く他の糸切による環に比し、明瞭な相違点といえる。

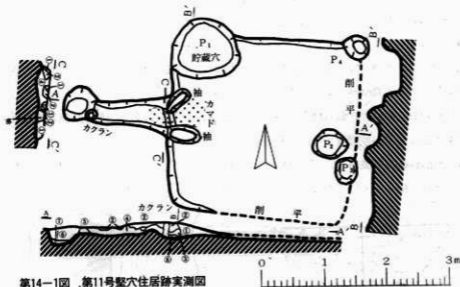
この他にNo.87の環があるが、同じへら切無調整といっても上記の2点よりは底径と口径の比差が大きく、色調も異なる。体部の色調は赤褐色を呈しており、底部周辺だけがくすべ色になっている。この様に同一の環に色調の異なる部分がある例は、当遺跡内の4号住居跡出土環（No.25）にもあるが、一部赤褐色を呈しているとはいえ、本来的には須臾器を意図して製作されたであろうという観点からA類に分類している。またNo.87の体部は口縁で若干外反するが、この部分は器肉が薄く、逆に底部は、異常に厚く不自然な断面をみせる。胎土は緻密で焼成も悪くない。この他に環はB類の体部片が若干あるが、明確な共伴と断言できるほどの量ではない。



第13-2図 第10号壑穴住居跡出土遺物 S-片

(2) 種類

量的にあまり多くはない。しかも何れも破片だけの出土である。土師器は外面にヘラ削り、内面に刷毛目を施す破片と、磨滅して技法の不明なものである。胎土は非常に粗雑で焼成も悪い。またロクロ使用によるものと断定できるものはない。須恵器是一片だけ出土しているが詳細は不明である。



第14-1図 第11号竪穴住居跡実測図

第11表 堆積土層一覧

①	堆積土色	基本層	特徴	⑤	堆積土色	基本層	特徴
①	黒色土	Ⅱ	粘土ブロック、遺物混入	⑤	黒色土	Ⅲ	焼土量が少ない
②	黒色土	Ⅱ	焼土を多量にふくむ	⑥	赤褐色土		焼土(煉出部上)
③	赤褐色焼土		カマド部	⑦	黒色土	Ⅲ	シルトが混入
④	黒色土	Ⅲ	焼土を多量にふくむ	ピット堆積層		黒色土(Ⅲ)	1. 黒褐色土(Ⅰ) 2. 3. 4

第11号竪穴住居跡 第14-1図 写真33~34

本遺跡内南東部分に位置し、削平のために南壁一部と東壁全体が確認できない遺構である。

西壁 2.6 m、南・北壁の残存辺長は各々 0.5 m、2.6 m であるが、基本的には方形のプランを呈すものであろう。壁高は残りのいい部分(西壁)で 7 cm 位である。

床面は、平坦であるが、若干ながら東側へ緩い傾斜を持つ、ピットは 4 個 (P₁~P₄) 検出されている。P₁ は北西隅近くに掘り込まれ、1 × 0.9 m 径、深さ 27 cm の規模であり、埋土は黒色腐植土に被われ、住居跡のそれと同様である。P₁、P₂、P₃ は 35~40 cm 径、深さ 18~20 cm 内外の円形状のピットであり、東側部分にある。埋土は、黒褐色で被われ P₁ とは異なるようである。

以上のピットの性格については、現状では何ともいえない。可能性としてはP₁が本遺構には確実に伴うもので、貯蔵穴になり得るかもしれない。

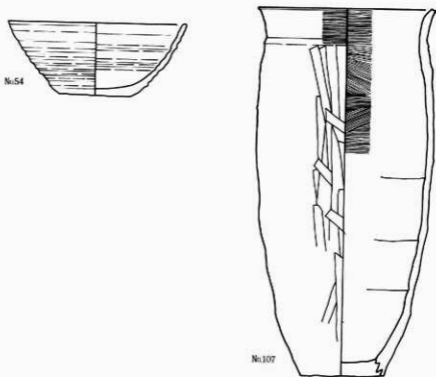
カマドは、西壁中央部に構築され、ほぼ40cm径の焚口部を有す、床面をやや掘りこんで形成され、両側には袖と思われる粘土状の隆起部分がある。焚口部から煙道部にかけては明瞭な段差がある。煙道の長さは1.5m、巾40cm位で、地山をU字状に掘り込んでいる。煙出部分は、上面で45×47cm平均の規模であり、煙道部分より更に17cmほど深く掘り込まれている。堆積土中には、焼土などが混入するが、遺物はみられなかった。

出土遺物

遺物量は少なく、実測可能なものはA類1点と土師器長胴甕1点だけである。他同類の体部数片と磨滅した土師器甕だけの出土である。

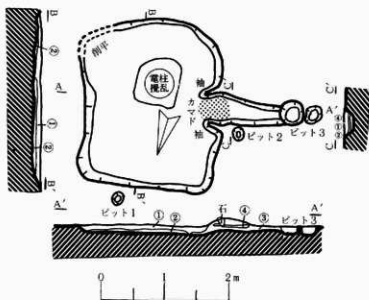
No54（写真No51）坏は、貯蔵穴埋土中からの出土であり、器高の高い回転糸切無調整の坏である。体部は急な立上がりで激しい凹凸痕を持つ。

甕類は、土師器の長胴甕No107（写真No59）が埋土中から出土している。口径14.4cm、器高29.4cm、底部は欠損して不明であるが、堆定径は6.7cmほどである。肩部に軽い段を持ち、体



第14-2図 第11号竪穴住居跡出土遺物5-16

部外面は籠ケズリ、内面はヘラナデで仕上げられている。口縁から肩部にかけて、一部極暗褐色を呈しているが、全体的には橙色である。他の坏片は、外面にケズリ、内面にナデ等の痕跡が観察されるようであるが、磨滅の度合が激しく断定はできない。また床面上でみる限りでは、ロクロ使用の甕と断定できるものはない。但し、埋土中から破片で一片出土している。



第15-1図 第12号竪穴住居跡実測図

第12号竪穴住居跡 第15-1図 写真35~37

本遺跡南端西側に構築され、床面中央部に電話線架設工事の擾乱部がみられ、南東隅が削平の為に明らかでない遺構である。

東西2 m、南北2.48 m、床面積4.96 m²と若干小規模な住居跡で、壁高は残存度の良い所で17 cm程で、床面より外傾している。床は粘土質であり、若干南壁に向かって緩傾斜をもつ。

ピットは、壁内からは検出されず、壁外から3個検出された。いずれのピットも堆積土などの相違から柱穴とみるのはむずかしい。柱穴、貯蔵穴、周溝等は確認されていない。

カマドは、遺存状況が極めて良好で、40×35 cm程の範囲で床面を5 cm内外掘り窪めた状態で焚口部を形成している。煙道部との境に径10 cm程度の自然礫が確認され、焼けただれていることから支脚としての役割を果たしたものと考えられる。燃焼部両側には黒色土と粘土で被覆した高まりがみられ、一応袖部として使用したものらしい。他に切石、角礫等は見あたらない。

燃焼部と煙道部の境は若干の段をもって区別せられる。煙道は長さ1.2 m、巾35 cmで地山面

第12表
堆積土層一覧

層積土色	層位	特徴
① 黒色土	Ⅱ	上部残存削平遺物ふくむ
② 黒色土	Ⅲ	遺物ふくむ
③ 黒色土	Ⅳ	焼土・シロト土混入
④ 赤褐色土		カマド部
ピット堆積土層一覧		
① 黒褐色土	I	ピット1, 2, 3

を10cm程度掘り込んで構築しており、周壁には焼土が付着していた。煙出部は、煙道部先端をさらに8cm程度掘り込み、直径34cm程の楕円形プランを示し、壁は垂直に形成され、埋土中には焼土粒が多量に混入していた。

出土遺物

完形品は一点も出土していない。

坏類ではA類、B類の細片が多数出土しているがほとんどが住居跡、カマドの埋土中からのものであり、しかも底部片は見当らない。

甕類については、刷毛目を残す破片が目立ち、はっきりとロクロ成形と断定できるものはみられない。写真No62はそのうちの一点であるが、内外面とも口縁部分を除いて刷毛目仕上げである。外面の刷毛目は縦方向に、内面は横位方向に施され、一部口縁部付近にもかかる。また、口唇部分には窪みを持ち、口縁そのものは外反せずに軽いふくらみを持って立ち上がる。

第13号竪穴住居跡 第16図—1図 写真38～39

本遺跡北端部の段丘崖に沿って、東西方向に走る農業用道路下より確認された遺構である。これは、東西に走る3号溝、南北に走る9号溝、また住居跡に残る浮遊焼土等との重複関係にもある。

3号溝との関係については、この溝が住居跡北壁を破壊して形成されており、新しい時期のものであることがわかる。また3号溝と浮遊焼土とについてみれば、やはり前者の方が新しいことが察せられる。

9号溝と住居跡については、堆積土層からの観察結果から、やはり溝の方が新しいようである。浮遊焼土は、この9号溝にもかかるものであるが、粘土質土で溝の一部を埋め固めた後に使用されたものであり、9号溝が古い。したがって、ここでの先後関係は、第13号竪穴住居跡→9号溝→浮遊焼土→3号溝の順になるとと思われる。ただ、この焼土は多少の削平を受けており、その全容は明らかでない部分もある。

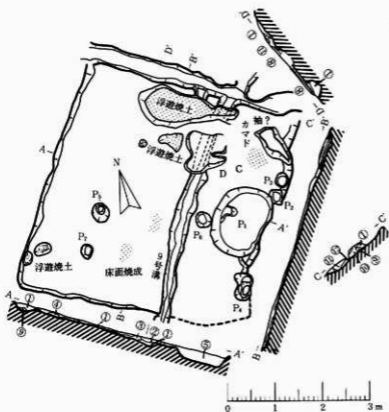
遺構の概要については、残存する部分辺長で、東壁3.9m、西壁4.8m、南壁2.7mであるが、基本的には方形に近いプランを呈するものと思われる。壁高は、残りのいい西壁で約12cmあり、床面から若干の傾斜を持って立ち上がる。床面は粘土質土であり、平坦に構築されている。また、比較的固くしまっている。なお、住居跡中央部付近は、前述の如く重複関係にある9号溝によって分断されている。

ピットは、全て壁内からの検出であり7個(P₁～P₇)確認されている。P₁は、1.05m×1.45m、深さ21cm位で東壁のほぼ中央部付近から若干南寄りに位置するピットである。ピット堆積土中、底部面から若干の遺物が出土していることと、堆積土層も住居跡最下層黒色土と同質であることから、位置、形態なども考慮して、貯蔵穴と思われる。主柱穴は、位置、形態、埋土

第13表
堆積土層一覽

層	土色	層厚	特徴
①	黒色土	Ⅱ	坪坪、カ ーボン含
②	黒色土	Ⅱ	粘土との 混入
③	黄褐色 粘土	Ⅱ	粘床土層
④	淡黄 褐色	Ⅳ	硬い砂 部分
⑤	黒色土	Ⅲ	住居跡 基下層
⑥	暗赤 褐色	Ⅱ	浮遊焼土
⑦	黄褐色 粘土	Ⅱ	浮遊焼土
⑧	黄褐色 粘土	Ⅱ	粘床 部
⑨	黄褐色 粘土	Ⅱ	粘床 部
⑩	黄褐色 粘土	Ⅱ	粘土多量 混入
⑪	黄褐色 粘土	Ⅱ	カマド部
⑫	褐色 シルト	Ⅰ	粘土多量 混入

ピット埋積土層一覽			
	黒色土	Ⅱ	ピット 1.5.6
	+	Ⅱ	ピット 2.3.7
	黄褐色土	Ⅰ	粘土多量 混入



第16-1図 第13号壁穴住居跡平・断面図

状況などの点からP₅、P₆と思われる。又P₂、P₃、P₄は堆積土が必ずしも住居跡堆積土と一致しないことから、新しい時期の浮遊焼土生活面に伴うものと思われる。なおP₁は後世の攪乱ピットである。周溝は確認されていない。

カマド部は、東壁北寄りに位置し、床面を4cm程掘り込み、径50×40cm内外の範囲で燃焼部を構築しており、周辺から遺物が多量に出土している。袖部においては、切石、角礫等を用いず、粘土状の隆起を残すだけで、幾分赤く焼けている程度のものであった。なお南側袖部は、攪乱の為に壊されており確認できなかった。煙道部、煙出部は確認されなかった。

浮遊焼土面（第2期生活面）は、上部が極度な削平によって壊され、はっきりしない。

13号住居跡が廃棄された後に貼床状の補強を施して使用したもので、壁などの拡張および縮小はみられない。壁の高さは、遺物散布レベルなどから考えれば、ほぼ住居跡堆積土層のⅡ層面と思われ、約7cm前後と思われる。床は、旧住居跡床面を使用している部分もみられるが、シルト粒の混入するⅡ層面と思われ、起伏に富む。

カマドは、北壁中央部分に焼土が多量に確認されていることから、北壁に構築されたものと考えられるが、東西に走る3号溝によって切断され、削平とも兼ねあわせて、明らかではない。

なお煙道、煙出部、袖等の付属施設も、確認されなかった。

ピットは、P₂、P₃、P₅、P₇の堆積土が、浮遊焼土堆積層と類似することから、ほぼ伴うものと思われる。P₇は直径25cm程で、形状は楕円形を示し、深さは旧床面をさらに掘り込んで構築し34cmに達する。これらの位置と形状などから主柱穴と考えられる。又P₃においても同様である。なお貯蔵穴と思われる様なピットは確認されていない。

出土遺物

実測可能坏はA類6点、B類2点、C類10点、計18点である。破片總数を加えても圧倒的にA・C類が多くB類は量的に少ない。

(1) 坏類

—C類—

内面に黒色処理、施みがき仕上げのC類は多様な出土状況を呈するが、切離しは全て回転糸切によるものである。無調整の坏はNo 8、No 9(写真5)、No 10(写真6)、No 11(写真7)の4点、再調整を持つ坏はNo 4(写真No 8)、No 5(写真No 9)、No 6、No 7(写真10)、No 12(写真11)、No 13(写真12)の6点である。後者は再調整を持つにも拘らず完全に糸切痕を消し去るものはない。無調整の一群は体部凹凸が比較的目立ち、体部と底部の境界は明瞭である。No 9は当遺跡にあっては大型の坏であるが、他の3点は大体同じ大きさである。またNo 8、No 10は口縁が外傾し、No 9、No 11は外反する。内面のへらみがきの方向は一定したものではなく、放射状のものはNo 9だけにみられる。No 1を除く他の坏は内面底部中央付近に若干の突出がみられる。何れの坏も内面のクロロナデによる細かい線状痕は施みがきによって消し去られているが、No 10の坏は凹凸が目立っている。これは巻き上げによる整形の痕跡の可能性もあるが断定は出来ない。またこの坏は、内面底部周辺の施みがきが同心円状に施されていることも観察できる。

一方、再調整のある坏は6点であるが、これらは、(a)外面口縁部だけに施みがきを施す坏、(No 5、No 6、No 7、No 13)、(b)体部下端に回転籠ケズリ(Na 4)、(c)口縁部にみがき、体部下端から底部外周にかけて手持施削り(Na 12)の三種類ある。(a)の坏は内面の器面調整の延長としてとらえられるが(b)、(c)の坏より器高が深く体部の立ち上がり急である。またNo 7の坏は底径が若干小さ目であるが他の三点は口径、底径とも近似値を示す。(b)、(c)の方もまた底径値の差こそあれ、大きさ、形態とも大差ない。

—A類—

須恵器A類にあっては6点の坏が実測可能であるが、反転復元のものが半数ある。このうちNo 15(写真No 13)、No 18、No 19、No 20、No 21の坏は回転糸切痕を明瞭に残しており、再調整が見られない。No 17(写真14)の坏は底部面が剝離しており詳細は不明である。全体として口縁は外傾するものが多く体部の凹凸が目立つ。特に内面の底部周辺はNo 17を除き雑なクロ

口仕上げであり、不規則な凹凸をみせる。No.17・18・19の実測図は反転復元によるものであるが、これらをも含めて底径の2倍値が口径値を上まわるものはない。

—B類—

他に貯蔵穴と床面から糸切底部片各1、台付杯の底部1片が出土している。

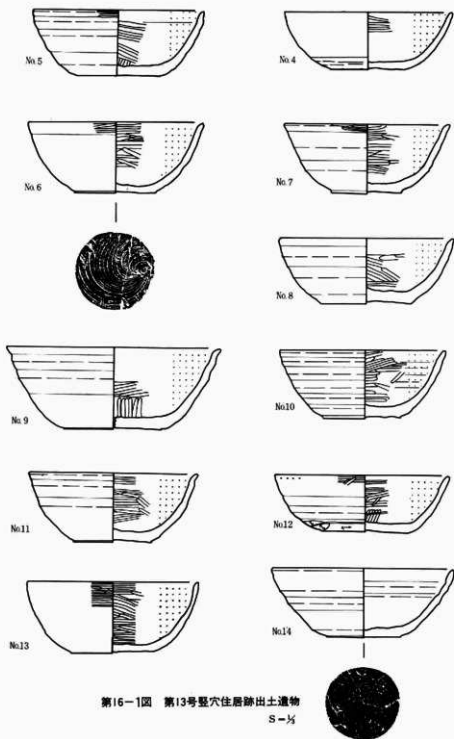
B類ではNo.14(写真15)、No.16(写真No.16)の2点あるが、量的には出土率が低く完全にC、A類に圧倒されている。両方とも回転糸切無調整の杯で、口縁形は異なるが、ほぼ同じ大きさである。胎土中には石英細粒、粗砂等を混入しており非常に粗雑である。No.14の杯は口縁の立ち上がり直口気味で、体部の中央より上部で凹凸が目立つ。又B類の場合は内面中央部に突出部分を持つのが普通であるがNo.14は窪んでいる。体部と底部の境界は明瞭であり、内外面の一部が黒色変化している。

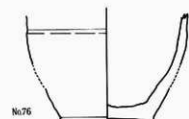
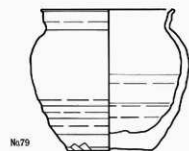
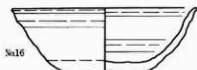
No.16は、体部に若干のふくらみを持ちながら口縁部で外反する器形である。外反する部分と、体部の接点にロクロによる稜が巡る。再調整の有無については磨滅して判然としない部分があるが回転糸切無調整と思われる。色調は全体として赤褐色の部分が多いが外面に白褐色あるいは黒色変化を呈する部分もある。他にB類の体部片が床面から1片、埋土中から回転糸切の底部片、墨書を持つ体部片が出ている。墨書の字体は細片のため判読できない。

(2) 甕類

土師器は量的に多いが破片が多く、実測したものは体部下端と底部を残すNo.76(写真No.65)の一点だけである。ここではロクロ使用と不使用のカメが出土するが、後者の仕上げは外面に篋ケズリ、内面にはヘラナデか刷毛目仕上げだけの様である。No.76の甕はロクロ成形であり、回転糸切痕を底部に残す。外面には特に調整の痕跡は見られない。一部剥離した断面より、底部と体部の境界付近に粘土を補強して整形していることが察せられる。色調は橙色を呈し、胎土には細石、粗砂等を混入し非常に粗なるものである。No.108(写真72)は口唇に窪みを持ち、体部外面には縦方向の篋ケズリが見られる。No.109(写真No.66)はロクロ不使用の体部下端から底部にいたる甕と思われる。体部下端から底部全面にヘラ削りがみられ、底部の反りが強い。底部径は75cm位である。

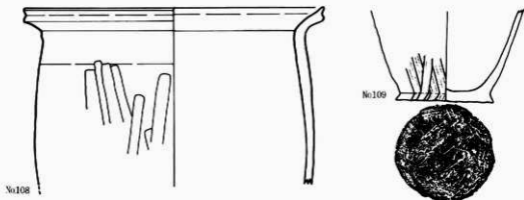
床面からは須須器の甕類は少なく若干の体部片が出土する程度である。埋土中からは、完形品の小型甕No.79(写真No.74)が出土している。回転糸切による口縁し痕を持ち、底部が異常に厚い。外面底部に篋による削痕があるが、一部小範囲だけにあり意識的な調整とは思われない。胎土については細石、粗砂を多量に含み非常に粗悪であるが焼成は良好である。





第16-2圖 第13号壑穴住居跡出土遺物

S-片



第16-3図 第13号竪穴住居跡出土遺物 S-片

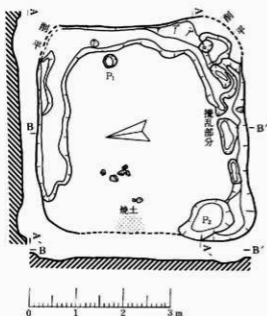
第14号竪穴住居跡 第17-1図 写真40

住居跡北東隅、西壁中央部付近、南東隅が削平されている為明らかでないが、各々の残存長は南壁 3.7 m、東壁 3 m、北壁 3.3 m でほぼ隅丸形の平面プランを呈すとみられる。残存する壁の高さは、東壁で平均 6 cm 位であり、床面から外傾する。床は褐色粘土質シルト面で平坦につくられ、遺物はあまり出土していない。尚西側中央付近の床面から直径 40 cm 位の焼土散布が確認されている。

ピットは、南壁部分に不整形を示す落ち込み状のピットが散在するが、これらは後世の攪乱によるものと思われ、周溝を壊しているものである。床面からは 2 個確認された。P₁ は、円形を示し、深さは 12 cm 位で、堆積土は住居跡最下層の黒色土と同質であり、ほぼ位置、形態などから柱穴と思われる。尚、埋土中から土師器甕片が出土している。P₂ は、西壁部南寄りに位置し、直径 70 × 100 cm の不定形を示し、深さ 14 cm 程である。周溝をさらに深く掘り込み、底部は平坦に構築してある。尚、堆積土は P₁ と同様であるが、黄褐色のシルトが混じっている。遺物は埋土上部から出土している。貯蔵穴と推定されるが明らかでない。

カマドは西壁中央部に位置していたものと考えられるが、削平の為に、ほとんど壊されており、煙道、煙出部すら確認出来なかった。床面焼成は、35 × 40 cm 位で、楕円状のプランをもち、床面を幾分掘り込んで形成している。

周溝は、北西隅から東壁、南西隅にまたがり、壁直下に構築せられている。南壁部分は攪乱で明らかでない。床面からの深さは、遺存状況の良い部分で 6 cm 位である。



第17-1図 第14号竪穴住居跡平・断面図

出土遺物

遺物の出土状況は非常に少なく、床面上からはロクロ使用の土師器体部片、叩目痕のある須恵体部片、磨滅して切離し不明のB類底部片が各一片ずつ出土しているにすぎない。埋土中からはロクロ使用と不使用の甕の破片が出土している。前者の底部片は回転糸切によるものである。尚、この地区の第I層からNo.56、No.57の2点の坏が出土しているが、同住居跡との関連については調査の際の不手際により明言できない。しかし一応当住居跡関連としてこの項で記す。No.56はC類で、回転糸切無調整の坏である。内面の窪みがきは横位の方向に走り放射状のそれは観察されない。体部の立ち上がりは比較的急で、やや直口気味の口縁につながる。胎上中には粗砂が若干混入するも、焼成と共に比較的良好である。

No.57はB類で回転糸切無調整の坏である。体部の凹凸は外面が顕著でありロクロナデ痕が明瞭に走る。胎土は比較的良質で焼成もいい。

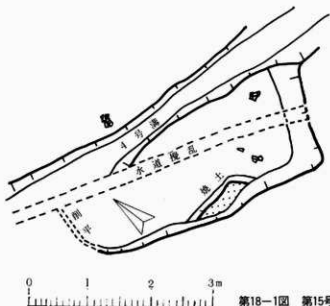


第17-2図 第14号竪穴住居跡出土遺物 S-Ⅹ

第14表
堆積土層一覧

堆積土色	基本層	特 徴
① 黒色土	Ⅱ	住居跡上層(部分的に残存)
② *	Ⅲ	住居跡下層(堆積はうすい)
ビット堆積土層一覧		
黒色土	Ⅳ	ビット1、2、深溝堆積層

第Ⅱ層が耕作土となっており、削平及び攪乱が遺構にまでおよび



第15表
堆積土層一覧表

	土色	基本層	特徴
①	黒色土	Ⅲ	内壁多数混入
○上層は、攪乱、削平によって明らかでない。			
○竊掘施工時の内壁多数混入。			

第18-1図 第15号住居跡実測図

第15号竪穴住居跡 第18-1図

4号溝、5号溝と切合い、その他住居跡の3分の2が攪乱によって壊され、明らかでない。各々の壁の残存長は、南壁3.6m、東壁1.8m程度で、平面形は不明である。残存する壁の高さは、南壁で20cm位で床面から外傾する。床は粘土質シルトであり、堆積土より幾分固い程度で、特に突き固められた痕跡はない。又、床面南壁東寄りに厚さ2cm弱の焼土を確認したが性格などは不明である。ピット、周溝、貯蔵穴類は確認されなかった。

カマドは南壁中央部に位置すると思われるが、攪乱、切合いの為にほとんどが壊されておりはっきりしない。ただし周辺から若干の遺物が出土している。

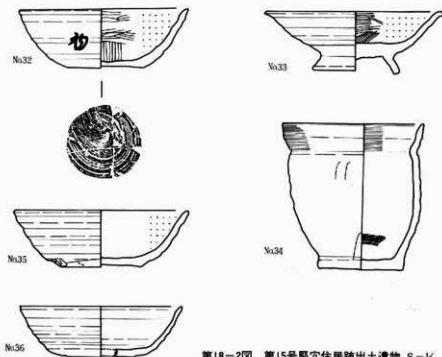
煙道、煙出部等も確認されていない。

出土遺物

当遺構では、実測可能な遺物はC類2点、A類1点、高台付坏1点、土師器甕1点である。坏類は全てロクロ成形であるが、甕類については破片を含めてロクロ成形と思われるものは、見当たらないようである。

(1) 坏類

C類はNo.32(写真3)、No.35(写真4)の2点であるが両者とも内黒、篋みがき仕上げであり、回転糸切による切離し後、体部下端に手持彫削り調整を施している。No.32の坏は外面体部中央には「物」の墨書があり、外傾する口縁を持つ。内面は放射状の篋みがきの上部を横位の



第18-2図 第15号竪穴住居跡出土遺物 S-片

鏡みがきが切るかたちにある。若干、小型の坏であり、胎土、焼成共に良好である。

No. 35は、No. 32とほとんど同じ位の大きさの坏で切離し、調整方法とその部位まで全く同様である。ただNo. 35の方が体部の凹凸がC類の中では顕著であり、底部との境界も明瞭である。また、底部外面には、×印の刻線が記されている。内面の調整は単位が不明であるが鏡みがきと思われる。色調は全体的に、にぶい橙色を呈し、胎土は粗砂等の混入が少なく良質である。

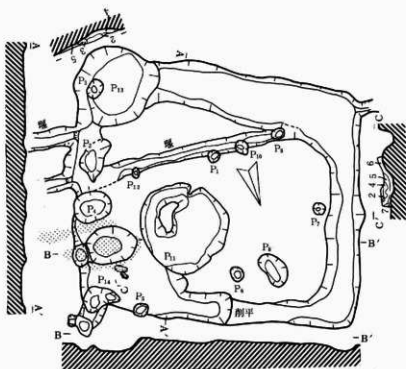
この他に同種の体部片が若干出土しているが、その中に黒色処理が何らかの作用によって消え去ったと思われる坏片が数片あるが、鏡によるみがき痕は明瞭に残っている。このうち一点は口縁が強く外反する器形であり、No. 32・35の形態とは異なるもののように思われる。これらは何れも胎土が精良な破片であり、中には白橙色を呈するものもある。

A類にはNo. 36の坏があるがこれも回転糸切無調整のものである。外傾する口縁を持ち、体部の凹凸は目立つ、A類の中では最も器肉が薄手であり、器高も低い。胎土、焼成とも良質である。この他に底部破片が一点出土しているが、この場合も回転糸切による切離しのもので、残

存部分では調整痕がみられない。

(2) 壘類

土師器だけの出土であり、ロクロ整形と断定できるものはない。Na34 (写真No61) は小型のもので巻上げ整形である。口縁部は内外面ともに横ナデ仕上げ、外面体部は縦位の篋削り、内面横位の篋ナデによるものと思われるが磨滅のため明瞭でない部分が多い。肩部段もまた不明瞭である。色調は、赤褐色を呈し粗悪な胎土である。最大径は直口気味の口縁部にあり、口径は11.2cm 底径6.2cm、器高11.6cmの大きさである。



第19-1図 第16号竪穴住居跡平・断面図

第16表 堆積土層一覧

堆積土色	基層	特 徴	堆積土色	基層	特 徴
① 黒色土	Ⅱ	遺物をよく含む。住居内一部分的に横篋(極度な削平の為)	③ 暗赤褐色焼土		カマド部第3層碎片混入
② 黒色土	Ⅲ	カマド上部に堆積ビット堆積土	④ 暗赤褐色焼土		上層より幾分固くしまっている
③ 暗褐色土		焼土との混土。カマド上層	⑤ 極暗赤褐色焼土		黒色土が混入し、幾分よごれている
④ 明赤褐色焼土		カマド部第2層、遺物(環、コマ片)混入	⑥ 層は、後述の極度な削平の為ほとんど残積をとどめない。		
ビット堆積土層		(基本層Ⅱ)ビット1, 2, 4, 6, 9, 10, 12, 13, (基本層Ⅰ)ビット14(粘土まじり)ビット3, 5, 7, 8, 11は不平整により不明			

第16号竪穴住居跡 第19-1図 写真41~42

本遺跡内では、比較的残りの良い遺構であるが、この場合も北東隅が覆乱され全容は明らかではない。東西5.9m、南北5.3mで隅丸方形のプランを呈し、床面積約31.27㎡と本遺構内では大目目である。壁の高さは10cm位で若干の傾斜を持つ。床面は粘土質で堅くしまっている。

ピットは、屋内から13個、屋外より1個検出された。住居跡堆積土に近い土色の埋土で被われるピットは8個（ $P_1 \cdot 2 \cdot 4 \cdot 6 \cdot 9 \cdot 10 \cdot 12 \cdot 13$ ）あり、このうち P_1 、 P_8 は、位置、形態、深さなどから本遺構に伴う柱穴と思われる。また P_4 、 P_{13} は、同質土で被われ、特に後者は底部面から遺物を出土しており1.7×1.7径のプランで深さ15cm位である。これらは、位置や形態から貯蔵穴とも推察されるが、断定はできない。

他のピットは、調査段階の不手際により、前後関係はもちろん、性格等については一切明かにすることは出来ない。

周溝は、北壁の一部、西、南壁にみられ10cm前後の深さである。本来的に19-1図のような様相であったかは問題のある所でもあるが、上巾75cm、下巾40cmの規模を有す。 P_{13} は、この周溝と思われる部分を掘り込んで形成され時間差をみせる。

カマドは、東壁中央部からやや北側に位置し、南東方向を指す。煙出部と煙道部は削平によって明らかではない。焚口部分は、床面を6cm前後掘り込んで形成され、その前方には煙道部の残痕と思われる落込み状のピットが火熱を受け、赤く焼けた状態で確認された。袖部とはっきり断定できる施設はみられないが、焚口部北側から赤く焼けた自然礫が出土している。

なお、床面南寄り部分は、東西に走る堰によって一部壊されている。

出土遺物

(1) 坏類

A類

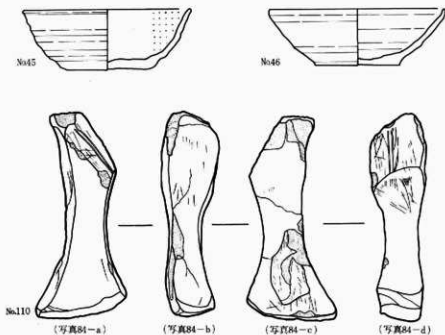
A類は破片だけの出土であり、床面からは体部の小細片が数点しただけにすぎない。

埋土中からは、回転糸切痕を残す底部破片が出土しているが何れの場合にあっても明確な共伴をみせるものではない。

B類

B類も破片が多く、実測可能のものはNo46（写真No19）の一点だけである。カマド内からの出土で回転糸切無調整の坏である。体部は直線的に立ちあがり、口縁部分で若干内湾する器形である。また、底部が張り出した形で体部との境界も明瞭である。色調は橙色を呈し、胎土・焼成とも良好である。B類中ではやや特異な形態であり、A類、C類と比較しても相違点が察知される。

この他に回転糸切の切離しによる同類の底部が4片出土している。このうち3片は、小目目



第19-2図 第16号壘穴住居跡出土遺物実測図 S-片

の底径であり、No.46の底部と同様の形態を有し、張出しがもっと強くなっているものもみられる。他の一片は、斲削りによる再調整が施された様子もあるが、この部分だけでは断定する根拠に欠ける。

C類のNo.45(写真No.18)は、磨滅しているため体部の凹凸は見られない。切離技法、再調整の有無も判然とせず、内面の磨みがきの単位も不明である。体部は、若干のふくらみを持ちながら立ち上がり、口縁部分で若干外反する器形である。また、内面中央部は窪みになっており、その分だけ器肉が薄くなっている。

このほか、底部片が2個体部出土しているが、両者とも再調整のため切離しが不明である。一点は内外面とも磨みがき調整によるもの、他の一点は回転斲削りを施したと思われる。

(2) 壘類

土師器、須恵器とも破片だけの出土である。

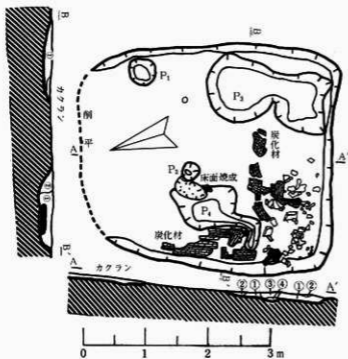
土師器にはロクロ成形とそうでないものがあり、前者の破片には、内面がカキ目による仕上げもあり、後者は、外面斲削り、内面は篋ナデか、刷毛目技法による。

須恵器は、床面から体部片が出土しているが、外面に斲削りが施されており、ロクロナデ痕

を消している。埋土中からは、明瞭な叩目痕を持つ体部片が出土している。(写真No79)

その他

ロクロ成形による土師器の台付坏の脚部破片、砥石 (No 110、写真No84—a・b・c・d) 他スラッグ片等が出土している。台付坏は、従来のB類の範疇に入れるべきものでもある。砥石は、佐藤氏によれば、新第三紀上部の泥質細粒凝灰岩で出来ており、奥羽山地の和賀地方から雫石地方に分布するものとされている。四面とも使用され、一部には二条の溝が走る。ひび割れが数ヶ所に観察され、その線に沿って剝落している部分もある。長さ16cm、最大幅7cmで、使用痕は縦方向に走る。



第20-1図 第17号竪穴住居跡実測図

第17号竪穴住居跡 第20-1図・写真43~46

西壁 3.3m、東壁 3.7m、南壁 3.2mあるが、北壁の残りは悪い。全体として隅丸方形に近いプランを呈し、主軸は北東方向を指す。壁高は、約12cmほどで、垂直な掘り込みではない。

床面は粘土質シルトであり、北から南方向に微傾する。西側部分の床面上には、板状の焼木材が多量に出土しており、床部分にも焼痕が確認されたため焼失家屋と思われる。

ピットは屋内から4個ほど検出されたが、そのうちの2つ (P₃、P₄) は不定形で、10cm程度

第17表
堆積土層一覧

堆積土色	基本層	特徴
① 黒色土	Ⅲ	炭化材が多数散在する
② 黒褐色土	I	幾分焼土が散在
③ 黒色土	Ⅲ	湿入物がみられない
④ 暗褐色土		粘土ブロック混入
ピット堆積土層一覧		
黒色土	Ⅱ / Ⅲ	ピット 1, 2, 3, 4
単住居跡上部層は、削平によって不明		

の深さしかなく、また遺物も存在せず、性格は不明である。残る2つ(P₁、P₂)のピットは、位置関係から察すると柱穴とも思われるが定かではない。

カマドは、特に確定しない。ただ、東壁中央部分に40×30cm径の範囲に黒色土と焼土の混土層がみられる。しかし周囲にはカマドに伴う施設が確認されず、この焼土そのものの性格もまた不明といわざるを得ない。

出土遺物

実測可能な坏は、床面一点(No31、写真No17)、埋土中より一点(No30)の出土。両者ともC類の坏である。A類は細片が若干で最も少ない出土率を示す。B類もまた破片ばかりであるが、量的には最も多いようである。

(1)坏類

—C類—

回転糸切無調整の坏で、体部でふくらみを持ちながら口縁部で外反する。体部の凹凸はあまり目立たず、器肉がうすい。この坏は内面に光沢をみせ、一部に艶磨きが観察されるにも抱わらず、黒色処理の痕跡が判然としない。艶磨きの方向は、体部上半に横位にある。底部中央部分は若干窪みになっており、その分だけ特に器肉がうすくなっている。また、外面口縁直下には「仙」の刻線がある。胎土中には多量の雲母が混入しているが精良であり、焼成も極めてよく、叩くと金属音を出す。この他、床面からは、同種片が一点出土している。

埋土中からはNo30の坏がある。回転糸切による切離して再調整のあとのみられない。器高が高く、大き目で、体部は若干ふくらみながら外傾する口縁に至る。なお、内面の艶磨きの単位は不明である。

—A類—

床面からは体部細片を極少出土するだけで、明確な共伴とはいえない、埋土中からは底部破片が2個体分ある。何れも回転糸切痕を持ち、残存部分にあって再調整の跡はみられないようである。

—B類—

破片のみの出土であるが、量的には最も多い。回転糸切痕を残す底部片があるが、磨滅しており、調整の有無は判断できない。

(2)糜類

土師器片は多数出土しているが、ロクロ成形のものが多くみられるようである。No111(写真70)はそのうちの1つであるが、口唇に窪みを持ち、その内側には線縁を持つ。比較的薄手で、胎土はいいが焼成は弱いようである。

須恵器は、No112(写真No83)の大甕がある。口縁はめくれるように外反し、口唇部には窪



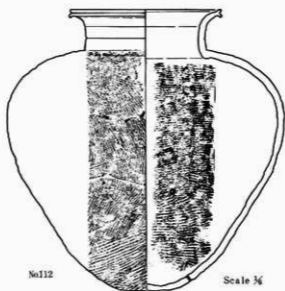
No.30



No.31



No.111

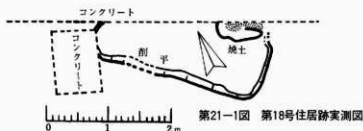


No.112

Scale 1/4

第20-2図 第17号竪穴住居跡出土遺物 No.112を除きS-1/4

みが巡る。口径24.2cm、器高40.2cm、最大径は胴部で44.1cmと本遺跡では最も大型のものである。また、丸底の底部は不安定なすわりをみせる。外面の叩き目痕は、胴部近くでは格子目、体部では斜～縦位方向、底部では横位方向に走る。内面は大体横位方向に統一されている。



第18号竪穴住居跡 第21図

遺構のほとんどが現代の建物基礎によって壊され、詳細は不明である。

壁は、南辺 2.25m、東辺 1.20mを検出しただけであり、壁高は 3 cm程を残すだけである。

床は起伏に富み、粘土質土である。焼土は、東壁中央部と思われる部分から検出されているが、カマドとしての根拠に欠ける為に明らかでない。なお遺物は焼土中から幾分出土している。柱穴、貯蔵穴、周溝等は、調査部分からは、確認できず、不明である。

出土遺物

破片だけの出土、埴類は少なく大半は甕である。ここでは、C類はみられず、埋土中であっても同様である。

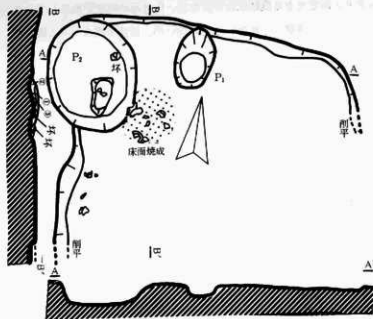
A・B類とも体部、底部片だけであり、量的にはB類片が多い、底部は各々一点づつあるが、両者とも回転糸切によるものである。

甕類については、土師、須恵器とも小細片だけであり、技法の判明するものが少ない。

写真No.77 a-bは、内外面に叩目痕を残す須恵器片である。また写真76は、回転糸切痕を残す台の一部である。この手のものは、第8号住居跡の長頸壺のそれにも似ている。



第21-2図 第18号竪穴住居跡出土遺物 S-Ⅱ



第22-1図 第19号竪穴住居跡実測図

第18表 堆積土層一覧

堆積土色	厚さ 層	特 徴
① 明黄褐色 シルト		黒褐色土と の混入
② 黒褐色土	I	焼土多量混入
③ 明黄褐色土		シルト質土
ビット堆積土層一覧		
黒褐色土		ビット 1・2

第19号竪穴住居跡 第22-1図

表土が極端に浅くなっており、攪乱・削平があったと思われ東壁・西壁の一部がはっきりしない遺構である。また、南壁は第20号住居跡と重複しカットされている。但しこの部分にあってもかなりの削平があり、判然としない部分もみられる。

先後関係については、本遺構の方が古い時期のものにとらえられるが、遺物においては決定的な差異を観察できない。

規模は、北壁2.6m、東・西壁の残存辺長は各々1.5m、0.5mほどしか確認されず、全体プランは不明である。壁高は遺存状態の良好な北壁で約7cm位である。壁のたちあがりは若干傾斜している。

床面は、平坦な粘土質シルトであり、特につき固められた形跡もみられない。

ビットは、壁内と壁部中から各1個づつ検出されている。P₁は、北壁やや中央部に位置し、40×60cmほどで、楕円状の平面プランを示し、深さは床面から16cm程度である。埋土層は、住居跡の堆積層と一致する。したがって当遺構に伴うビットと考えられるが、性格などは不明である。P₂は北西隅に位置し、壁より張り出して構築してある。直径95×115cmではほぼ楕円形を示し、床面からの深さは12.4cm程で、床面に向かって垂直気味に掘り込まれている。

埋土はP₁と同様、住居跡堆積層と合致する。遺物も埋土中から見られ、位置、形態などを総合的にみれば、当遺構に伴う貯蔵穴と思われる。なお、柱穴、周溝等は確認されない。

カマドについては、はっきりと断定できる痕跡はない。ただ、P₂付近に焼土が散在しておりP₂そのものが、カマドの施設に関わる遺構にとれないこともないが、前述の観点でみる限りはあてはまらないようである。

出土遺物

実測可能な土器は、坏類だけでありA類1点、B類2点である。C類は貯蔵穴埋土中から体部小細片が極少の出土。また甕類は、土師器・須恵器とも破片である。

(1) 坏類

A類のNo41(写真No25)は、反転復元による実測である。回転糸切無調整で、体部は直線的に立上がる。器肉が薄く、体部の凹凸は目立たない。良質の粘土を使用していると思われ、焼成も固く良好である。

B類はNo39(写真No26)、No40(写真No27)の2点であるが、胎土が非常に悪く、内面の凹凸が目立つものでもある。特にNo39の坏はそれが激しい。体部に若干のふくらみを持ちながら、口縁で外傾する器形である。No40は底径が小さく、体部にふくらみを持ち口縁で強く外反する。外面の底面近くに沈線状のロクロ成形痕が回る。これらは共伴する前述のNo41のA類とは明かに器形を異にするものである。

C類は、体部の細片だけで明確な共伴とは言い難い。墨書を残す体部片があるが字体は判明しない。

(2) 甕類

甕は、土師器片が圧倒的に多く、須恵器は床面上で磨滅した体部細片が1点、埋土中からは内面をカキ目で仕上げた体部片のみである。土師器はロクロ成形によるものと、そうでないものがあり、前者には外面を削り、内面にカキ目を施すものが多い。後者は、外面に削り、内面にヘラナデか刷毛目による仕上げである。



No.41

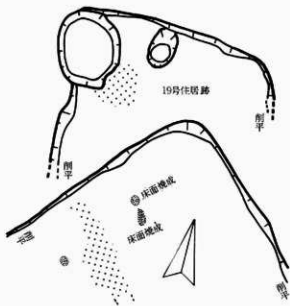


No.39



No.40

第22-2図 第19号墓穴住居跡出土遺物 S-X



第23-1図 第20号住居跡実測図

第19表 堆積土層一覧表

	土色	基本層	特徴
①	黒色土	Ⅲ	シルトが多量に混入

○19号住居跡と切合うが、20号住居跡の平面プランから、ほぼ当遺構の方が新しい時期の遺構とおもわれる。

○上層は削平の高不明

第20号竪穴住居跡 第23-1図

本遺構は、第19号竪穴住居跡との重複関係をみせるものである。削平・攪乱などによってあまりはっきりしない部分もあるが、本遺構に切込んだ形で構築された第19号竪穴住居跡が新しいようである。

規模は、削平等により全体が明かではないが、西・北壁は各々3.35m、2.6m位残存している。壁高にあっても北壁部分で6cmほどであり、プランははっきりしない。

床面は、住居跡内埋土よりは堅いが、つき固めたというほどのものでもない。また、凹凸も少なく平坦である。

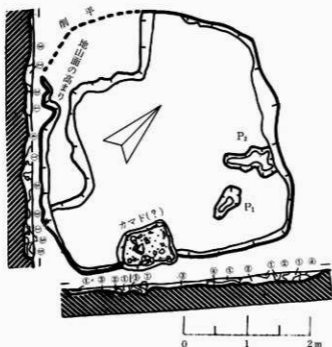
ピットは、屋内と断定される範囲には存在しない。10号ピットは本遺構の南東方向に存在するが、この場合も極土の削平を受けており、本遺構にどの程度の関わりを持つものであるかは明言できない。なお、このピットは、60cm×70cm径で、地山部分に約7cmほど掘り込まれている。また、ピット床面中央部分は、若干ながら窪みを持っている。

カマドについては、はっきりとそれらに伴うべき施設が確認されていない。西壁中央部付近から遺構中央にかけて、東西に長い焼土範囲が確認され、遺物の存在もみられるようであるがカマドの痕跡とも判断できず、この場合の焼土そのものの性格もまたはっきりとしないのが実状である。

出土遺物

埋土、床面出土を合わせても遺物量は少なく、しかも破片だけである。A類の体、口縁部片、土師、須恵器製の体部片等がある。何れもロクロ成形と思われるが、詳細については不明。

埋土中からは、B・C類の体部片、須恵器の壺・壺と思われる破片、カキ目の土師器片の出土。



第24-1図 第21号竪穴住居跡実測図

第21号竪穴住居跡 第24-1図 写真55~57

住居跡南西隅が削平され明かでない。北壁3.1m、東壁3.4m、西壁・南壁の残存長は、1.6m・3mで、ほぼ隅丸方形の平面プランを呈すものと思われる。残存する壁の高さは、遺存状況の最も良い東壁で約9cm位であり、床面より外傾気味に立ち上がる。床は粘土質土であり、固く締まっているが、特に突き詰められたような痕跡はみられない。又、床面は攪乱の為か全体が起伏に富み凹凸が激しい。床面からの出土遺物はみあたらない。

ビットは東壁内から径30cm位で、深さ10cm程の不定形の平面形を示すものが2個確認されたが、共に住居跡堆積層と必ずしも合致しないことから柱穴とみるのは難しく、性格および用途は不明のビットである。また当遺構からは貯蔵穴・柱穴・周溝等は確認されない。

カマドは東壁中央に位置し、燃焼部と推測される焼土中から多量に遺物が出土している。燃焼部と思われる部分は、特に床面を掘り込む形態は取っておらず、床を直接使用したらしく、床面が赤く焼けていた。しかし、両側には、袖部となるような設備は何もみあたらなかった。また煙道部や煙出部も、検出出来なかった。

第20表
堆積土層一覧

堆積土色	層番号	特徴
① 黒色土	Ⅲ	遺物ふくむ
② 黒色土	Ⅲ	シルトがブロック状に混入
③ 黄褐色シルト		黒色土との混土
④ 黒褐色土		シルトとの混土
⑤ 黒色土	Ⅲ	焼土が混入している
ビット堆積土層一覧		
黒褐色土	I	ビット1.2

カマド部堆積土層は、赤褐色焼土と黒色土の混土。

出土遺物

(1) 坏

—A 類—

No43 (写真No31) の1点が埋土中から出土している。ロクロナデの痕跡を残し、外反気味に立ち上がる体部は、他のA類と器形を異にしている。回転糸切による切離して再調整はみられない。体部の凹凸は著しく、底部との境界も判然としない。胎土中に多量の粗砂を含み粗悪であるが、焼成は比較的良好である。

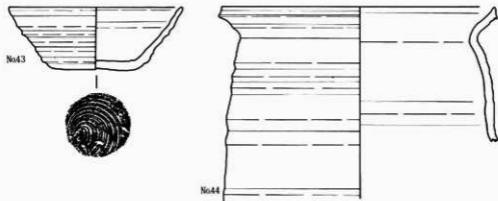
他に、底部片が出土しているが、これも回転糸切によるものである。

B類は全て破片だけであり、底部片は見当たらず、口縁へ体部に限られる。これらの遺物は、焼土中に集中しているのが特徴である。

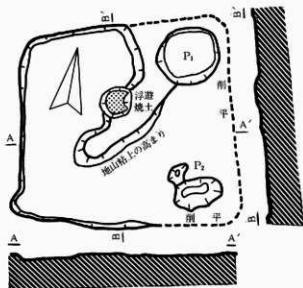
(2) 甕類

土師器No44 (写真No69) は、ロクロ成形によるものであり、器形的には第13号出土の甕に似ている。内外面ともロクロナデ痕を明瞭に残し、実測部分では広範囲の再調整はない。僅かに内面中央付近に斜位の刷毛目が観察される程度である。おそらくは欠失した下方部分にそれが続くのであろう。口唇部は窪んでおり、その内側にあたる部分にも浅い窪みが巡る。肩部は、明瞭な段を持たず短頸部から胴部へと直結している。外面には4cm径の黒斑がみられる。胎土中には、粗砂を多量に含み粗悪であるが、焼成は良好である。

他に底部が5点出土しており、回転糸切によるもの3点、木葉痕を持つもの2点がある。前者の中には、糸切後に簡単な篋削り調整を加えている場合もある。全体としてロクロ成形によるものの方が多くみられるが、内面にカキ目の痕跡を持つ体部片もある。また、ロクロ不使用の場合は、外面に篋削り、内面に篋ナデ又は刷毛目を施す例が若干みられるが、大半は小細片のため技法が判然としない。



第24-2図 第21号竪穴住居跡出土遺物 S-Ⅱ



第25-1図
第22号竪穴住居跡
実測図

第21表
堆積土層一覽

層積土色	厚+層	特徴
① 黒色土	Ⅲ	上部削平 の為不明
ビット堆積土層一覽		
黒色土	Ⅲ	ビット1
黒色土と 上部に焼土		ビット2

※ 上部層が極度に削平されている
為に明確な土層は不明である。
浮遊焼土は住居跡堆積層(黒色
土)中にふくまれる。

第22号竪穴住居跡 第25-1図 写真47

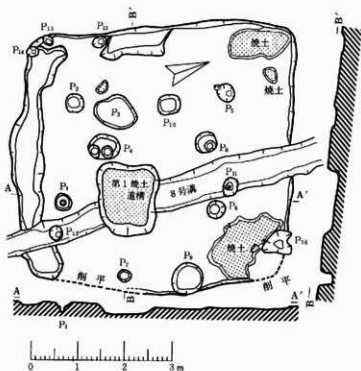
住居跡東壁、北壁の一部、南壁の一部が削平によって壊されている為に、正確な形状は分らないが、ほぼ方形を呈すと思われる。西壁2.6m、北壁・南壁の残存している壁長は、各々1.6m、2.1mである。壁の高さは、遺存状況の最も良い西壁で4~5cm程で、ほぼ垂直に掘り込まれて構築されている。床は住居跡中央部付近で2~3cm高くなるが、ほぼ平坦であり、粘土質の床面を持つ。堆積層より若干固いが、特に突き固められた様な痕跡はなく、黒色土が、部分的に混じって散在している。又遺構中央部より2~3cm程度高い位置に黒色土と焼土の混じった層が確認されている。直径30cm内外であり、遺物は含まれない。性格は不明であるが、おそらく攪乱の為の浮遊焼土と思われる。

ビットは、壁内から2個(P₁・P₂)が検出されている。P₁は直径80~90cm、深さ21cmほどであり、形状は楕円形を示す。堆積層は、住居跡堆積層と合致することから、当遺構に伴うものと思われるが、性格などは不明である。又、P₂は南東隅の焼土の下より検出され、不定形のプランを示している。床面を3~4cm程掘り込んで形成しているもので、遺物は含まない。P₁と同様性格は明らかでない。また、カマドは確認出来なかった。

出土遺物

遺物の出土量は少なく、あっても小細片だけである。貯蔵穴埋土中よりB類が二片ほど出土

している。一点は回転糸切痕を残している。住居跡内の埋土からは、土師器甕の体部片があるが磨滅のため詳細は不明である。底部を一部残す破片には回転糸切痕が残っている。坏は、A・B・C各類とも一片づつ出土しているが、何れも小細片のため特筆することはない。ただ、ロクロ成形であることは確かのようにである。



第26-1図 第23号竪穴住居跡平・断面図

第23号竪穴住居跡 第26-1図 写真48~50

本遺跡の北端東側に位置し、耕作による攪乱や、表土剥ぎの段階における削平を受け、北東隅から東壁南寄り部分の一部が確定しない遺構である。

西壁5.65m、南壁5.7m、北壁・東壁の残存長は、各々4.8m・2.4mでほぼ隅九方形の平面プランを呈すものとみられる。壁の高さは、遺存状況の最も良い西壁で約9cm位で壁は床面から外傾して立ち上がる。床は粘土質土であり、黒色土が床全体にブロック状に散布している。尚、床面は四く締まっていた。

ビッドは床面から16個検出された。16個中9個(P1~P9)は、埋土が住居跡堆積土と合致し、出土している遺物も同時期程度と思われることから第1期生活面に付随するビッドと考えられる。P1・P2・P3・P4は、ある程度底部面に向かって垂直に掘り込まれ、中には掘り方を有すビッド

第22表
堆積土層一覧

堆積土色	層番号	特徴
① 黒褐色土	I	部分的にみられる8号溝壁積層
② 黒色土	II	住居跡土層(うすい)第1方形焼土遺構
③ 黒色土	III	住居跡土層下層(5-6cm)浮遊土下部層
ビッド堆積土層一覧		
黒褐色土	I	ビッド10-16(但し16は粘土が混入する(カクラン?)
黒色土	II	ビッド1-9遺物をふくむ
黒色土	III	ビッド1, 2, 5, 6, 9以溝壁積層
新しい時期のビッド群10-16(浮遊土と同時期のもの)古い時期のビッド群1-9		

ともみられ、これら他の位置、形状などから判断する限りに於て、ほぼ支柱穴と思われる。P₉は、東壁中央部からやや北側に位置し、堆積層は黒色土一層であり、上部に焼土が微量混じって検出されたものである。また、堆積土中から遺物破片が出土していることより、ほぼ貯蔵穴と思われるが、断定はできない。P₃、P₄、P₁₁は補助的な柱穴とみられる。周溝は、南壁、西壁一部にみられ、上限巾65cm、下限巾45cm、床面からの深さ7cmほどで、床面を掘り込んで形成している。堆積層は黒色土である。また南壁東寄りで8号溝によって壊されている。なおカマドは確認されなかった。

また、この遺構内には、住居跡の埋土である一部の層上に、4ヶ所の焼土範囲が確認される。これらは何れも同レベル上に散在しており、二時期にかかる生活面を持つ可能性が考えられる。

以下については、浮遊している焼土面を第二面、地山の床面を第一面と記す。

浮遊焼土とされた第二面は、いうまでもなく最下層の第一面よりは確実に降るものであるが、この場合は、特に焼土下の黒色土の状況から、時期差を持つものとしてとらえられる。即ち、これらの焼土は、住居跡がある程度まで埋没してから形成されたと思われる。ただ、この焼土の範囲は上面をかなり削平されており、正確にはどの程度の広がりを持つのかは不明である。

一方、第1方形焼土遺構については、やはり、当住居跡の埋土を掘り込んでおり、床面以下にも達するものである。また、その埋まり具合も住居跡堆積層とは異り、時期差を持つことは明白である。前述の浮遊焼土との関連については、結論的には、同時期かそれより新しいであろうと推察される程度である。即ち、第1方形焼土遺構の埋土である黒褐色土は、浮遊焼土面下の土質とは異り、上層の削平された部分の土とも考えられることから、新しいものであらうと思われる。また、同時期と推察される可能性については、削平されて露出した焼土面が、上層の黒褐色土層に及ぶ場合のことであって、結果的に、遺構検出面が判然としないほどのカッピングを受けた状態では断定できない。

一方、第二面に関わるピットに想定されるのは、P₁₀～P₁₆の7個である。全て黒褐色土の埋土であり、基本的には第1方形焼土遺構と同様で、少なくとも第二面か、それ以降に付随すると解釈される。このうち、P₁₀、P₁₁、P₁₄は、位置・形状からは支柱穴と思われる。特にP₁₁については、底面部に10cm径の自然円礫があり、柱の下に置いたようにもみえるが、礎石としての役割を果たしたかどうかは解らない。その他のピットについては、特に規則性はなく性格等については不明である。このうちP₁₄は攪乱されている。

なお、第二面について補足するが、この浮遊焼土の存在する面が、生活面として把握されたとすれば、当然二時期の使用があることは先にも記したが、住居跡の規模については、立替えの様子はなく、第二面にあっては、第一面の壁をそのまま使用していたものであらう。壁高は検出面まで僅か3cm前後しか残存していない。床面に想定される焼土面レベルは、特に意識的

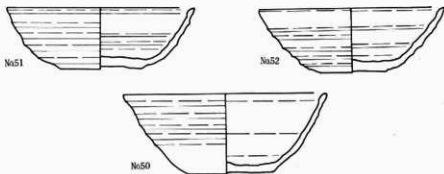
な構築の跡もみられない。しかし、部分的には黒色土部分さえも確認できない範囲もあり、表土の薄いこともさることながら、削平の激しさが窺えるであろう。

出土遺物

本遺構での遺物の大半は、焼土遺構に集中しており、竪穴遺構そのものに関わる遺物は非常に少ない。床面からは、土師器の甕体部片とB・C類の坏体部片が少量出土しているだけである。なおNo.51・52の坏については78Pで記す。

埋土中からは、B類No.50（写真No.49）が出土している。これは回転糸切で再調整を持たない大き目の坏である。

外面体部中央より上の部分には明瞭なロクロナデ痕を残しているが、下端部は平滑である。下端部には、指によると思われるナデ痕が若干観察されるが調整というほどのものでもない。また、胎土は粗悪であるが焼成は良好である。



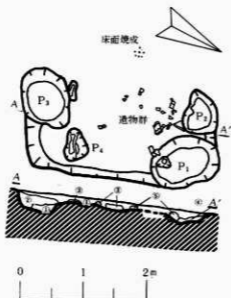
第26-2図 第23号竪穴住居跡出土遺物 S-Ⅱ

第23表 第23号住居跡ピット計測表

No.	形状	径 cm	深さ cm	位置	備考	No.	形状	径 cm	深さ cm	位置	備考
1	楕円形	40×35	27	床面	土師器細片含む 黒色腐植土 堀方を持つ	9	楕円形	65×70	20	床面	黒色腐植土
2	楕円形	25×23	28	床面	黒色腐植土	10	楕円形	43×50	10	床面	黒褐色腐植土
3	楕円形	75×65	10	床面	黒色腐植土	11	円形	35×35	18	8号溝内	黄褐色腐植土
4	楕円形	55×65	28	床面	土師器細片含む 黒色腐植土 堀方を持つ	12	円形	30×30	19	8号溝内	黒褐色腐植土
5	楕円形	42×34	29	床面	黒色腐植土	13	楕円形	25×30	9	西壁溝内	黒褐色腐植土
6	楕円形	36×40	20	床面	黒色腐植土	14	円形	25×25	19	南西隅	黒褐色腐植土
7	楕円形	30×27	31	床面	黒色腐植土	15	楕円形	25×15	14	南西隅	黒褐色腐植土
8	楕円形	25×27	33	床面	黒色腐植土 堀方を持つ	16	楕円形	55×70	16	床面	北壁寄り 黒褐色腐植土

第24表 堆積土層一覧

	堆積土色	基本層	特徴
①	黒色土	Ⅲ	焼土、炭化物混入
②	黒色土	Ⅲ	地山粘土が小ブロック
③	明褐色シルト		黒色土との混土
④	浅黄褐色粘土	Ⅱ	廻りすぎ部分
⑤	浅黄褐色粘土	Ⅱ	酸化鉄分がブロック状に混入



第27-1図 第24号竪穴住居跡実測図

第24号竪穴住居跡 第27-1図

西壁が全て削平されているために住居跡の全体の形状は確定しない。東壁は約2.8m、北壁と南壁の残存長は、各々1.1m・1.4mで、コーナーは隅丸形を呈す。壁高は、残りのいい東側部分で約10cm程度である。

床面は、地山粘土質シルトであり、平坦なつくりである。中央部付近には焼土が散在する範囲があったが、性格は不明である。

ピットは、遺構内から4個確認されている。P1は北東隅にあり、径80×98cmで南北方向に長い楕円形を呈す。深さは、床面より約11cm位である。規模や位置などから貯蔵穴ともとれよう。

P2・P3・P4は、何れも浅いピットであり、各々55×55cm、50×35cm、82×70cm径である。これらのピットからは、遺物を全く出土せず、形態や位置にあっても規則性を持つものではなく、本遺構内における役割や性格については不明である。なお、深さについては、4cm～27cmと巾を持つ。

柱穴、周溝、カマド等の施設は検出されないようである。

出土遺物

床面からの出土遺物は一点もなく、全て埋土中からである。完形品は、B類のNo59(写真No. 52-a・b)一点である。口縁が外反し、押しつぶされた形に歪んでいる。口径は広い方で14.8cm、せまい方で12.6cmである。胎土、焼成とも粗悪である。

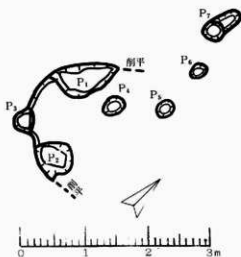
A類は、回転糸切痕を残す底部片と体部小細片が若干、C類は体部が一片だけの出土。

甕類は、土師・須恵器がある。土師器はロクロ成形とそうでないものがあり、後者の技法は、外面に削り、内面に刷毛目の痕跡を残す。須恵器にあっては、ロクロ成形後に外面を削るものと、ロクロ成形痕をそのまま残す破片である。

この他に、繊維を含む縄文片と石器が一点づつ出ている。



第27-2図 第24号壺穴住居跡出土遺物 S-4



第28-1図 第25号住居跡実測図

第25号壺穴住居跡 第28図

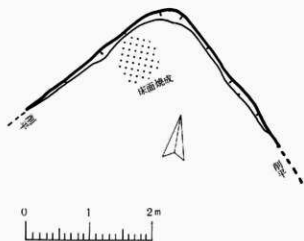
西壁1.6m、北壁は残っている部分で1.5m、南・東壁は確定できず、全体のプランは不明である。また壁の高さも、西側の最も残りのいい部分で8cm位であり、削平の激しさを物語っている。床面は、粘土質であるが、部分的に住居跡堆積層が混じり、よごれている。ピットは、全部で7個検出されている。P₁・P₂は西壁部に構築されており、いずれも直径60cm前後であり、深さは床面より僅か5～6cm程度である。遺物を全く含まず、堆積上も単純な一層で占められている。本遺構内における性格・役割については不明である。他のピットにあっては、位置こそ異れ、様相は同様である。その他、遺構に関わる施設は確認されない。

出土遺物

本遺構出土の遺物は、土師器甕の体部小細片が2点だけの出土である。遺構内の東部分に存在していたものであるが、外面に削り、内面を甕ナデで仕上げている。胎土中には石英粒を混入しあまりいいとはいえない。

第25表 堆積土層一覧表

	土色	基本層	特徴
①	黒色土	Ⅲ	シルトが多く混入している
ピット堆積土層一覧表			
	黒色土	Ⅲ	シルトが上部に幾分混入
ほとんど削平を受け不明である			



第29—1図 第26号住居跡実測図

第26表 堆積土層一覧表

	土色	基本層	特徴
①	黒色土	Ⅲ	シルト混入
②	赤褐色焼土		黒色土でよごれている
<p>層位の削平によって 詳細は不明である。</p>			

第26号竪穴住居跡 29—1図

本遺跡内南側部分に検出された遺構である。耕作時の削平がかなりあったと思われ南壁・東壁が確認されず、この場合も全容が明らかでない。西壁・北壁の残存長は各々2.5m、2.8m位で、コーナー部分は角張っている。また、壁高は残りのいい部分で約8cm位であり、床面から若干の傾斜をもって立ちあがる。床面については、粘土質シルトで構成されており、やや堅めであるが、特につき固められたと断定できるものでもない。なお西壁北よりの底面から径60×62cmほどの焼土が確認されている。しかし、その性格については明かにできない。また、遺構に関わる他の施設についても確認されなかった。

出土遺物

出土遺物は、焼土中からA類杯の体部片、B類杯の体部片が2～3点出土している。その他土師器甕の底部木葉底が出土し、体部外面に磨削りを施している。また、須恵器甕は外面に叩目・内面に布目文を施した破片が出土している。

第27号竪穴住居跡 第30図

本遺跡の北端段近面に立地し、農兼用道路下部から検出された遺構である為、遺構全域に削平が及び、全体のほぼ3分の1程度の検出にとどまった。

西壁・東壁の一部、北壁の全部分は確認出来ず、南壁においては、幾分削平を受けてはいるが、ほぼ全辺長を確認した。辺長は、南壁2.75m、西・東壁の残存長は各々0.75m程度で、平

第28表 下羽場遺跡整

住居跡番号	辺長 (m) 東西×南北	床面積 (㎡)	壁高 (cm)	主軸方向	柱穴		力	
					主	補	有無	位置
1	— × 3.5	—	10	東北東 N-55°-E	—	—	有	東壁南端
2	4.0 × 4.5	18.0	10	東南東 N-117°-E	1	1	“	東壁中央
3	3.75 × —	—	15	東南東 N-126°-E	—	—	有(旧)	東壁中央
				南 N-180°-EW	—	—	有(新)	南東隅
4	3.7 × —	—	18	東南東 N-133°-E	—	—	有	東壁中央
5	3.97 × 3.77	14.9	15~20	東南東 N-127°-E	—	—	有(新)	東壁南寄り
				南南西 N-147°-W	—	—	有(旧)	南壁中央
6	5.3 × 5.0	26.5	10	東南東 N-118°-E	—	2	有	東壁中央
7	3.3 × —	—	23	東南東 N-134°-E	—	—	“	東壁南隅
8	3.2 × —	—	13	東南東 N-135°-E	—	—	“	南東隅
9	4.7 × 4.3	20.2	10	東北東 N-47°-E	—	2	有(新)	東壁南寄り
				東南東 N-134°-E	—	2	有(旧)	南壁西寄り
10	— × 4.8	—	5~8	西北西 N-84°-W	2	3	有	西壁中央
11	— × 2.6	—	7	西北西 N-83°-W	—	—	“	“
12	2.0 × 2.48	4.96	17	西南西 N-105°-W	—	—	不明	不明
13	4.2 × 3.7	15.54	7~12	東南東 N-125°-E	2	—	有	東壁北寄り
14	4.2 × 4.2	17.64	6	北北東 N-11°-E	—	1	“	西壁中央
15	3.6 × —	—	20	東南東 N-121°-E	—	—	“	東壁中央
16	5.9 × 5.3	31.27	10	東南東 N-112°-E	2	4	“	東壁中央より北寄り
17	3.2 × 3.7	11.84	12	北北東 N-24°-E	—	2	無	
18	—	—	3	不明	—	—	“	
19	3.1 × —	—	7	北北西 N-5°-W	—	—	“	
20	—	—	6	北北東 N-40°-E	—	—	“	
21	3.1 × 3.4	10.54	9	北北東 N-40°-E	—	—	有	東壁中央
22	3.1 × 2.6	8.06	4~5	北北西 N-6°-E	—	—	無	
23	5.7 × 5.6	31.9	9	不明	—	3	“	
				北北東 N-18°-E	5	3	“	
24	— × 2.8	—	10	北北東 N-21°-W	—	—	“	
25	— × 1.6	—	8	西北西 N-76°-E	—	—	“	
26	西壁 2.5 × 北壁 2.8	—	8	北北西 N-22°-E	—	—	“	
27	南壁 2.75 × 西壁 0.75	—	9	北北東 N-45°-E	—	—	“	

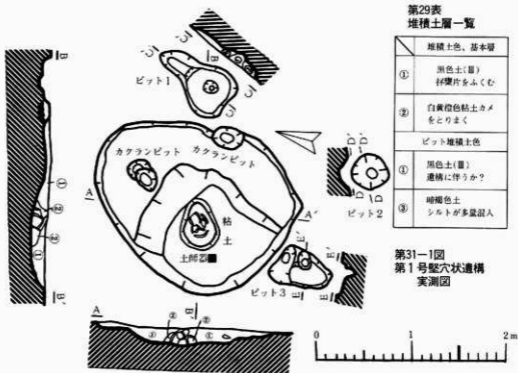
穴住居跡一覧表

マ			D		貯 蔵 穴		周 溝	
袖部	煙道タイプ・長さ	煙出部形状・深さ	規 模	位 置	規 模	位 置	規 模	位 置
無	Bタイプ 70 cm	楕円形 26 cm	65 × 35	カマド南側				
不明	Cタイプ 63 cm	楕円形 7 cm						
無	Dタイプ 60 cm	無						
〃	Aタイプ 120 cm	円形 20 cm						
不明	Cタイプ 100 cm	無						
有	Bタイプ 94 cm	〃						
不明	Bタイプ 95 cm	〃						
無	Cタイプ 70 cm	〃	125 × 90	南東隅	上巾 60cm 下巾 30cm	西～北壁		
有	Bタイプ 134 cm	楕円形 18 cm						
無	Aタイプ 115 cm	不 明						
〃	Bタイプ 95 cm	楕円形 7 cm	×					
〃	無	無			上巾 65cm 下巾 40cm	南壁西寄り		
有	Aタイプ 150 cm	不定形 30 cm	45 × 35	南西隅				
〃	Aタイプ 150 cm	不定楕円形 17 cm	100 × 94	北西隅				
〃	Aタイプ 120 cm	楕円形 18 cm						
不明	無	無	105 × 45	南壁中央				
〃		無	不定形 70 × 100		上巾 70cm 下巾 30cm	北～南壁		
無								
不明			80 × 60	東壁中央	上巾 70cm 下巾 40cm	東壁中央 から北へ		
			95 × 115					
無	不 明	不 明						
			65 × 70	東壁中央から 北側	上巾 65cm 下巾 45cm	南～西壁		
			80 × 98	北東隅				

第29表
堆積土層一覽

堆積土色、基本層	
①	黒色土(Ⅱ) 砂礫片をふくむ
②	白黄橙色粘土カメ をこりまく
ピット堆積土色	
①	黒色土(Ⅱ) 遺構に伴うか?
③	暗褐色土 シルトが多量混入

第31-1図
第1号竪穴状遺構
実測図



2 竪穴状遺構・焼土遺構・ピットとその出土遺物

第1竪穴状遺構 第31-1図 写真51~53

この遺構の周辺は、表土が極端に薄く、耕作のために上部層が大巾に削平されている地区であることから推察すれば、この遺構自体も削平を受けているものと思われる。元来は、住居跡の一部であったと思われるが、表土の薄い部分は削り取られ、深く構築された部分だけが、残存し、検出されたものと推察される。

東西1.8m、南北2.2m程度で平面形は卵状の楕円形を示す。残存する壁の高さは、最も遺存状況の良い南西隅で約21cmで、壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。床面は、褐色粘土質シルト面で、堆積層より若干固く締まっているが、特につき固められた痕跡は見られない。又、北から南西方向に緩傾斜して、南西部で方形状に一段と深く落ち込んでいる。本遺構内から焼土は確認されず、水酸化鉄分の粒子が堆積土中に混じって確認された。

ピットは、遺構内から2個確認されているが、いずれも攪乱ピットである。又周辺からは、不定形状を示すピットが3個検出されている。いずれも深さが20cm前後のピットであり、東から南にかけて存在するが、この遺構に伴うものかはっきりしない。

なお、南西隅の方形状落ち込み部分からは、白黄橙色を呈する粘土遺構がある。これは、土師器の要を取り囲むような状態に形成されている。

登録 番号 No	遺構 名	辺 長 (m)				形 状	検出面か らの深さ (cm)	焼土 有無	堆 積 状 況	床面 (底面) 状 況	周辺の状況と 検 出 遺 物
		上 限		下 限							
		南北	東西	南北	東西						
6	第一号穴状遺構	2.20	1.80	2.00	1.50	柳 状 円	約 5~6	無	黒色土一層であり、粘性強、米粒大の粘土シルトのブロックが混入。土師器、須恵器片混入。	2段階構築であり、西側部分が深くなる。床面は、なめらかであり、若干凹状に窪み、なだらかである。	3個のビットを有し、埋土状態も同様に等しい。但し土師、須恵片をふくまず。性格は不明である。
		1.85	1.2	0.95	0.90	や 長方形	約 20~21				

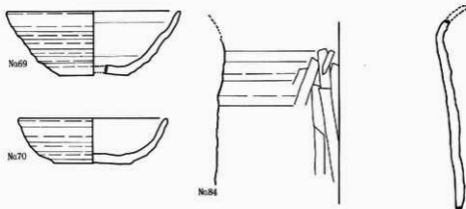
出土遺物

壁のコーナー付近からの出土が目立ち、実測可能土器はB類2点、土師器壺1点である。B類が主体であり、A・C類は埋土中より口縁部の小細片が各一片づつ出土しているだけである。全体としての遺物量も少ない方である。

坏類は、No.69、No.70（写真39）の2点で、何れも回転糸切無調整のB類坏である。No.69は、独特な体部の立上がりを示し、凹凸は激しい。底部外面は焼成の際による変化のためか窪む形になり、その分、器肉が薄くなっている。胎土中には石英細粒、粗砂等を多量に混入し粗悪である。

一方、No.70の坏は、器高が浅く小型である。底径は、口径に対して大き目で、体部には軽いふくらみを持つ。口径は若干反する器形である。内面には黒色変化物が付着した痕跡を持ち、他のB類に比して光沢の有るのが特徴といえる。

壺は、土師器のNo.84（写真No.58）がある。肩部から体部上半部分の実測図であるが、長胴型の壺と思われる。巻上げて形を整えてからロクロ成形したもので、更に篋削りを施している。内面には特に調整痕が観察されないが外面よりは平滑な仕上がりである。なお、この壺は、本遺構内の粘土に囲まれた状態で出土しているのが特徴である。（写真・図版No.53参照）



第31-2図 第1号壁穴状遺構出土遺物 S-K

焼土遺構

方形焼土遺構

方形を呈する焼土遺構は、遺跡内南端部分から2基検出されている。これらは、何れも溝状遺構と切合うものであるが、両者とも溝よりは古い時期に存在していたものである。遺構の床面から側壁は焼土で被われており、かなりの火熱を受けたものと思われる。

堆積層は、黒褐色土が主体であるが、混入物の違いから何れも3層に細分される。

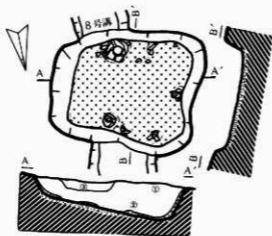
第1層はシルトが混入し、若干の遺物も散布する層である。第2層は、焼土・炭化粒を含み、第3層には粘土ブロックが混入している。

出土遺物については、B類だけの出土であり、焼土遺構の特性とともれる状況を呈している。

なお、性格・用途については、結論的には不明である。B類的な坏を生産した可能性を持つ遺跡としては、江刺市瀬谷子・秋田県野形遺跡等がある。これらは従来の登窯・平窯とは様相を異にするものであるが、本遺構は、更にタイプの異なる焼土遺構としてとらえられるものであろう。

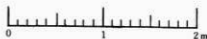
以下、2基の焼土遺構についての詳細を記す。

堆積土層 第31表



第32-1図 第1方形焼土遺構 実測図

	堆積土色	特徴
①	黒褐色土	シルト混入遺物(坏片)を焼分ふくむ
②	黒褐色土	焼土、遺物をふくむ(多量)
③	黒褐色土 8号溝断面	粘土ブロック混入、遺物なし



第一方形焼土遺構 32-1 図

本遺跡内南東部分に位置し、第23号竪穴住居跡床面を壊して構築されたものである。

規模は1.5×1.2mのやや長方形を呈するものであり、深さは約30cm前後、また床面部分にあ

っても、1.1×1mの広がりをもつ。なお、深さは、表面を削平された後のものであって、本来的なものではない。この焼土遺構は、垂直に近い掘り込みであり、床面は平坦に構築されている。また焼土は、壁面から床面まで貼りついたように、全体が赤く焼けていた。

堆積土は、大別一層であるが、混入物の混じり具合から、基本的には3層に分けられる。第1層は、黒褐色土にシルト質土が混じった層であり、ほぼ10cm程度の厚さである。第2層は、同一土色中に焼土粒・炭化粒等が混入している層で、約20cmほどの厚さをもつ。第3層は、直接的には、本遺構に関わるものではなく、それを切る溝状遺構の断面にみられる層である。

重複関係においては、第23号住居跡、第8号溝と切合い、住居跡より新しく、溝よりは古い時期のものである。

出土遺物

須恵器はみられず、土師器の甕とB類だけの出土である。B類はNo71、No72（写真No53）の2点あり、焼土中から出ている。

No71は、外傾する口縁で体部の凹凸は顕著である。B類の中では底径と口径との差が大きく、切離しは回転糸切によるものであり、再調整はみられない。胎土中には石英細粒、粗砂等を混入しているが、焼成と共にそう悪くはない。

No72は、反転復元によるものである。外面底部に黒斑を有し、回転糸切無調整。口縁直下に顕著なロクロ成形痕が廻り、外反する口縁を有す。体部の凹凸は目立ち、内面底部には渦巻状のロクロナデ痕が明瞭に残っている。前者の坏に比し、明らかに胎土・焼成等は不良である。

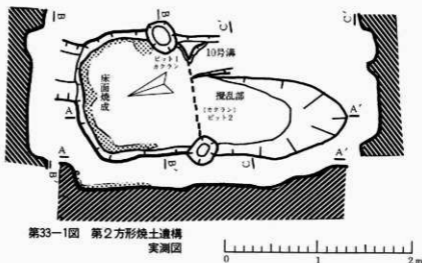
甕類は土師器だけの破片が多数でているが、調査段階で、第23号住居跡の遺物と混同した可能性が強いものである。これらの破片の中には、回転糸切痕を残す底破片があり、体部の場合にはロクロ成形後に甕削りを施したものが多ようである。



第32-2図 第1号方形焼土遺構出土遺物 S-片

第2号方形焼土遺構 33-1図

遺跡南端西側に位置し、壁の長さは、東西の上巾1.3m、下巾1.18m、南北下巾1.15mであり、上巾は攪乱のために壊され、明らかでない。壁の高さは、北壁で20cm位であり、垂直に掘



第33-1図 第2方形焼土遺構
実測図

第32表 堆積土層一覧

	堆積土色	基本層	特 徴
1	黒褐色土	①	焼土、シルト、炭化物類が混入
2	黒褐色土	①	粘土ブロックが混入、10号溝断面
3	黒褐色土	①	焼土、遺物を多量にふくむ、炭化物多量

り込まれている。平面形は、隅丸の正方形に近いプランを呈す。底部面は周壁と共に赤く焼けており、かなりの火熱を受けたものと思われる。尚、床面は粘土質土であり、平坦に構築されている。

堆積土は、黒褐色土一層であるが、混入物などの相違から3層に細分される。第1層は、シルトが混入している層であり、厚さは9～10cm程度であった。第2層は、焼土粒、炭化粒などが混入し、厚さ約11cm内外の堆積を示す。第3層は10号溝の断面土層である。

重複は、第10号溝と関係する。第3層断面図から示されるように、溝より古い時期のものと推定される。

出土遺物

本遺構に関わる遺物は破片のみであり、しかもビット内の埋土、あるいは重複する第10号溝との攪乱部分からの出土である。

埋土部分からは、回転糸切による切離しの底部片を含むB類の細片が多数出土しており、こ

の他にC類体部一片、土師器の甕片等がある。須恵器はみられず、量的にみてもB類を主体とした遺構である。

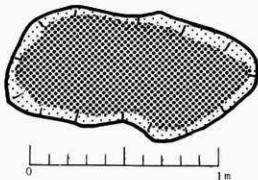
C類は、口縁部片であり、内外面ともに黒色処理がみられるが、外面部分での磨きは、特に観察されない。土師器甕の破片には若干の底部片もあるが、回転糸切によるものと刻削のため詳細不明のものがある。体部片については、ロクロ成形と判断されるものもあるが、大半は不明である。

当遺構より後世につくられた溝によって擾乱された部分からは、土師器の甕体部片、A・B・C類の口縁部片等が出土している。

土師器甕は、ロクロ成形のものと、体部に篋削りを施すものがあるが大半は磨滅、あるいは小細片のため技法が不明である。

A・B類は、胎土が粗で外傾する口縁部片、C類は、胎土中に雲母を混入した口縁部細片である。

第34-1図 焼土遺構実測図



第33表 堆積土層一覽表

	堆積土色	基本層	特 徴
①	赤褐色焼土		黒色土(Ⅱ)の下層炭化物混入
②	暗赤褐色焼土		弱粘性、炭化物混入、木炭混入
③	黒色土	Ⅲ	住居跡最下層

その他焼土遺構

第23号住居跡内焼土遺構 写真50、第34-1図

この遺構は浮遊焼土として、第23号住居跡の項で記したもので、黒色土基本層Ⅳの上部に堆積している。

尚、この種類の遺構は、他に第13号竪穴住居跡にもみられるが、ここでは、再述しない。全体で、5遺構が確認されている。何れも、住居跡がある程度まで埋没した時点で再利用されたものとしてとらえられる遺構である。各々の詳細については、各住居跡内で説明しているので省略する。

出土遺物 第23号竪穴住居跡・第26-2図参照

坏ではB類を中心としており、2点が実測可能である。No51(写真No47)、No52(写真No48)、C類は一点もみられず、A類は口縁部細片のみの出土である。

No51は体部内外面にロクロ成形時の凹凸を持ち、ややふくらむ器形である。口縁直下に稜線が巡るがそれを境にして口縁部が外反する。内面底部中央部に突出を有し、その回りには渦巻状のロクロナデ痕がみられる。砂粒を若干含むが、胎土・焼成とも比較的良好である。色調は赤褐色～橙色を呈す。また、体部中央部に硬貨大の黒斑が観察される。

No52も回転糸切無調整であり、成形時の凹凸が激しい。No51よりは器高が低く、底径は小さ目である。内面底部には突出がみられ、またNo51と同様に小範囲ながらも外面に黒斑が観察される。

甕は、土師器・須恵器の両様があるが、何れも破片のみの出土である。土師器は、ロクロ不使用で外面に削り、内面に刷毛目を施す体部片と、内外両面に明瞭なロクロ成形痕を持つ体部・底部片がある。底部は回転糸切による切離しのもと、磨滅のため不明のものがある。一方、須恵器は内外面に叩目痕を持つものと、詳細不明の小破片が出土している程度である。

その他、つまみ部分が欠落した須恵器の蓋の破片がある。これは回転糸切による切離しであり、胎土・焼成とも良好である。またやはり須恵器で口縁直下に鈎状の張り出しを持つ特殊な器形の破片があるが、全体の形状は知り得ない。おそらく、第1号住居跡出土のNo101(写真No73)に類似した器形を持つものと推察される。

第1焼土遺構 35-1図 写真61-62

本遺跡内、北東部に位置しており、調査以前の段階で、極度の削平を受けた遺構である。調査時にあっては、既に赤褐色焼土や坏、甕等の遺物片が剥き出しの状態であった。

住居跡内カマド遺構としての前程で精査されたが、基本層であるⅠ・Ⅱ層はもとより、Ⅲ層の黒色土の大半もまた削りとられていた。

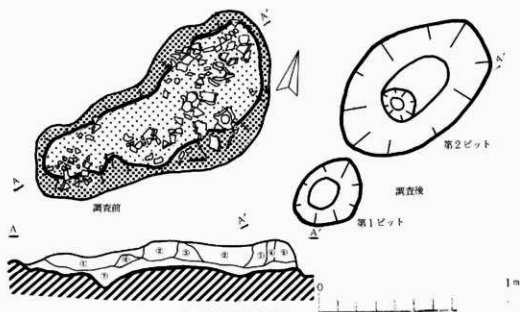
結論的には、住居跡と断定するだけの確証が得られず、焼土遺構として扱う。

第35-1図でもわかるように、最長部分192cm、最短部分48cmの不定形プランを呈す。地山面から12cm位上まで、盛土的な状態で検出されたものである。

堆積土層は、焼土中の混入物、堅さなどから7層に細分される(第34表)。それによると、赤褐色焼土③を中心としており、その周囲には①・②の黒色土が混入しており、少なくとも①②部分は、本来の火熱部分とは考えられない。

また、北東と南西端はにがい赤褐色焼土となっていることから、③を中心とした火熱が周囲にも浸透したものと考えられる。

遺物は、①②③④⑤⑥層から出土しているが、特に①②⑤層から多く出土しており、最下層の



第35-1図 第1焼土遺構実測図

第34表 堆積土層一覧

	堆積土色	基本層	特 徴
①	にぶい赤褐色		黄褐色シルトに黒色土が混入。焼土が多量に混入し赤くみえる
②	にぶい褐色土		黄褐色シルトに黒色土が混入。焼土量が上層より少ない
③	赤褐色焼土		火熱部分と思われ、固くしまっている
④	黒色土	II	焼土部分と思われ、木根などが多量に混入している
⑤	黄褐色シルト		焼土が幾分混入している。碎片が混入
⑥			黄褐色シルトと黒色土の混入。焼土混入
⑦	黄褐色シルト		地山面の土質と同様

⑦層からは一片も出土していない。

調査後の平面形は、第1ピット、第2ピットに区分され、前者は、長軸42cm×短軸32cmの楕円形を有す。深さは、5cm内外外であり、浅いピットである。下層部分にあっては全く遺物を含まない。後者は、90×56cm径の規模を持ち深さ、約7～8cmである。但し、この場合も、正確な検出面からの深さでなく、削平されて残っていた面からのものである。また、前者と同様に最下層からの出土遺物はみられない。何れにしろ、この遺構は、住居跡の一部、即ち南西方向のカマドではないかと思われるが、現状では断定できないようでもある。

出土遺物

焼土内からの出土であり、圧倒的にB類が多い。実測した坏は4点あるが、そのうち3点は反転復元によるものである。甕はロクロ成形と思われる破片が多く出土しているが、No.114(写

真No.64)のようなロクロ不使用のものもある。

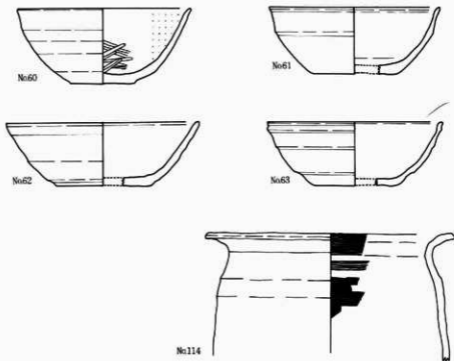
坏類は、C類No.60(写真40)、B類No.61、62、63の4点である。

No.60は回転糸切無調整で、器高が深く体部に丸味を持つ器形である。体部の凹凸は少なく、外面は灰褐色を呈する。胎土中には多量の雲母を混入している。内面のヘラ磨きの単位は、中央より底部にかけては観察できるが、上方部分にははっきりしない。また、磨きの方向は一定せず、斜位方向に交錯している。

この他に同種の体部2片が出土しているが、小細片のため詳細については省略する。

B類の3点は、何れもカマドの痕跡とみられる焼土内、又はそれに付着した形での出土である。全て反転復元によるもので、正確な計測値は望めない。また、これらの坏は、回転糸切無調整である。胎土はB類の中ではいい方であるが焼成が弱い。特にNo.62は、口縁形が異り、白橙色を呈している。また体部下端には黒斑も観察される。

同類の破片は多く共伴しており、5点ある底部片は全て回転糸切によるものである。A類は、回転糸切痕を残す底部と体部が各一片ずつ出土しているだけである。



第35-2図 第1 焼土遺構出土遺物 S-片

ビット

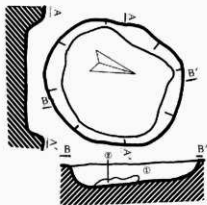
ビットは遺跡全域に点在し、形状も一定したものではない。全部で16個確認されているがその規模については第35表の如くである。

ビットには遺物や焼土を含むものとそうでないものがあるが、前者の場合は何れも竪穴住居跡内かその付近に存在している。これは住居跡と何らかの関連を持つとも推察されるが、住居跡内にある場合は、住居跡の埋土を掘り込む形でつくられたものであり両者間に時間差のあることが明かである。

何れにしろこのようなビットは、その役割として、①屋外貯蔵用ビット、②廃棄物用ビットまた焼土を含む部分にあっては③屋外炉的なビット等が考えられる。②・③に属すると推察されるビット群については、遺物の出土状況・焼土粒の混入状態等から自然的な堆積層というよりは、かなり人為的な要素が強いようにも観察される。

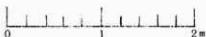
第35表 ビット一覧表

No	上 限 下 限		形 状	深 さ	土 色	出 土 遺 物	No	上 限 下 限		形 状	深 さ	土 色	出 土 遺 物
	東西× 南北	東西× 南北						東西× 南北	東西× 南北				
1	1.55×1.5	1.02×0.9	楕円形	46 ^{cm}	黒褐色土	なし 粘土ブロック混入	9	0.75×0.55	0.52×0.55	不定形	4 ^{cm}	黒色土	なし 焼土、シルト混入
2	0.45×0.40	0.23×0.26	円形	20	黒色土	土師器破片 焼土、炭化物混入	10	0.51×0.87	0.50×0.32	楕円形	7	黒色土	なし 焼土、シルト混入
3	0.45×0.40	0.30×0.30	円形	20	黒色土	土師器破片 焼土、炭化物混入	11	0.70×0.70	0.60×0.60	円形	15	黒褐色土	なし シルト混入
4	0.95×0.80	0.75×0.65	楕円形	20	黒色土	なし 焼土少量	12	0.60×0.55	0.50×?	不 方 形	11	黒色土	A、B土師器破片 シルト混入
5	1.30×1.40	1.0×1.10	楕円形	22	黒色土	なし シルト混入	13	0.85×0.85	0.80×0.75	円形	8	黒色土	埋土から土師器破片 シルト混入
6	1.05×1.20	0.25×0.30	楕円形	10	黒褐色土	土師器破片 焼土、シルト混入	14	1.40×1.30	0.90×0.80	楕円形	12	黒色土	なし シルト混入
7	0.85×0.70	0.55×0.50	楕円形	9	黒褐色土	なし シルト混入	15	1.45×1.75	1.2×1.2	不定形	18	黒褐色土	なし 粘土、シルト混入
8	1.40×1.30	0.60×1.05	不定形	13	黒色土	H銅片、A銅片、土師器 カマ片、C銅片、黄土、 シルト混入	16	?×2.00	?×1.65	方 形	21	黒色土	土師器破片、A B片、 炭化物混入、シルト混入



第36表 堆積土層一覧

	堆積土色	基本層	特 徴
①	黒色土	Ⅲ	黄褐色シルトが幾分混入
②	黒色土	Ⅲ	地山シルトが多量混入



第36-1図 第5号ピット遺構実測図

第5号ピット 第36-1図、写真59～60

本遺跡内、ほぼ中央部西側に位置するが、結論的には、性格不明の遺構である。

規模は、上幅で130×145cm、下幅で110×110cm径の円径に近い形状を呈す。深さは約22cm程度であり、かなりの急傾斜を持つ掘り込みである。

堆積土層については、基本土層Ⅲの黒色土であり、混入物の相違から細分すると2層になる(第36図、第36表参照)。この堆積土は住居跡最下層堆積土と同一の質土であることから、当遺跡においては、最も古い時期の遺構として考えられる。

出土遺物

写真図版59・60にあるような遺物が出土しているが、実物は存在しておらず詳細については記せない。

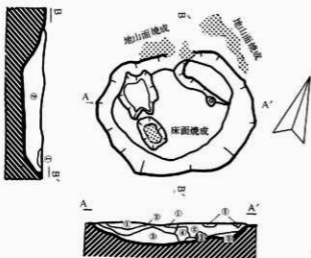
この他には、埋土中から須恵器の台付坏片と土師器甕の体部片が出土している。前者は回転糸切による切離しのもので、高台部分はその後につけたものと思われる。後者は外面に篋削り、内面に篋ナデ仕上げをみせる破片である。

第6号ピット 第37図参照

本遺跡内の中央部に位置している。規模等については、第35表を参照されたい。

堆積土層は、黒褐色土を中心とした5層に細分される。焼土は黒褐色土に混入した状態で確認されるが、自然堆積層とは思われない。ピット最下層(第37表参照)から土師器甕の底部が出土している。

また、このピットの北西部分に焼土痕が点在しているが、当遺構との関係は明らかではない。この焼土は、厚さ2～3cmで硬く締まっており、本来的には、他の遺構に関わって何らかの形で存在していた遺構なのであろう。



第37表「堆積土層一覧」

堆積土色	層番号	特徴
① 黒褐色土	1	焼土多量混入
② 黒褐色土	1	焼土少量混入
③ 黒褐色土	1	炭化物、遺物シルト混入
④ 黒褐色土	1	粘土シルト混入
⑤ 黄褐色シルト	4	地山面と同様

第37-1図 第6号ピット(焼土)実測図

出土遺物

全て破片の出土である。焼土上からはA類の口縁部片と、土師器の甕片が多数出土している。A類片は、体部外面のロクロ成形痕が深く残っている。甕片は何れも磨滅のため技法が不明である。

埋土中からは、回転糸切痕を残すA類底部片と凹凸の目立つ体部片、B類体部片があり、他に土師器・須恵器の甕体部・底部片が出土している。土師器の底部片には回転糸切を残すものもある。ロクロ不使用の場合は、外面にケズリ、内面に刷毛目を施す。須恵器は、内外面に叩目痕をみせる体部片がある。

第8号ピット 第38図参照

調査前段階において、地山焼成痕だけが、攪乱をうけた状態で確認できた遺構である。焼土上部から最下層部にかけて遺物の混入がみられた。焼土の規模はIで長軸110×短軸65cmの不定形の平面プランを持つ。また、IIは長軸160、短軸75cmほどで、第I焼土より大きな不定形の平面プランを呈し、何れも南東から北西に長い焼土遺構である。調査後の規模は調査以前より若干大きくなっているが、形状は変わらない。検出面からの深さは、I・IIのいずれも13cm内外で地山面を掘り込んで構築している。遺物はIの底部面から若干出土しているだけである。

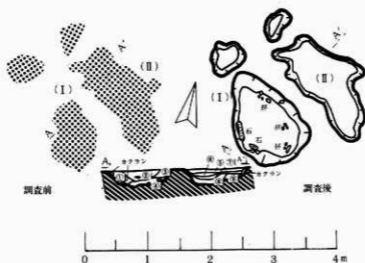
なお、性格や用途については決定づける根拠に欠けるため明かでないが、81Pの③的なものであろうとも考える。

出土遺物

8号ピット遺構からの遺物は全体として量が少ないが、杯類で4点が実測可能である。何れ

第38表 堆積土層一覧

堆積層No	堆積土色	特徴
①	明赤褐色焼土	固くザラザラしている。
②	灰褐色土	黒色土と焼土の混入
③	黄褐色土	焼けていて固い
④	黒色土	Ⅲ 焼土混入
⑤	にぶい赤褐色焼土	草根など混入
⑥	褐色土	焼けている
⑦	明赤褐色焼土	砂質シルト
⑧	明赤褐色焼土	焼けており固い
⑨	明赤褐色焼土	シルト混入



第38-1図 第8号ピット(焼土)遺構実測図

もピット内の壁や底面に密着した形で出土している。

C類はNo66が一点、反転復元による実測図である。回転系切無調整、体部にふくらみを持ってたちあがる。体部の中央より上位の部分での凹凸が目立ち、口縁部分は直口気味になる。石英細粒を若干混入しているが緻密な胎土であり、焼成も良好である。

B類は、No65(写真No44)、No67(写真No45)、No68(写真No46)の3点の出土。何れも回転系切無調整で、外反する口縁をもつ。No65・No68はゆるい傾斜のたちあがりで大きさも変わらない。但しNo68は体部に「月」の字が墨書されている。No67は器高が深く、体部にふくらみを持って口縁で外反する器形であるが、B類の中では特殊である。前2点より胎土、焼成とも良い。

この他に土師器の破片が出土しているが、回転系切による切離しの底部片をも含む。また埋土中からは、木葉底部、外面にヘラ削り、内面刷毛目仕上げ等の破片が見られる。

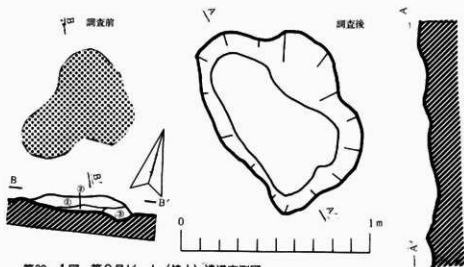
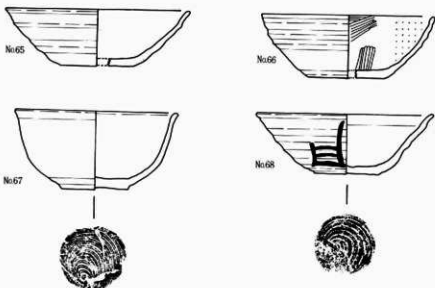
なお、8号ピット遺構の一連の遺構として10号ピット遺構がある。この場合は、B類の底部口縁、体部等の破片を若干出土している底部の切離しは回転系切痕を持つものである。

第9号ピット 第39-1図 写真64

64×30cm径の南北に長い不定形ピットである。焼土を含むが、結論的には性格や使用用途は明言できない。

堆積土は、3層に分かれており、焼土下に黒色土が帯状に推積し、その部分にも焼土粒が混入している。深さは、検出面から約4～5cmと浅く、床面部分は特に焼けていない。検出面における範囲は、もっと小規模であったが、精査段階で拡大されたものである。(第36表参照)

第38-2図 第8号ピット出土遺物 S-K



第39-1図 第9号ピット(焼土) 遺構実測図

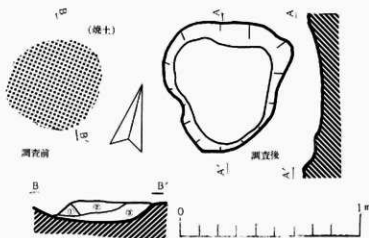
第39表 堆積土層一覽

	堆積土色	基本層	特徴
①	明赤褐色焼土		固くしまっており、粘性なし、シルト黒色土混入
②	黒褐色土	I	固くしまっており、粘性有り、シルトがブロック状に混入
③	黒色土	II	幾分やわらかく粘性有り、シルト極少混入、焼土ふくむ

第10号ピット 第40図 写真63

第9号ピットから北東に1.5 m付近に位置しており、構築状態、堆積土状況は9号ピットに類似する点が多い遺構である。調査前の形状は直径約47cm程でやや円形に近いプランであったが調査後の形状は若干大きめで、やや南北に長い楕円形を呈した。

なおこのピットは第20号竪穴住居跡に伴うピットとも考えられるが、住居跡自体が極度な削平を受けて全体の1/2程度の調査に止まった為に全容は明らかでなく決定づける根拠に欠ける。なお遺物は出土していない。(第35表参照)



第40-1図 第10号ピット(焼土)遺構実測図

第40表 堆積土層一覧

	堆積土色
①	黒色土 焼土、シルト混入、粘性あり
②	暗赤褐色焼土 粘性あり水分さらさらした感じがのこる。
③	褐色土 灰色土と焼土の混在、粘性なし

第12号ピット 第41図

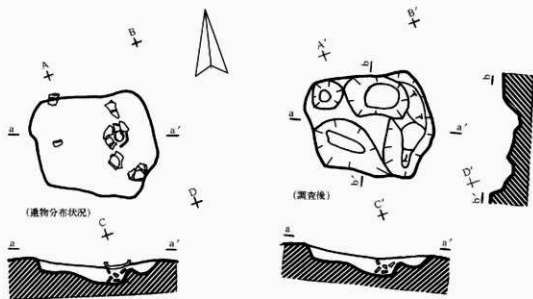
規模については省略するが、東西に長い不定形のプランを示す。

堆積土は、黒色土一層で占められ、シルト及び焼土粒が混入している。しかし、床面部分にあっては、特に焼成痕はみられない。床面そのものは、若干粘性を持つ土質であり、つきかためられた様子もない。遺物は、埋土中から出土している。

なお、北東1.5 m地点には第17号竪穴住居跡が存在しており、遺物のあり方も類似しており、あまり時期差をもたないピットとも考えられるが、断定はできない。

出土遺物 遺構写真58 遺物写真No.52参照

ピット内埋土中からの出土であるが遺物量は少ない。No.84(写真No.52)は、B類の坏であり、体部に墨書が記されている。また、底部が剥落しており、切離しは不明である。器高は比較的深く、体部の凹凸は激しい。



第41-1図 第12号ピット遺構実測図

第41表 堆積土層一覽

堆積層	層	土色	基本層	特徴
土層	①	黒色土	Ⅱ	シルト・遺物・焼土含む

これ他に、B類の底部2片、A類底部1片、C類体部片が出土している。底部片は何れの場合も回転糸切痕を残している。

甕は土師器だけであり、ロクロ使用とそうでない破片が出土している。ロクロ不使用の破片は、外面を篋削り、内面を篋ナデ仕上げとしている。



第41-2図 第12号ピット出土遺物 S-14

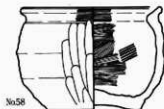
第13号ビット

当ビットは遺構配置図にも記入されているが、単独のプランが不備なため特に記載しない。大略については第35表のビット一覧表を参照されたい。

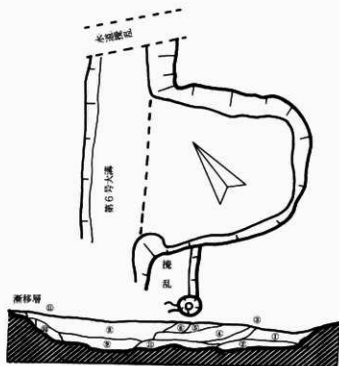
ここでは出土遺物のみについて記す。

出土遺物

出土遺物は、土師器のNo58（写真No60）の壺一点だけである。口径118 cm、底径7.5 cm、器高7.8 cmと小型である。口縁部分は内外面とも横ナデ仕上げ、体部外面は縦位の削り、内面は刷毛目による。焼成はそう悪くはないが、多量の粗砂、石英細粒を混入する粗悪な胎土である。



第42図 第13号ビット出土遺物 S-4



第43-1図 第16号ビット実測図

第42表 堆積土層一覧表

	上 色	層 号	特 徴
①	黒色土	Ⅱ	シルト、遺物混入
②	黒色土	Ⅲ	粘土、粗砂混入
③	黒褐色土		粘土質土 シルト混入
④	黒色土	Ⅱ	シルト質土 粘土混入
⑤	黒色土	Ⅱ	シルト質土 粘土が極少量混入
⑥	黒色土	Ⅱ	④、⑤の混入層
⑦	灰黄褐色土		粘土質土 酸化鉄混入
⑧	黒褐色土	Ⅰ	シルト、粘土混入
⑨	黒色土	Ⅱ	シルト 酸化鉄混入
⑩	黒色土	Ⅱ	地山粘土混入
⑪	黄褐色粘土質土	Ⅲ	地山がくずれたもの

第16号ピット 43-1図

南北に走る溝（第6号大溝）と切合い、遺構西側が破壊され、たちあがりが見つかっていない。両者の前後関係は、断面実測図から判断して、大溝が明らかに新しい時代の遺構として、断定できるものである。

平面形は、方形を示すものと思われるが、明らかでない。検出面からの深さは31cm程で底面に向って外傾して掘り込まれている。推積土は黒色土が中心となり、若干混入物の相違をみることができる。遺物はピット推積土中から底部面まで多数の出土をみる。

出土遺物

埋土中より土師器の甕細片とA類No55が出土している。



第43-2図 第16号ピット出土遺物 S-Ⅱ

No55は、底部が半分近く欠損した坏である。A類の中では、口縁の外反度が強く、器形的にはB類的である。焼成はいいが、粗砂、石英細粒を多量に含む粗悪な胎土である。

表採出土遺物

表採遺物については、各類の坏片、土師器、須恵器甕片があるが、多くは第I層の黒色土層中からのものである。その中で実測可能なものは、Aefo3地点からNo56（C類）、No57（B類）、Bef62地点No86（B類）、Da65地点No73（B類）の4点である。何れも回転糸切による切離しであり、再調整はみられない。



第44図 表採出土遺物実測図 S-Ⅱ

3 溝状遺構と出土遺物

本遺跡では、11本の溝が検出されている。これらの溝は、本遺跡南端、あるいは北端部分に集中し、中央部分からは確認できない。

溝状遺構は、東西に走るもの（A式）、南北に走るもの（B式）の2種類と、両者の特徴を備える（C式）の三形態に大別できるようである。

A式5本（1～5号溝）、B式3本（6～8号溝）、C式3本（9～11号）であり、何れも他の遺溝と何らかの重複関係を示す。

A式は、一つはその方向性から区分される一群であるが、本遺跡の北端に構築される傾向をも有する。またその断面形は逆台形を示し、底部面は、粘土質シルトで平坦に構築され、東に向かって緩やかに傾斜していく。当然、段丘縁へ連なる溝でもある。推積土は、全てⅡ層（黒褐色）で占められ、草木根、地山と同質のシルト粒が混入している。なお、A式からの出土遺物は第4号溝を除いてみられない。但し、第4号溝の遺物そのものも、本来的には重複関係にある第15号住居跡に関連する遺物であると推察される。また、B式は、本遺跡の南、北端部にあり、南北に走る溝である。各々の溝巾は上巾で0.2～2m、下巾で10～15cmと一定せず、検出面からの深さは15～50cmほどである。壁は20°～60°の角度で外傾する。断面形は、6号溝がやや巾広のV字形、7号溝が、やや垂直に近い形で立ち上がる。また、8号溝はA式と同様、逆台形を呈している。底部面は、6号溝を除き、黄褐色粘土質シルト層まで掘り込まれ、水はけそのものは良さそうである。一方、6号溝は、黄褐色粘土層までであり、推積土は、ほぼ3層からなる。上部より黒褐色土、黒色土、黒色土にシルトが多量に混入している土質の順である。7・8号溝は、地山シルトを含む黒色土で覆われている。

なお、これらの遺構は南から北へ向かって緩やかに傾斜していくようである。

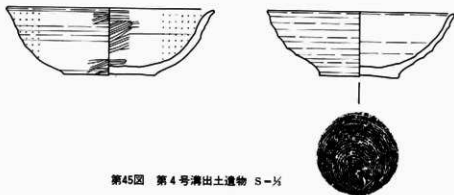
出土物については、6・8号溝から、土師、須恵器の甕片が覆土中から出土している。また6号溝からは、特にB類細片、蓋と思われる鉄製品等がⅣ層上部から2点出土しているようである。

C式は、遺跡南から2本（10・11号）、北側から1本（9号溝）が検出されている。この溝は、屈曲しながら走るものであり、上巾50cm、下巾20cmほどである。壁は基底部より30～50°の角度で立ち上がる。深さは、その地域の削平の度合により一定したものではないが、全体として浅い溝であり、7～15cm内外のものである。断面形は、A式と同様の形態を有しているが、深さはA式ほどの巾を持つものではない。底部面は粘土質シルトであり、推積土とそう変わらない締まり具合であり、人為的な埋没ではない。推積土層は、黒色土（Ⅱ）であり、シルト、粘土鉾滓等が混入している。出土物は9号からA類杯の底部片が出土しており、その他に土師器甕片が出土している。また10号溝からは、土師器、須恵器の甕片が出土している。なお第11号

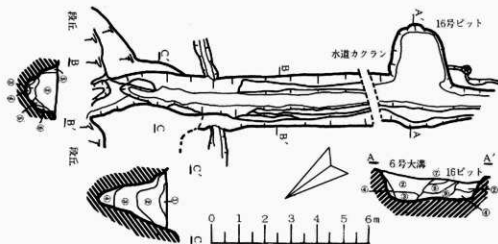
溝からは、何も出土していない。一方、10号、11号溝は、形状からみて同一の溝と考えられるが、一部かなりの割合で削平があり、明らかでない部分もあることは否定できない。

A式、B式、C式各々の前後関係については、溝の推積土によりある程度の判別は可能である。例えば、A式は、Ⅲ層を掘込み面として構築されているようであり、また、各形式の推積土からみるに、Ⅲ層上部に推積しているⅡ層と同質の土色、あるいは混入物などから考え、B・C式よりは新しいと推察される。しかもそれは、本遺跡の新しいと思われる部分の遺溝を壊していることから、最も新しい時期に比定される。一方、B・C式は、地山面の黄褐色粘土質シルトにまで掘り込まれており、推積層は黒色土（Ⅲ層）で覆われている。これらは、住居跡の推積層と合致する部分を持つことからA式よりは古いと思われる。このように、溝と住居跡との関わりは、近い部分もあるが、多少の時間差があることも事実であろう。この中で、C式にみられる9号溝は、第13号住居跡の埋土との比較から同時期か、あるいはそれよりは若干新しいと推定されるものでもある。但し、第13号住居跡は生活面が2つある可能性を有する遺構でもある為、それらのどちらかに近い部分であるかという事については、断定できない。

各型式の覆土については、Ⅱ、Ⅲ層の自然推積層が流れ込んだ状態であり、地山の粘土質シルトが壁際に混入している。また、溝の底部面は、一般的には使用の際に泥炭層的な層を形成するであろうが、ここではみられない。出土遺物としては、A式を除き、若干の存在が確認されるだけであるが、以上のようなことからだけでは、溝の性格、及び年代決定を裏づけることは出来ない。現段階でいえることは、少なくとも現代における用水路的な種々のものではなく、同時に、全体としても、本遺跡内の各住居跡とは直接的に関わりないと思われるという程度である。



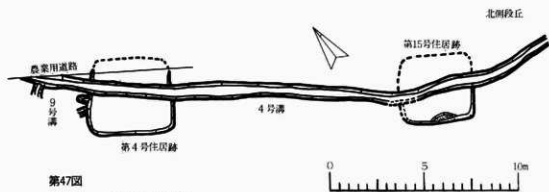
第45図 第4号溝出土遺物 S-Ⅱ



第46-1図 第6号大溝遺構実測図

第43表 堆積土層一覧

堆積土色	基本層	特徴	堆積土色	基本層	特徴
① 橙瓦層		農道施工時の角礫層	⑥ 黄褐色土		壁がくずれたもの
② 黒褐色土	I	シルト、粘土、遺物混入	⑦ 黒色土		シルト、粘土が粒状混入
③ 黒色土	II	シルト、酸化鉄、遺物混入	⑧ 黒色土		シルトが塊状に混入
④ 黒色土	III	粘土、粗砂、遺物混入	⑨ 沉黄褐色 粘土	V	基本土層下部(V)層と思 われる
⑤ 黒褐色土		粘土が1mm程度で混入			



第47図

第4号溝実測図

第44表 溝・一覽表

型式	遺構名	横出 全長	巾(cm)		深 さ (cm)	断面形	壁の構築 形態	壁の傾き 傾き	床面の 土質	堆積 土色	混入物	出土遺物	重複遺構とその新旧関係
			上	下									
A	第1号構	7.5 m	60	30	8~9	逆台形	外傾	64°	粘土 シルト	Ⅱ 黒 色土	草木根 地山 シルト	なし	重複遺構とその新旧関係 3号溝新?
	2 "	8.5 m	20	15	6	"	"	27°	"	"	"	"	3号溝(新?)
	3 "	40 m	60	40	15	"	"	32°	"	"	"	"	4号溝(?) 6号溝旧
	4 "	25.5 m	82	54	20	"	"	44°	"	"	粘土 地山 シルト	A林→15号 のもの	1・2号溝(旧?) 4号住居 15号住居 9号溝旧
B	5 "	16.5 m	50	22	6~7	"	"	64°	"	"	"	なし	8号住居
	6 "	14.7 m	200	50	40~50	V形	"	56°	粘土層	Ⅲ 黒 色土	"	須恵、土師 鉄製品	3号溝新 Ab12 Pit旧
	7 "	7.5 m	20	10	13~15	U字形	やや垂直	18°	粘土質 シルト	"	"	なし	3号溝(?)
C	8 "	43 m	70	40	15~20	逆台形	外傾	36°	"	"	"	土師器 須恵器	Da59 FPIT旧 23号住居 11号溝
	9 "	20 m	40	20	15~20	"	"	27°	"	"	"	A製杯	13号住居 3号溝新
	10 "	38 m	50	25	7~10	"	"	55°	"	"	"	土師器 須恵器	Db09 F-Pit旧
式	11 "	19 m	50	35	10~12	"	"	33°	"	"	"	なし	8号備 鉢 洋

4 鈎滓分布について

本道跡範囲内の中央東側部分に分布しており、その範囲は約190㎡に及んでいる。出土する層位は、黒色土(Ⅲ層)と地山シルト質土(Ⅳ層)の中間層的部分からのものが普通であるが、例外的には大型の鈎滓が地山面にくい込んで出土する場合もある。分布状況も一ヶ所に集中するものではなく、また、当範囲全域に広がるものでもない、各々0.6~2m径内の広がりブロックに存在していたもので、それらの集合体を範囲としてとらえたものである。鈎滓の大きさは、1cm径のものから最大40cm径のものまであり、当然、形も様々ではない。また、これらは各々のブロックにおいてある程度の作為的な配慮が感じられるものでもあり、範囲内に土製のふいご羽口と思われる遺物の破片の出土という事実と相俟って、本来的にはⅢ層付近に製鉄に関する何らかの施設が存在が考えられる。また、鈎滓そのもののあり方は、廃棄場的な性格としてとらえることも可能である。

しかし、この地区そのものは、削平等による破壊の激しい地点であり、鈎滓に直接関与すると断定される遺構は存在しない。可能性としては、段丘崖寄りの未調査部分にあるか、あるいは、本道跡内に多くみられる焼土遺構と何らかの関わりを持つもの等が考えられるが、現状では、Ⅲ層付近の黒色土中に存在していた遺構が調査以前の段階で、工事等に関わる削平の結果破壊されたものとする。なお、この範囲内で南北に走る構は、鈎滓遺構より後世のものである。



第48図 鈎滓分布

IV 分類と考察

1 遺構について —住居跡・カマド・煙道形態の分類とまとめ—

今回の調査では、27棟の竪穴住居跡が確認されたが、以下、形態、施設等について分類とまとめを記す。

(1) 住居跡の形態と施設について

平面形 大別して長方形、正方形に近いものに分けられるが、コーナーの様子から更に、5種類に細分される。それによると、 A_1 ：住居跡の辺が外側に弓状に張出し、四隅が丸味をもつもの、 A_2 ：四隅が丸味を持つもの、 A_3 ：四隅が若干の丸味をもつもの、 B_1 ：四隅が張出し、角ばっているもの、 B_2 ：四隅が直角に近いもの、等である。

この中で、 B タイプについては、本遺跡にあってそのほとんどが削平によって四隅がはつきりせず、部分的な分類をも含み、資料としては、あまりいいとはいえないものである。本遺跡にあっては、 A_2 、 A_3 タイプのものが多く、以下 B_2 タイプと続き、 $A_1 \cdot B_1$ タイプのものはあまり見られない。

規模

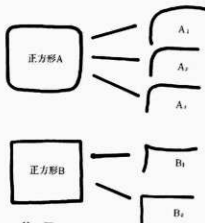
第12号住居跡のように、 2.0×2.48 mの小さな住居跡から 5.7×5.6 mの規模を持つ第23号住居跡のようなものまで、種々の大きさの住居跡がある。規模の点で、典型的なまとまりを示すものはない。小規模なものまで、ほぼ均等な分布を示すが、 3 m～ 4 m内外の住居跡がやや多く分布するようである。

床面

ほとんどの住居跡床面は平坦に構築しており、住居跡自体の掘り方は確認されない。二時期間にわたる住居跡が存在するが、新期住居跡を構築する際に、シルト及び粘土で部分的に固めて補強し、貼床にしている住居跡（第14号住居跡）もある。床面土質は全住居跡が地山面同様の黄褐色粘土質シルト層である。

柱穴

柱穴は住居の上屋構造を支える柱をたてる穴である。したがって本来ならば、柱穴は掘り方（柱をたてる為の穴）と柱痕跡から構成される。両者は柱のまわりに詰め込まれた土と柱が腐った後で入り込んだ土によって区別される。柱穴の掘り方は大部分が円形であるが、中には



第49図

長方形のものもある。柱痕跡の大きさから柱の太さも推定することができる。柱穴は、正方形に4個配置されている住居跡が多いが、本遺跡では、これら柱穴をもたない住居跡が多く、上部構造の構築が明らかでない。柱穴をもたない住居上屋構造について今後の検討を要すと思われる。

周溝

下羽場遺跡の周溝は、幅が広く、断面形はU字形を示すものが多い。27棟中確認された遺構は5例(6号・9号・14号・16号・23号)であり、いづれも壁内部に構築されており、カマド付近でとぎれる。

貯蔵穴

結論的にいって貯蔵用のための施設であると断定できるものではないが、比較的規模が大きく、形が整っていること、あるいはその位置等から判断して、他のピットと区別され得るものを貯蔵穴と仮称した。

炉およびカマド

カマドについては特に記さないが、床面上で直接火を焚いたと思われるものを炉とした。以下、両者についての詳細を記す。その後分類とまとめについてふれる。

(2) 炉およびカマド

炉について

前述の如く、床面上で火を使用したと思われる痕跡のあるものを炉としている。本遺跡にあってこれらは特別な施設を伴わないが、ある時期にあって常に火が焚かれていたと思われる場を示す。

これらは、他の空間と区画されるための特別な施設(粘土や石積等)を持たないこと、床面が一定範囲焼けて赤褐色、又は暗赤褐色に変化し堅くなっていること、熱による影響(色調変化、硬化)は、周辺部に向うにしたがって弱まっていることなどで区分されるものであり、また、カマドの焚口とは異なるものである。

カマドについて

カマドの基本的な構造については、焚口部、煙道部、煙出し部から構成され、焚口部、煙道部分には側壁の上に天上部がつく、また、焚口部の天上部には甕を受ける穴を有するのが本来的なものであろう。ただし、本遺跡にあって検出されたカマドは、焚口天上部の残存するもの一例もない。

構築方法は ①すべて地山・床面と異質粘土の積み上げによってつくられている。

②住居跡外の地山を掘り抜いてつくられている。

③①、②の両者を併用してつくられている。

の三種類が考えられるが、本遺跡にあっては、②の掘り抜き式のタイプが多いようであり、①

は若干、③のように粘土構築と掘り抜き式の両用を有すると思われる例はみられないようである。

なお、これらは全て住居跡の壁際につくられているが、本遺跡にあっては上部の削平が激しい部分もあることから、全てのカマド遺構が上記のタイプの何れかに確実に区分できるというものでもなく、不明な例も多い。

③煙道部分について

煙道部分の分類については、前述のカマドのタイプを加味しながら構築形態を区分すると、下記の如く4種類の形態が考えられる。

第一形態

焚口部から煙道部にかけて壁を利用し、急傾斜で立ち上がり、しかもその境界が明瞭である。また境界より先の部分にあたる煙道底面部分が、煙出部に向かってほぼ水平の状態でのびるもの。(第3・8・10・11・12号竪穴住居跡等)

第二形態

焚口部と煙道にかけての構築状態は第一形態と同様であるが、煙道部分の底面部分に若干の傾斜をもつもの。(第1・5・7・9号竪穴住居跡)

第三形態

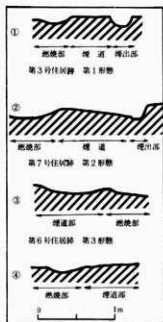
焚口部と煙道部分との境界がはっきりしないもの、あるいはあっても第1～2形態ほど明瞭ではなく、しかも煙道部の中ごろに若干の窪みを持つてのびるもの。(第2・4・6号竪穴住居跡)

第四形態

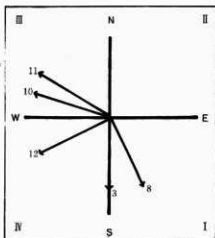
焚口と煙道部の間に明瞭な境界をもたず、しかも煙道部が煙出部に向って若干ながらも昇り傾斜をみせるもの。(第3号旧竪穴住居跡)

煙道各形態の特徴

第1形態 5棟：本遺跡で最も一般的な形態を示す一つである。全14棟のうち5棟を占める。これらカマド、煙道方向は西壁中央部に構築しているもの3棟、南東隅に構築されているもの2棟で、磁北からの振れは、前者北西方向を示すもの2棟、南西



第50図 煙道形態

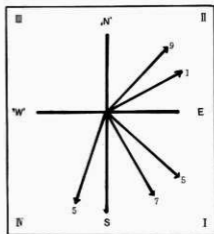


第51図 第1形態方位図

方向を示す遺構1棟であり、後者においては、南方向、南東方向の各1棟ずつに区分される。

このグループの特徴は、コーナー部にカマドを構築している遺構には袖部を有さず、両壁に多量の焼土が付着しており、火熱が壁部までおよんでいたものと推定される。これら全体的な特徴は、(1)西方方向と南方方向を示す集合体で占められる。(2)すべて円形状の煙出し部を伴う。(3)煙道部が長目の構築で一括される。(4)焼き口部（燃焼部）と煙道部の境が明らかに区別できる遺構の集まりである。(5)Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区の4区にまたがる。(6)コーナー部に位置する遺構には袖部を伴わない等である。

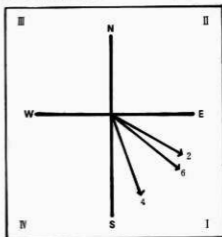
第2形態 5棟： 第1グループ同様、本遺跡における一般的な形態の1つである。これら5棟のカマドの位置は、東壁南隅付近に構築されているもの4棟、南壁中央部に構築されているもの1棟であり、それぞれの磁北からの振れは、前者の場合北東方向に方位を示す遺構が2棟、南東方向に方位を示す遺構が2棟となり2分される。後者は、南西方向に方位を示す遺構である。全体の特徴は(1)煙道部が第1グループよりやや短か目である。(2)焼き口部（燃焼部）から煙道部にかけての境界が第1グループに



第52図 第2形態方位図

比較して目立たない。(3)煙出し部は煙道部を延長して先端部を幾分窪めた程度の構築であり、第1グループのようなビット状は示さない。(4)袖部においては、粘土の積み上げ痕があるが明らかでない。(5)Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ区の3方向にまたがり、南から東方向を示すグループである。

第3形態 3棟： カマドの位置は、すべて東壁中央部に位置し、磁北からの振れは、南東方向を示す。これら3棟の特徴は、(1)焼き口部（燃焼部）から煙道部にかけての境が、ほとんど目立たなく、段差が2cm程度で直結する。(2)煙出し部は、ほとんど煙道部の延長であり、先端で幾分窪みをもつが、区別があまりはっきりしない。(3)←袖部は第2グループと同様、粘土の積み上げ痕がみられるが上部構造が削平されている為に明らかでない。(4)煙道部は、第1、第2グループより短か目に構築されている。(5)床面の起伏が激しい。(6)Ⅰ区に集中するグループである。



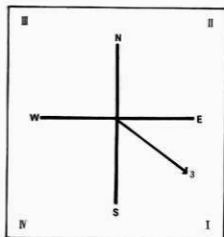
第53図 第3形態

第4形態 1棟： 本遺跡において特徴的な形態であり14棟のうち1棟だけである（第3号住）。カマド位置は東壁中央部に構築され、磁北からの振れは南東方向（N-126°-E）を示す。

この遺構の特徴は、第3グループ的な要素が強い。

(1)、焚き口部（燃焼部）から煙道にかけての区別が明らかでない。直接的に煙道に続く。(2)、煙り出し部を伴うことなく、煙道部自体を利用し直に地山面に立上る。(3)、煙道部の長さは1・2・3グループより短か目である。(4)、I区に位置する。

以上が煙道各形態の分類である。



第54図 第4形態

(3)まとめ

各々の形態には特徴的な要素が多く見うけられる。これら要素と出土遺物を含めた遺構自体の前後関係について若干ふれて、本遺跡の把握に努めたい。

第1形態に伴う遺物は、A、B、C類坯全てを含むが、C類坯が少なく実質A、B類で占められ、へら切り底と糸切り底のA類坯を伴出する(10号住)。第2形態は、第1と同様、A類坯でへら切り底(1号住)の遺物を伴出する。またC類坯においては、第1より少なく、ほとんど伴わないグループと思われる。これらの事から考えれば、第1・第2形態との先後差は時間的にあまり差のないグループと推察される。又このことは、前述した部所の比較からも明らかであろう。第3・第4形態においては、前2者とは異なり、A、B、C類坯が全てに共伴するグループであるが、A類坯の出土量が少なく、C類坯がB類坯と同量程度に伴出するものである。C類坯は調整の持つものと無調整の坯とが共伴して出土する集団である。また比ら形態は、煙道構築形態を除き、各部所が似通っており、同時期か、又時間差はあっても、それほど大幅な差はないグループと推定される。

以上を遺物編年に照合し検討すればI群(9C後半→C類坯を主流として、調整を有すもの)に匹敵する形態は、第3第4であり、II群(10C代→C類(無調整)坯が共伴するが、漸次減少して非常に少なく出土する段階)に匹敵する形態は、第1・第2に合致すると思われる。

しかし、I群に区分される第3、4は、共伴遺物の点で微妙に異なる。第3形態出土のC類坯は、回転糸切で、下端から底部にかけて調整を施すものと無調整の坯とが共伴する。又、第4形態出土のC類は、量的にはそう多いとはいえないが、無調整の坯で占められることから、遺物におけるI-a・b群にそれぞれ該当すると思われる、とすれば、当然第3形態は第4形態に先行するととらえることも可能である。また、第1形態と第2形態については、A・B類共

に量的には大きな差がないが、C類の有無からみて、第1形態が第2形態に先行するととれる。

したがって、(第3形態→第4形態)・(第1形態→第2形態)という大雑把な流れが推察されるが現段階では、これらを全て、一連の流れとするだけの確証に乏しいことは否定できない。

全体的にみて、本遺跡にあっては、江釣子村猫谷地遺跡や都南村百目木遺跡のように、煙道の方向によってある程度の時間差をみせるというような分布状態ではないようである。

なお、形態的な面について言及するならば、第3形態、第4形態に属する遺構の煙道は、南東向きの方向にあり、焚口部分から煙出し部分までは途中で窪みを持ちながら登り傾斜に構築されている。第1形態・第2形態にあっては、煙道部分が長く、焚口から水平あるいは緩い傾斜状態に構築されている。また煙道の方向は、西、南東と一様ではない。

このような相違は、本来的には時間差を持って存在するものとも推察されるが、先後関係については前述のように確定できないのが実状である。ただ、可能性としては、内黒土師器を明確に伴う第3・4形態が、そうではない第1・2形態に先行するととらえられないこともない。若しそうであるとすれば、登り傾斜、窪みを持つ形から、水平あるいは緩い下り傾斜を示す形態に変化していったことになる。

第45表 カマド・煙道部一覽表

遺構名	形態No	カマド位置	壁北からの概れ	煙道形態	焚口～煙道区別	煙道の長さ	総敷部径	煙道巾	袖部有無	煙出し部	径	出土遺物
第3号住	第一形	南東隅	南方向 N-180°-EW	水平構造	有段差6~8	約120cm	35×40	約30cm	無	有	30×30	A+B+C(B>A>C) 須恵ガマ、土師ガマ
第8号住	第一形	南東隅	南東方向(a) N-135°-E	〃	有 4~5	〃 115cm	50×45	〃 30cm	無	私有地に食い込み不明	不明	A+B+C(B>A>C) 須恵ツボ
第10号住	第一形	西壁中央部	北西方向 N-84°-W	〃	有 3~4	〃 150cm	35×20	〃 42cm	有	有	35×35	A+B(A>B) ヘラ切り③
第12号住	第一形	西壁中央部	南西方向 N-105°-W	〃	有 3cm	〃 120cm	40×35	〃 35cm	有	有	34×37	A+B(B>A)
第11号住	第一形	西壁中央部	北西方向 N-83°-W	〃	有 4cm	〃 150cm	40×40	〃 40cm	有	有	45×47	A類 B・Cふくまず
第7号住	第一形	南東隅 ② 東壁南隅 ③	南東方向(a) N-134°-E	縦積制	やや有段差3~4	平均 131.00cm	平均 40×40	平均 35.4cm	有 粘土状高まり	〃	平均 36×37.2	B中心・C類減少
第5号住	第一形	東壁南隅 ④	南東方向(b) N-127°-E	〃	やや有段差2~3	〃 94cm	50×40	〃 30cm	有	〃	〃	A+B+C(A>B>C)
第1号住	第一形	東壁南隅 ⑤	北東方向 N-55°-E	〃	やや有段差2~3	〃 70cm	25×45	〃 30cm	無	〃	25×20	A+B(B>A) ヘラ切り
第9号住	第一形	東壁南隅 ⑥	北東方向 N-47°-E	〃	やや有段差2~3	〃 95cm	50×50	〃 40cm	無	〃	25×30	B中心 A・Cなし
第5号住	第一形	南壁中央部	南西方向 N-147°-W	〃	やや有段差1~2	〃 72cm	40×40	〃 40cm	有 粘土状高まり	〃	無	B中心 若干C類あり
第4号住	第二形	南壁中央部 ④ 南壁中央11	南東方向(a) N-133°-E	中央部小窪	やや有段差2cm	平均 83.00cm	平均 41×43	〃 33.00cm	有 粘土状高まり	〃	平均 25×26	B中心 C類減少
第2号住	第二形	東壁中央部	南東方向(c) N-117°-E	〃	無直結	約100cm	45×50	約50cm	有 粘土状高まり	無	先施座 45cm	A+B+C(B>A>C)
第6号住	第二形	東壁中央部	南東方向(c) N-118°-E	〃	無直結	〃 63cm	30×20	〃 25cm	無	無	40×35	B+C(B>C)
第3号住	第三形	東壁中央部 ③	南東方向(b) N-126°-E	上り傾斜	無直結	〃 70cm	35×40	〃 45cm	無	無	30cm	A+B+C(C-B>A)
						平均 77.66cm	平均 36.6 × 36.6	平均 38.33cm	無と解釈	〃	先施座 38.33cm	B中心 C類多し
						約60cm	35×60	約30cm	無	無	先施座 25cm	C類多し A+B+C(A>C>B)

2 出土遺物について

(1)分類とその結果

本遺跡における出土遺物は、土師器・須恵器・鉄製品・磁石・緑釉陶器片等がある。ここでは坏類を中心として下記の如くA・B・Cの三類に分類した。坏類は実測可能なもので77点の出土をみる。その内訳は、A類17点、B類38点、C類22点である。

以下、a—各類について、b—分類基準、c—分類結果、d—タイプ設定、e—各タイプの特徴について記す。

a. 各類について

- A類—くすべ色を呈し、胎土は密で焼成良好の所謂典型的な須恵器坏の一群
- B類—赤褐色あるいは黄橙色を呈し、一見して酸化焙焼成によると解され、胎土は全体的に粗であり、A類より軟質のもの。内外面に器面調整を施さず、成形技法、焼成、色調等の観点でみる限りでは、所謂須恵系土器、赤褐色土器、土師質土器等と呼称される坏群に比定され得る一群の坏である。
- C類—酸化焙焼成によるロクロ成形土師器坏。内面に黒色処理・艶磨き等の調整を持つ。

b. 分類基準

(切離し技法、調整の有無、再調整部位等について)

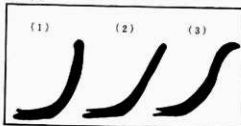


(形態による分類)

口縁については、右図(1)の様に直口、あるいは内湾するもの、(2)外傾、(3)外反するものの三種に分類される。(第56図)

体部の凹凸については、イ顕著なもの。ロややある。ハ目立たない。の三種類に分

第56図



類される。

〔数値による分類〕

口径a、底径b、外傾角度θについては、度数分布による数値の確定であり、器高d、a/bについては測定値あるいは計算値をそのまま使用している。

<口径a>cm <底径b>cm <外傾角度θ>

- | | | |
|-----------------|---------------|-------------|
| 1 (12.5cm以下) | 1 (4.5~5.1cm) | 1 (45°以下) |
| 2 (12.6~13.5cm) | 2 (5.2~5.8cm) | 2 (46°~48°) |
| 3 (13.6~14.5cm) | 3 (5.9~6.5cm) | 3 (49°~51°) |
| 4 (14.6~15.8cm) | 4 (6.6~7.3cm) | 4 (52°~54°) |
| 5 (16.0cm以上) | 5 (7.4cm以上) | 5 (55°以上) |

第56図



e. 分類結果

本遺跡では、77点の坏が出土しているが、前述の(1)、(2)、(3)の各分類の結果を集約すると第46表のようになる。但し、形態的な特徴については、遺構毎の遺物項で記したので、ここでは再述せず、切離しと数値についての分類を中心に記す。

第46表 分類一覧表

分類	実写	種別	切離し	調整技法	調整部位	口径値(cm)	底径値(cm)	器高(㎝)	a/b	外傾角度(θ)	その他
第1号住居跡	53	37	B	b	1	3	3	5.5	2.4	4	B-b-1
	2	20	C	b	1	(2)	3	4.7	2.1	4	C-b-1
第2号住居跡	1	/	B	b	1	4	1	5.2	3.2	2	B-b-1
	3	21	B	b	1	2	2	4.9	2.3	4	蓋書あり B-b-1
第4号住居跡	25	/	A	b	1	(4)	(1)	5.0	3.0	1	A-b-1
	22	/	B	b	1	(4)	(4)	5.0	2.2	3	B-b-1
	23	22	B	b	1	3	2	5.1	2.7	3	蓋書を含む B-b-1
	24	23	B	b	1	(2)	(1)	4.9	2.6	3	B-b-1
	25	/	B	b	1	(5)	2	4.1	3.1	1	B-b-1
	27	24	B	b	1	2	1	5.4	3.0	1	B-b-1

	80	/	B	b	/		2	2	4.5	(2.7)	/	B-b-
第5号 住居跡	29	32	B	b	1		3	4	4.7	2.2	3	B-b-1
第6号 住居跡	28	1	C	b	4	ホ	4	3	5.5	2.5	4	雷母を含む C-b-4-ホ
	83	2	C	c	/		4	4	5.2	2.2	4	雷母を含む C-c
第7号 住居跡	37	/	B	b	1		(3)	(2)	5.5	2.7	3	埋土中 B-b-1
	38	29	B	b	1		(4)	2	4.6	2.9	1	埋土中 B-b-1
	81	30	B	b	1		3	3	4.9	2.2	4	B-b-1
	82	28	A	b	1		(3)	(2)	4.4	2.6	2	A-b-1
第9号 住居跡	42	38	B	b	1		(3)	2	5.2	2.5	4	B-b-1
第10号 住居跡	47	33	A	b	1		4	4	4.0	1.9	3	A-b-1
	48	34	A	a	1		3	4	4.1	2.1	3	A-a-1
	49	35	A	a	1		3	4	4.1	2.3	3	A-a-1
	87	36	A	a	1		(2)	4	3.9	1.8	3	埋土中 A-a-1
第11号 住居跡	54	51	B	b	1		3	2	5.8	2.5	5	B-b-1
第13号 住居跡	8	/	C	b	1		(3)	(4)	5.0	2.0	5	C-b-1
	9	5	C	b	1		(5)	(5)	6.4	2.2	5	C-b-1
	10	6	C	b	1		2	3	5.3	2.0	5	C-b-1
	11	7	C	b	1		3	3	5.3	2.2	5	C-b-1
	4	8	C	b	2	口	3	3	4.5	2.3	3	C-b-2-口
	5	9	C	b	4	ニ	3	4	5.2	2.0	5	C-b-4-ニ
	6	/	C	b	4	ニ	3	3	5.6	2.2	5	C-b-4-ニ
	7	10	C	b	4	ニ	2	2	5.4	2.4	4	C-b-4-ニ
	12	11	C	b	3.4	ホ	3	4	4.5	2.1	4	雷母混入 C-b-3.4-ホ
	13	12	C	b	4	ニ	3	4	5.7	2.0	5	雷母混入 C-b-4-ニ
	15	13	A	b	1		3	3	4.8	2.5	3	A-b-1
	18	/	A	b	1		(2)	(4)	4.5	2.2	4	A-b-1
	19	/	A	b	1		(4)	(2)	4.5	3.0	2	A-b-1
	20	/	A	b	1		(4)	3	4.5	2.5	2	A-b-1
	21	/	A	b	1		(4)	3	5.2	2.5	3	A-b-1
	17	14	A	c	/		(4)	(3)	(5.0)	2.5	/	A-c
14	15	B	b	1		(4)	2	5.4	2.5	3	B-b-1	
16	16	B	b	1		4	3	5.9	2.4	4	B-b-1	
第15号 住居跡	32	3	C	b	3	口	3	3	4.5	2.3	4	雷母混入 C-b-3-口

第15号 住居跡	35	4	C	b	3	□	3	3	4.5	2.2	4	墨書あり C-b 3 □
	36	/	A	b	1		(2)	(2)	4.1	2.4	2	A-b-1
第16号 住居跡	45	18	C	c	/		(3)	(4)	4.8	1.9	4	墨母 C-c
	46	19	B	b	1		(3)	(4)	4.5	2.1	3	B-b-1
第17号 住居跡	30	/	C	b	1		(4)	4	5.9	2.3	5	埋土中 C-b 1
	31	17	C	b	1		3	3	5.1	2.3	3	C-b-1
第19号 住居跡	41	25	A	b	1		(4)	3	4.6	2.3	2	A-b-1
	39	28	B	b	1		(3)	4	5.1	2.0	4	B-b-1
	40	27	B	b	1		3	2	4.8	2.5	3	B-b-1
第21号 住居跡	43	31	A	b	1		4	2	4.9	2.8	3	埋土中 A-b-1
第23号 住居跡	50	49	B	b	1		5	4	6.4	2.0	5	埋土中 B-b 1
第24号 住居跡	59	52	B	b	1		2	2	5.6	2.7	1	埋土中 B-b-1
第1号塚 穴状遺構 (Cg65)	69	/	B	b	1		3	2	5.2	2.5	3	B-b 1
	70	39	B	b	1		1	3	3.6	1.9		B-b 1
第9号 ピット	86	/	B	b	1		(3)	1	5.1	2.7	3	表上 B-b-1
第8号 ピット (Bf68)	66	/	C	b	1		(3)	(2)	5.0	2.7	4	C-b 1
	65	44	B	b	1		(4)	(3)	4.5	2.5	1	B-b-1
	67	45	B	b	1		2	2	6.1	2.5	5	B-b 1
	68	46	B	b	1		3	1	4.7	2.8	2	墨書あり B-b-1
第12号 ピット	64	50	B	c			3	(4)	5.9	2.1	5	墨書あり B-C
第16号 ピット	55	/	A	b	1		(3)	(3)	(4.6)	2.2	3	埋土中 A-b 1
第23号 焼土遺構	51	47	B	b	1		(4)	3	4.6	2.3	3	B-b 1
	52	48	B	b	1		(4)	2	5.1	2.8	2	B-b 1
第1号 方形焼土 遺構	71	/	B	b	1		(4)	1	5.4	3.1	1	B-b 1
	72	53	B	b	1		(3)	2	5.5	2.5	2	B-b 1
第1号 焼土遺構 (Ba56)	60	40	B	b	1		3	2	6.0	2.7	4	灰母若干混入 B-b 1
	61	41	B	b	1		(3)	(4)	5.3	2.0	5	B-b 1
	62	42	B	b	1		(4)	(5)	5.1	2.0	4	B-b 1
Aef 03 地点	63	43	B	b	1		(3)	(3)	5.1	2.2	5	B-b 1
	56	/	C	b	1		(3)	(4)	5.3	2.6	5	I層出土 C-b 1
	57	/	B	b	1		(4)	2	5.5	2.7	4	I層出土 B-b-1
Da 65 地点	73	54	B	b	1		(4)	(4)	5.4	2.1	4	I層中 B-b-1
第4号溝	74	/	C	c	4	ホ	(5)	4	5.3	2.3	3	溝内埋土中 A J62 住との 切合い (C-c 4-5)
不 明	75	/	B	b	1		4	2	5.0	2.8	3	B-b 1

() 内は推定値である。

以上77点の坏についての分類を記したが、これらの切離し技法についてまとめると第47表のようになる。これで解る通り、本遺跡では回転糸切を主流としており、特にB・C類にあっては随切によるものはない。また、再調整を有する坏はC類に限定されるが、22点中10点に調整が確認される。C類は更に第48表(1)、(2)の如くに分類される。

第47表 底部切離技法一覧表

切離し 種類	a (へら切)	b (回転糸切)	c (不明)	計
	A類	3	13	
B類	0	37	1	38
C類	0	19	3	22
計	3	60	5	77

第48表(1)

調整の有無	調整の有無		
	有	無	不明
C類	10	10	2

第48表(2) 調整方法一覧

C類 技法別個体数				
回転へら削り	手持へら削り	へらみがき	その他	
体部下端	体部下端	口縁部分	その他(全面)	口縁-体下端
1	2	4	2	1

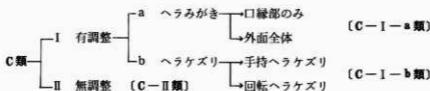
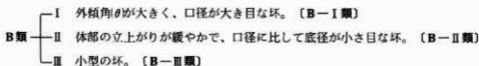
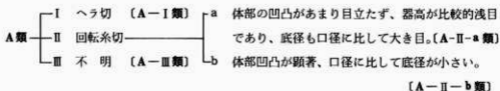
これ他に、床面上からA・B・C各類合わせて底部部分が33個体分出土している。A類は15点、B類は16点、C類2点はその内訳である。へら切はA類に一点あるが、他は回転糸切によるものようである。但しC類については、回転へら削り調整を有して切離しが不明のものと、内外面とも黒色処理、へらみがき調整が観察されるものの2点である。

B類にあっては、磨滅しているため切離し技法の不明な底部片が一点あるが、他は全て回転糸切によるものであり、A類と共に残存する部分にあっての再調整の痕跡はみられないようである。

d. タイプ設定

以上の分類結果で明らかになった特徴を抽出し、総合的な立場からみていくと、A・B・Cの各類は、最終的に各々Ⅰ～Ⅲ類に整理区分される。但し、この段階における分類は、床面上かそれに近い出土をみせる坏に限定してある。また、計測値を重視した分類については、一部の反転復元による坏をも除外してある。これは流れ込みなどによる混入、測定値の誤差が許容量以上に予想される場合等などの不確定的要素を可能な限りとり除くための配慮である。したがって、ここでは、埋土における出土遺物の取扱いについて異論もあろうが、実測した77点のうち、床面近く、しかも全体の形状がかなりの精度で確認し得る49点の坏についての記述である。

なお、49点の内訳については、A類9点、B類21点、C類19点である。これらは次頁のように分類されるが、以下については、A-Ⅰ類、B-Ⅲ類、C-Ⅰ-b類等の如く記号で示していくこととする。



e. 各タイプの特徴

— A類 —

A類全体では、反転復元の環をも含め、実測可能環は17点ある。切離しについては、前項の通り、A-I、A-IIの両様があり、13：3の比を示す。A-IIIは一点あるが割離のため不明である。

この他に切離痕を残す底部片が16点あり、これらをも含めた切離しの全体比は、ヘラ切：回転糸切＝4：27と回転糸切が圧倒的に多く、全て無調整の環である。ヘラ切の環を出土する住居跡は、第1・10号の2棟あるが、何れの場合も麓切だけの出土ではなく、回転糸切を共伴するあり方を示している。後者は底部片の出土である。

A-I類に属する環は、第10号壑穴住居跡よりNo.48、49、87の3点が出土している。本遺跡では特異な出土状況を示す一例である。これら三点の環は、ヘラ切で切離したままで再調整を有しない坏群であり、器高が低く、底径が大き目なものである。計測値の比較結果では、底径値が口径値の半分からそれ以上の比を示している。口縁は僅かながらも外反し、糸切による環に比べると、体部と底部の境界がやや不明瞭である。No.48、No.49の環は、完形品であり、両者とも外傾角度50度、器高4.1～4.2 cm、底径と口径の比が1：2.2位とほとんど同値に近く、胎土・色調とも同様である。更にこの2点の環は、遺構の出土遺物でも記した通り、回転糸切による須恵器環（No.47）と共に三枚重ねで出土したものであり、同一工人による製作の可能性を示唆するものである。これに対してNo.87の環は、還元焙焼によるものではあろうが、一部酸化焙焼成的な色調を呈しており、底部は厚く、雑な作りである。

A-II類は、回転糸切による切離しの環であり、No.47を除き、A-I類に比して底径値が小さいようであるが、逆に器高はそれより高いのが特徴である。これらの環は、更にA-II-a、